

真理はあたたかい

釈尊と法華経との体用たいゆう関係について

日高白象

曾って九州地方を托鉢行脚の修行に明け暮れしていた或る冬の日のことでした。

たまたま福岡県田川郡金田町の人見という所で牧場を経営されていた本田量久さんという御信者の家に逗留中、九州布教のため東京より西下されて来た井上清純先生と邂逅することが出来ました。



先生は大正の末期より戦前戦後を通し終始一貫、法華経によって現代思想を善導すべく全国的に布教され「如是我聞」等の彪大な著述もされており、法華経教学に対する造詣の深さでは、在家ながら日蓮門下の中でも有名すぎるほどの方でした。この時、私は初対面でした。初めてあった先生は瘦身自髪、六十代の老紳士でした。もと天皇の侍従武官をされたことがあったというだけに、古武士のような厳正な面影をとどめていましたが、それにもかゝらず、肌はすき通るように澄み切っており、眼には深い温い光りをたゞよわせていました。また二十代の血気さかんであった私は、このめぐりあいの好機を逸すまじと、日頃疑問にいただいていた教学上のあらゆる問題を、次々に発しては息のつく暇もなく、くいさがるように尋ねつづけました。それはもはや質問の域ではなく、むしろ挑戦といったような態度であつたかも知れません。先生は内心へとんでもない荒法師にでつかしたものだ〜と苦笑しておられたかも知れませんが、然し応け答えられ

る先生の物腰にしても言葉にしても、あくまでも静かであり、あくまでも柔らかいものでした。

冬の日射しはガラス戸を通して、縁側を暖かくつゝんでいました。お昼休み、先生は縁側に坐ってヒナタボッコをされましたが、その中、疲れでも出られたのか、コックリコックリ心地よい居眠りを始めました。舟をこいでいる謹厳な老教学者、そのほゝえましい姿に心ひかれて「私も先生にあやかろう」と縁側へ出た時気配を感じてか、フト眼をさまされた先生が、ニッコリされながら、次のようにつぶやかました。それは「真理はあたゝかい……」

というひとことでした。ポツンとつぶやかれたひとことの言葉、それは聞きとれないほど低く細い声だったので、蓋し当時の私の心を、これほど強く打ったものはありませんでした。いなそれは、浩かん難解な仏教哲理を理論整然と解説する如何なる熱弁にも勝る重みをもっていた。といっても決して過言ではなかったでしょう。何故ならば、それまでの私は、いや私ばかりでなく大抵の人々もそうであるように、

「真理とは知性上のもの、感情のともなわない冷いもの」

とのみ思い込んで、真理を手がかりとしながら、悟りの境地を求めものにキウキウとしていたからです。学問の仕方が既にそうである以上、修行の仕方もまた同様でした。お題目を唱えるにしても、あたか

井上清純先生

も高嶺にかゝる実相真如の月を仰ぎながら、お題目を地図とし杖とたのんで、道なき峻嶮を一步一步とよじ登っていたようものでした。ところがそうした行にせよ学にせよ、追求すればするほど不安や苦悩を増すばかりであって、遂には一片の安心立命すらも得られないまゝ、中途にして挫折せざるを得なくなってしまうものです。愛なき真理、愛なき行、それは峻烈以外なもの



でもありません。悟りの境地は大いなる愛の世界であると標榜しても、愛なき手段によっては愛の目的地に到達されるはずはありません。手段と目的は常に一如していなければなりません。

本来、真理は冷たいものでなく、太陽の光が常に明るあたくかいように、真理もまた常に明るあたくかいものであつたのです。太陽をはなれて太陽の光はありません。光なき太陽は既に太陽ではありません。太陽を体とし、光を用（働き）とするならば、体と用は一にして二、二にして一、本来不二なるものなのです。それと同様に、仏陀をはなれて真理はなく、真理をはなれて仏陀はありません。いや仏陀が真理そのものであり、真理そのものが仏陀のすべて（慈悲・命）でもあつたのです。

曾って仏陀は、諸行無常・諸法無我・寂靜涅槃という三法印をはじめとして四諦・八正道・十二因縁・六波羅密、等々の無量の真理を説き示されました。然し諸行無常というその一句にしても、単なる真理の一片ではなく、実に仏陀の全人格を悉く投入したものであつたのです。法華経では諸法実相・一念三千の法門が展開されていますが、このことにしても仏陀の人格・仏陀の慈悲というものを抜きにしては到底その実を得ることは出来ないであります。げに「一々文々是真仏」、経文の一字一字は悉く仏陀が、その全生命を吐露された全句であつたのです。お題目にしても、その通りです。日蓮大聖人が観心本尊鈔の中で、「釈尊の因行^①果徳^②の二法は、妙法蓮華経の五字に具足す」と喝破され、また四信五品鈔の中でも、「妙法蓮華経の五字は、経文に非ず、その義に非ず、たゞ一部のころのみ」と道破されている通り、お

*①悟りという「果」を得るための「因」としての修行。数多くの前世の菩薩時代の修行を含む。

*②修行の結果得た佛の能力・特性。衆生を救う力・慈悲など。

題目は単なるお経の文字ではなく、またその教理を示そうとしたものでなく、たゞ全く法華経一都（八卷二十八品）の肝心である本門の八品（特に如来寿量品）に顕現された本仏積尊のその久遠の因行と果徳、即ち久遠の命そのものであり久遠の祈りそのものにほかならなかつたのです。水南禪師は、その偈に

「体に即する用を知とい、用に即する体を寂となす。灯に即するとき灯が光で、光に即するとき光が灯であるようなものだ。灯を体となし、光を用となして分けてはみるが、これは二つでなくて而も二つなのだ」と説かれています。まことに体即用、用即体、用をはなれて別に体があるのでもなく、またその体が用の主となっているのでもないのです。もとより本仏積尊をはなれてお題目があるのでもなく、お題目をはなれて本仏積尊もありうるものではありませんが、こゝで注意しなければならないことは、本仏積尊の奥に、積尊を積尊たらしめている主なるお題目があるのではなく、またお題目の奥に、お題目をお題目たらしめている主なる本仏積尊があるのではないということです。積尊とお題目との体用関係について日蓮大聖人は、しばしば母親とその母乳のたとえをもって説明されています。まことに解りやすい適切なたとえなのですが然し往々にして母親を体とし母乳を用と見なしても、母乳の奥に母親を見、母親がいなければ母乳はありえないという考えに堕ち入ったり、甚しきに至っては母乳が体で母親が用ということは絶対にありえない、母乳は母親の一部であり、母親あつての母乳ではないか、という考えに堕ち入りがちであります。

これは一見、もつともらしく思われますが、然しお乳を求めて火がついたように泣き叫ぶ我が子に、お乳を与えない母親が何処におりました。若し母親の乳房からお乳が出なければ、母親は赤児のために、代るべきお乳を求めて、気でも狂つたかのように採し廻るはずです。こゝではもはやお乳こそ主であり、母親は用となっているではありませんか。女体と母乳といえは、たゞその限りでは母乳は女体の一部分より排出

されるにすぎないものかも知れませんが、乳のみ児に対した時、母親と母乳は、互に体用不二となっているのです。事実、乳のみ児にとっては母親はそのまゝ母乳であり、母乳はそのまゝ母親でしかないのです。

日蓮大聖人は、このたとえから末法の一切衆生を、しばしば「末代の幼稚」と申されましたが、法華經を信ずる者は、あたかも幼児が母親を母乳と思い、母乳を母親と思うように、本仏釈尊それ自体にお題目そのものを見、お題目のそれ自体に本仏釈尊そのものを仰ぐのです。いやそういう信仰の人こそ、まことの法華經の行者と申せましょう。

曾つて、仏陀の説かれたひとことの教え、一片の真理にも仏陀の限りなき慈愛がこもり、仏陀のいのちが脈うっているものでした。

「真理はあたゝかい」

「真理は生きている」

この感動は、仏陀と真理を体用不二の関係に見ることの出来る者にこそ、はじめて与えられるものなのです。またこの見地に立つならば、まして法華經は仏陀が久遠の本仏として、その骨髓の全生命を、叡智も慈悲も、力用も功德も、悉く顕発し尽して封じこめたものであるだけに、法華經をたもつことが、そのまゝ本仏の命をたもつこととなり、お題目を唱うれば、本仏の温き血潮がお題目として我が全身に横溢し、「法華經はあたゝかい」

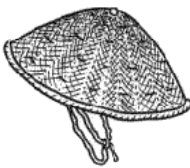
「法華經は生きている」

という感動が、実感的に肌にも感ぜられて来るのです。そこにはもはや本仏と自分自身との間におかれていた遙かなる距離もなく、唱題の当所が、そのまゝ、靈山浄土の仏界となっており、過去、現在、未来の三

世を通して、生きとし生けるすべてのものに、在りとしあらゆるすべてのものに、一木一草、一礫りやく一塵じんにまでも、限りなき価値が見出されて来るのです。まことに法華経こそ、久遠なる仏陀の一切衆生に対する「大いなる愛の調べ」。お題目こそ「大いなる愛の祈り」なのです。私たちがこの大いなる調べに乗つて法華経を誦し、この大いなる祈りに乗つてお題目を唱える時、はかなき人間愛は、我にもあらず、何時の間にか、限りなき仏陀の愛に包摂昇華されているばかりでなく、その当所に宇宙的大ハーモニーの世界が現成しており、太陽も月も星も、そして流るゝ雲、こち吹く風までも、天地のすべてのものが、私たちと同じ「愛の調べ」をかなでており、同じ「愛の祈り」を捧げているという雄大なる仏界の事実を認識することが出来るのです。そこには老若男女、貧富貴賤の相違もなく、業の深重じんじゆう、罪の軽重けいちゆうすらあるはずはありません。すべては仏子であり、三界はみな仏国なのです。

かえりみれば初めて井上先生の警咳に接してより、およそ二十年の歳月が流れていますが、昭和四十三年一月五日、先生の第七回忌を迎えるに当り、この二十年の歳月こそ「真理はあたゝかい」という先生のこの一句の修証しゆじゆにあつたのではなかったか、という思い禁じ難く、謹んでこの小稿を先生の霊前に捧げるものです。

『鷲峰』昭和四十三年正月号より



*① 悟り（証）を修行によって証明すること。

仏界転入

○人として成仏を願わないものではありません。先祖の成仏だけでなく自己の成仏を願うのです。成仏とは申すまでもなく仏界（仏の浄土）に住することであり、住するといっても自分一人独善的に住するのではなく、仏の使い（菩薩として）活躍することです。身は穢土（えど）にあるとも心は浄土に住して、穢土の娑婆世界に浄仏国土を建設せんと努力することこそ仏界の根本義でなければなりません。では、どうして仏界に住することが出来るのでしょうか。

○通常、「迷いの此岸から悟りの彼岸へ渡る舟はお題目である。お題目の舟に乗って果てしなき生死輪廻の大海を渡ることが出来る」といわれています。しかし此岸と彼岸の対立のある以上、舟をどこまでこいでも、この対立より離れることは出来ず、従って彼岸に到達することは不可能であると申されましょう。お題目を舟にたとえるのは不適當であり間違いです。同様にお題目を悟りの山の頂に登るための地図であり杖であると警えることも間違いです。

○ではお題目とはどのようなものであるかという点、日蓮大聖人はこれを仏種といって、久遠の本仏釈尊の精進にたとえ、如何に下賤の女でも大王の種を宿せば、生まれた子供は太子であるといわれており、また植物の場合には蓮華の花と実にとえ、如何に汚辱の泥中たりとも、ひとたびこの仏種がうえられるや、その刹那に発芽と開花と結実が同時に起こるとも申されています。蓮華には花と実が一緒についています。

花が因、実が果とすれば、文字通り華果同時であり、因果同時であり、下種の当所既に成仏の大果がはらまれているのです。舟に乗じて生死の大海を渡らなくても、斧をもって煩惱の密林を伐り開かなくても、お題目を受持する当所そこに仏界は顕現しているのです。久遠の本仏釈尊より下されたお題目という一粒の仏種を、私達の信心に受けとめた時、その刹那、信田に開花と結実が、たちまちにして起こり、ここを基点として広大無辺なる仏界が現れ、即転してその仏界の中に住せしめられている自分自身を見出すことが出来るのです。それはもはや昔日の自己ではなく、本仏釈尊によって生かしめられている真の仏子、仏勅の人、いわゆる法華経の付嘱をうけた地涌の菩薩と申されましょう。またその世界は、これまでのような慟哭の山河ではなく、山河微笑の世界、心なき花も木もお題目を唱和している世界でありましょう。穢土より仏界への即転即入、これぞお題目の功德にほかなりません。

○日蓮大聖人の第一の檀越であった富木入道常忍が、亡き母の遺骨を奉じて身延山にもうでた折、聖人が入道へ与えられたお手紙の中に、

我が頭（こうべ）は父母の頭、我が足は父母の足、我が十指は父母の十指、我が口は父母の口なり。
たとえば種子（たね）と果子（このみ）と、身と影との如し。教主釈尊の成道は浄飯（父）摩耶（母）の得道。吉占・師子・青提女・目犍尊者は同時の成仏なり。かくの如く観ずる時、無始の業障たちまちに消え、心性の妙蓮たちまちに開きたもうか。

と申されている「心性の妙蓮たちまちに開く」というのも、お題目の下種による仏界転入の消息を物語るものでありましょう。

○仏界転入の大威力をもつお題目は、日蓮大聖人が「経文にあらず、その義にあらず」と仰せられている通り、法華経の文字ではなく、また法華経の哲理・真理だけでなく「釈尊の因行果徳の二法」と示されている通り、本仏釈尊の久遠の因行（修行）と久遠の果徳（成道と救済）の不二体となっている久遠の全生命（骨髓・血肉）なのです。従ってこのお題目を受持すれば、おのずから本仏釈尊の骨髓は私達の骨髓となり、血肉もまた私達の血肉となって躍動して来るのです。俗に「お題目は阿弥陀如来や薬師・大日等の十方の諸仏の体と功徳の集まったものとか、更に諸天善神の体と威力の集まったものとか、或いは凡夫本具の仏性を総称したもの……」等というものもありますが、決してそうではなく、むしろ却って十方の諸仏・諸天善神も私達一切衆生も悪鬼悪霊さえも、生きとし生けるすべてのものを悉く本仏の仏界の中に、その所を得せしむものが、このお題目なのです。従ってこのお題目をひとたびも唱える時、そのお題目の中より、既に本仏釈尊によって成就されている十界円融の仏国土が事相として顕現されるのです。日蓮大聖人が図顕された仏滅後未曾有の大マンダラとは、この様相を物語るものにほかなりません。

○人の信・不信にかかわらず本仏の仏界は、私たちの住むこの地上に実在しています。そしてこの仏界は私たちがお題目を唱えることによって事相として地上に顕現するのです。日蓮大聖人がその全生涯を賭して獅子吼された立正安国というのは、安国のための立正ではなく、立正の実践によって安国という結果のあら

われることであり、立正の正とは真理という意味のみの正法ではなく、実に法華經本門の三寶具足する大マンダラ仏界のことであり、この仏界の顕現こそ立正といたったのです。

○人の入信の動機は千差万別であり、世の無常を感じたり、罪悪深重を懺悔して入信する人もいますが反省や懺悔が入信の条件ではありません。お題目信仰は無条件です。罪悪深重煩惱熾烈のままお題目を唱えることです。お題目によってはじめて真の反省も起こり、真の喜びも覚えることでしょう。法悦の涙、懺悔の涙……この涙こそ、み仏より与えられた真実の涙と申せましょう。

(昭和四十六年二月十一日記)

お題目に乗じて

○世界的に有名な版画の巨匠棟方志功氏が文化勲章を受章した直後のことです。さっそくテレビでインタビューを受けて受賞の喜びを色々と言っていた時、司会者の次の質問に答えた氏の言葉は余りにも印象的でした。司会者は次のように質問しました。「先生はお仕事にかかれると三日も四日もアトリエにとじこもったきりで、まるで不眠不休、ろくろく食事もとられず悪戦苦闘されているようにうかがっていますが、さぞ、お疲れになられることでしょうかね」

ところが氏の返事は全く、本当に全く意外でした。

「ええ、よく人から、そんな質問をされることありますが、当人の私は少しも疲れを覚えたことはありません。ただ楽しいばかりです。ノミが独りでに次から次へと動いて、走るように彫って行くものですから……有難いことですね」

さりげない此の言葉の裡には、さすが巨匠なればこそ、という千金の重みが感ぜられます。自分がノミを道具として一心不乱になって板に版画を彫るのではない、ノミが独りでに動いて彫っている、彫っているのは自分ではなくてノミだということです。そこには、巧く上手に彫ろうとか、傑作をものにしよう、というような野心も作為もないことでしょうか。心と体とノミの対立もないのでしょうか。おそらく考える心もノミもつ腕も体全体までも無となり、無の心身がノミ一本と化し、ノミが托霊した生きもののように動いて板の上

に刻々と、価値の世界を創造して行くのでしょうか。無機物のノミを生きもののように動かしているものは、勿論、氏の俗念ではなく、氏を超えた限りなき価値悲願そのものかも知れません。それを知っているのは、当人ではなく、彫ろうとしている一本のノミと、彫らしめようとしている一枚の板、そうです、この心なきノミと板だけかも知れません。そして当人はむしろ、版画が仕上がった時、その結果を通して、はじめて自分自身の心が確認せしめられるにすぎないのかも知れません。

○このテレビ放送に前後して同じテレビに洋画界の重鎮である林武氏の芸道体験談が放送されたことがありました。やはり司会者の質問に答えてのことでしたが、この時、氏は次のように自分自身の芸道開眼についての体験を語っていました。

「私が画道で身を立てようと発起した当時は、本当に死にももの狂いでした。しかし画いても画いても得心のゆく絵は出来ません。とうとう画で身を立てることを断念して筆も絵具も押入の内にほうりこんでしまいました。そしてフト空を仰いだ時、そこに果てしなく透き通った紺碧の空に白雲が浮いていました。それは、今が今まで眼にふれるものは悉く画の題材と思いつめ探求しつづけて見ていた自然とは全く次元を異にした悠久なる偉大なる自然そのものでした。これだ、これが絵の心だと感じました。それから再び筆をとりましたが、爾来、会心の絵一枚を画くにしても並大抵な苦労ではありませんでした。会心の絵が描けるには、私の背後にあって、私をして画かしめようとしている眼に見えない霊的な何ものかと一体になってしまっただけでなく、もうほかはなかったからです」

○今この二人の巨匠の言葉を対照してみれば、制作中であって一方は「楽しい」といい他方は「苦そのもの」と表現してはいますが、その内容は或いは同じであるかも知れません。それよりもまして心打たれる言葉は、手に持つものはノミと筆、向かうものは板とキャンパスという差こそあれ、等しく「自分が制作しているのではない。眼に見えない何ものかが自分自身の背後にあって、ノミや筆をあたかも意志ある生きもののように働かしている」という、その何ものかに対する絶対無、絶対帰依ともいわれるべき一致した謙虚さではないでしょうか。両巨匠は共に、その何ものかという宇宙大の偉大なる生命、その巨大なる意志というものを、観念的でなく全身全霊をあげて観じていたのです。その制作が完了した時、表現されているものに、それを表現せしめた宇宙大の命そのものを確認していたのであります。

○法華経の信仰についても、これと同様のことがいえると思います。いうまでもなく法華経の本尊（帰依の対象）は久遠の本仏釈尊であり、その因行（修行）と果徳（成道）の二法そのものが妙法蓮華経の五字（本仏釈尊の久遠の命）であり、生きとし生けるすべてのものを悉く成仏せしめんがために、本仏釈尊の久遠の命である妙法五字に南無（帰命）せしめんとする本仏釈尊の限りなき働きが、南無妙法蓮華経というお題目の七字なのです。救済はここに起こります。従って私たちの唱えるお題目は、私たちの欲求から唱えるものでなく、本仏釈尊から与えられたお題目、下から上へ（従因至果）のお題目ではなく、上から下へ（従果向因）のお題目と申せましょう。念仏の法門では南無阿弥陀仏の六字の名号を釈して、南無の二字を衆生の機・阿弥陀仏の四字を法として「法機一体」と申しておりますが、法華経における南無とは衆生の立

場に立つものでなく、実に本仏積尊の立場にあるものであって、本仏積尊が生きとし生けるすべてのものの、その善悪・美醜・罪の軽重をも問わず、悉くを撰取して、しかも一人漏らさず本仏積尊の久遠の命（妙法の五字）にいかしめんとする悲願・召喚・覚醒・会開・救済の南無なのです。日蓮聖人のしたためられた七字のお題目が、南無の二字をふくめて悉く光明点（俗にヒゲ題目）という筆法をもって法界あまねき本仏積尊の慈悲救済を現しているのも、その証であります。従って私たちの唱えるお題目は自分の心や自分の力で唱えるものでなく、本仏積尊の大慈悲願によって唱えせしめられているお題目でなければならないと申せましょう。これには本仏積尊とそのお題目に対する私たちの絶対信が必要です。この絶対信ですら本仏積尊とそのお題目によって誘発せしめられたものと申されましょうが、ひとたび此の信に立つ時、それまで遙か彼方におられると思われるいた本仏積尊は、もはや私たちの頭上に肌の温かさとして観ぜられ、止むことなき本仏積尊の声なきお題目の声は私たちの全身全霊を打ちふるわせることでしょう。そしてその音声に乗じ（乗せしめられて）我にもあらず本仏積尊のお題目を唱える時、その行為によって本仏積尊の久遠の命が確認されると共に、久遠劫来その命に生かしめられている仏子としての自己本来の久遠の命が確認されるのです。

（昭和四十六年六月十一日 記）

大曼荼羅がかたりかけているものへその一

○日蓮聖人が図顕された大マンダラは、私たちに對して一体何を語りかけているのでしょうか。日蓮門下七百年の歴史をふりかえってみれば、聖人が仏滅後未曾有の大マンダラを図顕し、これを本尊として弟子信者に授与したことが確かなる事実であることから、大マンダラを宗祖奠定（テンテイ）の本尊として疑うことなく、紙墨の大マンダラを壁にかけたり、或いは大マンダラ列座の諸尊を仏像として安置しては、これを絶対的な本尊形式として尊崇し礼拝して来ました。ところが不思議なことに、この七百年の間、宗祖が奠定されたということから此の本尊形式を絶対視し、やがて固定視したためでしょうか、神聖にして侵すべからずとも考えたためでしょうか、或いは末学の者の思議も及ばないものと考えたためでしょうか。宗祖が如何なる意味でこのような大マンダラを図顕されたのか、大マンダラは如何なる意義をもち、如何なることを私たちに語りかけているのか、といったような精神面はほとんど等閑にふされて来ていたのです。そして大マンダラ本尊形式を固定化して見る立場から必然的に、その中央に大書されているお題目を本尊とみなし、ここに釈尊を主体とする人本尊義と、お題目（真理）を主体とする法本尊義との論争が幾世紀にも亘って展開され、今日に至ってもなお解決されずにいるのです。また大マンダラ自体に本尊（釈尊）とお題目と戒壇の三秘が具足して、これが中央の一秘のお題目によって統一されているかに見られる様式から「一秘三秘」（一秘のお題目から三秘が開出する）という宗義が起こり、あたかも宗祖の根本的教義とみなされて来ているのも不可解なことです。滑稽なことは文字マンダラを仏像化した場合、中央のお題目を多宝塔に当て、多宝塔の表面にお題目を書いていることであり、形式の上から見ても文字マンダラのそれとは全く

異なったものとなっていることに気付かず、疑いさえ感じていないということです。

○日蓮聖人の大マンダラが、それまでの真言の金剛界・胎藏界の両部マンダラや念仏の浄土マンダラ、或いは天台の法華マンダラと比べて一見しても判る特色は、曾って前例もない文字マンダラであり、その中央にお題目が光明点の筆法で画面にあふれるばかりに大書されていることです。それはあたかも上は仏界より下は地獄界に至るまで十界のすべてのものが一人も漏らさず、悉くお題目によって統一されているかのように思われられるものであり、ここにお題目をもって本尊とする宗義・信仰も起きて来ているのですが、若し統一という表現が許されるならば、聖人の大マンダラが真言系や念仏系・天台系のマンダラの如く仏体を中心として統一されていないということ、即ち法華経の寿命品において開顕された久遠実成の本仏釈尊を中心として統一された様式をとらず、敢えてその内証仏法によって統一の表現をとっているということに聖人の深意をくみとらねばならないのではないのでしょうか。

○古来、大乘仏教では一切衆生の皆成仏道、草木国土の悉皆成仏が説かれ、特に法華経では釈尊みずから方便品に「一切の衆をして我が如く等しくして異なることなからしめん」と誓願し、寿命品には「何をもってか衆生をして無上道に入り速かに仏身を成就することを得せしめん」と悲願して、譬喩品第三から勸持品第十三に至る間、仏道を求めるすべての仏弟子・信奉者に対して未来成仏の大果を確約し、その風光までも彷彿せしめており、就中、極悪人提婆達多の悪逆の現身にすら未来成就する仏身を觀じ、その未来世に仏陀として施す無量の功德までも讃嘆されているのですが、果たして釈尊の大悲願の通り、靈界もふ

くめて地上の生きとし生けるすべてのもの、草木国土までも悉く釈尊と等しき仏身を成就した暁においては、一体誰がその中心的存在であるといえるのでしょうか。その宇宙大の社会に、なお秩序の統治者が必要なのでしょうか。すべての無上同価値の平等世界にあっては、ただ唯仏与仏の内証仏法があるのみではないでしょうか。この未来世において完成させる仏界は、気も遠くなるほど遙かなる未来ではなく、既に釈尊の己心中に現成されていたものであり、またそうであればこそ仏弟子の上にも悪逆の提婆達多の上にさえも未来成仏の大果を、確信をもって彷彿として語るのみでなく、その功德の無量なるを讃嘆せずにおれなかったのでありましょう。方便品に「我れ本（もと）誓願を立てて一切の衆をして我が如く等しくして異なることなからしめんと欲しき」という釈尊久遠の誓願につづいて直ちに「我が昔の所願の如き、今すでに満足しぬ」という釈尊みずからの大肯定こそ、過去悠久の釈尊の悲願と、未来久遠の衆生成仏の大果とが、常説法教化の行動に立っている釈尊の現在の己心中に、同時に成就されているものと解するほかはないであります。げに現在は過去の娘にして未来の母。悠久なる過去のすべてのものも、永遠なる未来のすべてのものも、悉く現在の存在としてあるのです。経文に「過去の因を知らんと欲せば現在の果を見よ。未来の果を知らんと欲せば現在の因を見よ」とあるのも、まさにこのことでありましょう。

○釈尊は精神界の統一者でもなければ組織の中心者でもありませんでした。ただひたすらに自ら仏知見の道を行じ、一切衆生をして仏知見の道に入らしめんとされるばかりでした。それは釈尊在世中の行為が、みずから雄弁に物語っているところです。釈尊は成道の朝より入滅の夕に至るまで、何時、如何なる処においても仏教の開祖として教団統治の中心の座につくこともなく、最高指導者としての高座に坐することも

ありませんでした。園林においても樹の下においても僧坊や信徒の家にあっても、仏弟子と共に車座になって法を説き、懺悔の集いの席では最初に懺悔の志をのべ、着るものも食べるものも仏弟子と同じインド最下層階級のものでした。毎朝の托鉢の時も仏弟子と同じく一修行者として托鉢されていました。ただ仏弟子や信徒、各国の国王・大臣から下層の民衆に至るまで、すべての人々が釈尊を主と仰ぎ、師と敬い、親と慕って蝟集し、その説かれる教法が単なる理論哲理ではなく命ある言霊（ことだま）として人々の心田深く沁み通って行き、限りなき光明として輝き渡っていたのです。日蓮聖人が大マンダラの中央に光明点の筆法をもってお題目を大書されたのも、全くこれと軌を一にするのではないのでしょうか。

〈続〉

―昭和四十六年六月十五日 記―

先祖供養の姿勢

日高白象上人 著

○世界中の多くの民族の中でも特に日本人は、祖先崇拜の念が強く大陸より伝来した仏教も、日本古来の祖先崇拜という土壌の中で、それと習合して日本独特の仏教文化を生み出して来たといわれています。夏のお盆、春と秋の両彼岸における先祖祭りなどは、現代人の信仰の如何にかかわらず、既に長い民族の伝統・風俗ともなっているほどです。先祖の一周忌・三回忌・七回忌という年回供養はもとよりのこと、毎月、日命日に当たる先祖の霊に対する追善供養をいとなんでいる人も少なくありません。

○然し、供養をしている殆どの人々は「先祖を供養することは良いことだ」「供養するのは子孫の勤めである」「この供養によって、さぞかし先祖は喜んでであろう」と、のん気に思っているのではないのでしょうか。何事も肯定しやすい楽天的な日本人は「死んだら、みなホトケ」と思い、「とてもお釈迦さまのような仏陀となることは出来ないにしても、仏さまの浄土には入っているだろう」と独り合点をし、その独り合点の上で、追福・追善の供養を楽しみ、数ある先祖の中には、生前の業・宿世の業を背負って、苦しみながら幽界をさまよっているものが少なくはないということすら露にも考えずにいるのが一般ではないでしょうか。年回の法事などには、お祭り気分もあるようです。果たして先祖の霊は一人残らず成仏しているのか。

しょうか。仏の浄土に入り、蓮華のうてなに坐って自受法樂しているのでしょうか。世間一般の人々が思っているように先祖の霊というものは、供養してもらいさえすれば、いとも簡単に成仏することが出来るのでしょうか。たやすく浄土に入ることが出来るのでしょうか。入場料を払って遊園地に入るような簡単なことなのでしょうか。

○本来、成仏というのは、お釈迦さまと等しい仏陀としての人格・靈格を、みずからの現身に成就するということです。百千萬劫、幾度生まれ替わろうとも即身成仏の実を結ぶべく努力することを修行というのですが、この修行を抜きにしては成仏もなければ浄土に入ることも出来ません。修行、それは成仏を究極の目的とする正しい信仰に入り、その信仰によって、仏とその仏を中心とする浄土（仏界）と感応一味となった法悦の体験をもつことです。

久遠の本仏お釈迦さまとの感応、本仏仏界との感応の世界……それを端的に表現したものが、実は日蓮大聖人図頭の大マンダラなのですが、この大マンダラを信仰の対境として、ただ相対的に仰ぎ敬うだけでなく、自分自身はもとより全宇宙を包む無辺なる立体的実在として観じ、この宇宙大の立体的大マンダラ仏界の中に、中天に輝く星座の一微塵としてでも仏子として生かされている自分の命……煩惱熾盛・罪惡深重のままながら久遠に輝く我が命にみずから感動することです。自分ばかりでなく一木一草に至るまで天地のすべてのものが久遠の命に息吹いているという事実を発見し、これに驚き、感動し賛嘆することです。

○このような信仰体験をぬきにしては、生前、如何に博学・高德・高邁な人であったとしても、死後、如何に追福追善の供養をうけようとも、成仏することは愚か、仏界に入ることも出来ません。霊を供養する

とは、花を飾り、お灯明やお線香を立て、食物・飲物を供え、お経をあげてもらうだけで、こと足りるものではありません。勿論、そういうことも大切なことであり、欠かすことの出来ないものであることは申すまでもないことですが、そういう形式を通して更に肝心なことは、供養をうける霊そのものが、本仏お釈迦さまの回向によって正しい信仰（即身成仏の信仰）にめざめることであり、この信仰によって本仏感応・仏界感応の歡喜・法悦を体験するということです。この信仰体験こそ、今生、生きている人にも、死後の霊にしても、仏界に入る絶対的条件であり、成仏の道に乗るのに欠くことの出来ない条件なのです。若し、この体験をするならば、人も霊も、罪悪深重なるその身そのまま、我にもあらず本仏の仏界に入らしめられているではありません。

○霊供養の真髓は、供養をいとなむ人が、まずみずから本仏感応・仏界感応の大マンドラ仏界に入り、三宝諸天の導きによって、供養をうける霊そのものが、供養をいとなむ人と共に、三宝を敬礼し共にお経をよみ、共にお題目を唱えることによって、本仏感応・仏界感応の体験を得、大マンドラ仏界に入ることであり、また先祖の魂をゆりゆすぶってでも、そうせしめることにあります。

○ところが供養をいとなむ人自身に信仰心がなく、少しばかりの信仰心はあっても本仏仏界感応の感動もなくして、どうして霊をして仏界に導くことが出来ましょう。供養をいとなむ人の、その深い感動、強い感動が霊の心をゆすぶり、共感と呼び、思わず霊をして三宝を恭敬賛嘆せしめ、共に読経唱題せしめるのです。形ではありません、心です。理屈ではありません、感動です。霊を供養する姿勢には、何はともあれ、この深い静かな強い感動が横溢しておらねばなりません。「寂靜」とは静止した冷たいものでなく、躍動した温かいものなのです。

○但し、ここで注意しなければならぬことは供養する者が、霊の上に立って、霊を仏界へ引き上げてやるという思い上がった姿勢をとってはならないということです。本仏お釈迦さまの前では一切衆生は、皆、平等であるはずです。霊の上に立ってもならないし、また横にいても遠く離れていてもなりません。手をとって引いてあげるといっても霊の体を抱きかかえ、霊の苦しみ悲しみも肌身に感じながら、霊と共に仏界に入り、霊と共に成仏してゆくという姿勢こそ肝心なのです。そういう人を菩薩というのではないのでしょうか。名もなき小さな菩薩……何時も、そういう人でありたいものです。



孝徳の集いに参加して家門を興し国土を莊嚴いたしましょう

仏教の開祖であるお釈迦さまは、人類の魂の親であります。お釈迦さまは、私たちを一人も漏れなく、一日も早く救済しようという「久遠の悲願」をもって、常に私たちのそばにいて、昼夜に私たちに呼びかけています。私たちは、この呼びかけに答え、お釈迦さまに心をかよわせ、その命を頂くことによって、眞の仏子として成仏することが出来るのです。私たちの命の親・魂の親であるお釈迦さまに報恩孝養の徳をつみましよう。また私たちの肉体は両親より頂いたものであり先祖から頂いたものです。先祖は根、子孫は枝葉、根が枯るれば枝葉も枯れます。枝葉の栄えは根の肥ゆることによります。先祖あつての私たちなのですから、まず先祖に追孝供養の徳をつみましよう。そして今生きておられる親に対して悔いなき孝養をいたしましょう。

この「三つの孝徳」は必ず報いられます。今生ばかりでなく、未来永遠に私たち自身の魂にそなわる徳となり、また家門の徳として子孫にも報いられてゆくものです。どんなに名誉財産を得ましても、やがては消えてしまいます。どんなに家庭や社会・国家・世界の上に平和繁栄を工夫しましても、孝徳の積み重ねを抜きにしては、砂上の楼閣を築こうとするの類にすぎないものでありましよう。古い諺にも「孝は百行の本」と申されています。自分の命の根本を立てなくて、どうして正しく生きてゆけましよう。今の世の中で、最も忘れられている大事なことが、この孝徳をつむということです。

そこで上野峽行学道場では、個人の開運・家庭の平和繁栄の基礎作りともいうべき「孝徳の集い」という運動を展開し、一人でも多くの孝徳の人を増やし、一軒でも多くの孝徳の家をふやし、その孝徳の功徳を、より顕著にして、世のため人のためにつくすと共に、先祖供養の御布施を積み立てて、これを基金として上野峽に福智山仏舍利塔をはじめ行学道場等々の堂塔伽藍を建立し、北九州の奥座敷ともいわれる福岡県立筑豊自然公園上野峽を物心両面より整備し、信仰と観光の理想郷として国土荘厳の一端に資したいと存するものであります。

もとより「孝徳の集い」では、仏祖三宝に対する孝徳の行、先祖に対する孝徳の行、生きておられる親に対する孝徳の行をもって修行の眼目といたしますが、特に先祖供養については落ち度のないよう徹底しておこないます。

一・先祖供養について

一般に先祖供養といっても大概は父方の先祖の供養はしても、母方や実家の先祖の供養は怠られがちであります。これでは片手落ちになってしまいます。何故ならば、先祖の霊はもとより、先祖が積んだ徳も、先祖が消滅出来なかった罪も、血統をパイプとして子孫の一人一人に伝わっているからです。同じ兄弟姉妹であっても、その伝わり方に相違はあっても、伝わっているという事実には代わりはありません。先祖の霊は、その徳と罪とをたずさえながら子孫の中に生きています。従って分家した人でも分家していない人でも、人として生まれて来ている以上、たとえ本家や親が供養していても、今、生きている自分の血のつながりを

たどって、先祖の供養をするのが人としての道であり、家を持つ以上、仏祖を供え、先祖代々という位牌を祭らねばならないのは当然のことであります。

この供養の中で見落とされがちなのは、戒名も俗名も命日も判らない先祖の霊が、判っている先祖の霊よりも遙かに多いということです。従って判っている先祖の供養をすることは勿論のこと、判っていない先祖に対しても、判らないまま先祖代々として供養の心をそそがねばなりません。次に注意しなければならぬことは、先祖の中でも変死した霊や、狂死した霊、或いは流産や手術で死んだ水子の霊が成仏しにくいということです。今日、我が国では水子に対する親の罪意識が非常に薄く、自分の水子に戒名もつけていない親が多いようですが、こういう家庭で良い子の育つ道理がありません。社会的な青少年不良防止運動も結構ですが、その前に親が親として水子に対する懺悔の心を起こし供養の誠を捧げねばならないのです。

また先祖供養を盆と彼岸と命日におこなえば、それでこと足れりと思っているのが世の一般のようですが、それで充分なはずはありません。先祖と私たちは幽現の二境を異にしていますが、実は常に一緒に生きているのであって、成仏した霊は私たちを守り導き、成仏していない霊は、血こそ頼りに、私たちに苦しみを訴え、救いを求めているのです。ここに先祖に対する感謝と救済の行動が起きて来るのです。

そこで上野峽の「孝徳の集い」では毎月一回、十一日に各家の父方・母方そして実家の先祖供養を、供養の中でも最も尊い施餓鬼供養の法式で行い、白糸の滝の滝壺の前において清流に向かって水向供養する

のであります。高さ二十八メートルの白糸の滝の前で、矢の如く流れる清流に、先祖の御塔婆・写経の主題目・四十九ヶの御団子・七色の野菜・七色の菓子等のお供物を流し供養する仏事は、まさしく人天歡喜のきわみでありましょう。

「孝徳の集い」に参加御希望の方は、申込書に御記入されると共に、父方・母方の先祖・実家（嫁の実家を含む）の先祖の、戒名・俗名・命日を判る範囲で結構ですから、正確に別紙に御記入され、特に供養したい霊には備考欄に○印をつけて御申込下さい。なお水子の戒名をつけていない方は、菩提寺にお願いしてつけて頂いて下さい。若しさしつかえなければ道場では何時でもおつけして引導を渡してあげます。遠慮なくお申下さい。

一・ 毎月参加と随時参加

毎月、先祖供養をいたしたい方は、申込書にその旨を御記入下さい。たとえ都合が悪くて御参詣出来ない場合でも、道場では必ず父方・母方・実家の先祖供養のお塔婆を立て、戒名・俗名をよみあげて供養いたします。

また毎月でなく随時参詣した時だけ先祖の供養をいたしたい方は、申込書にその旨を御記入下さい。但しその場合、お塔婆を作るのに大変時間がかかりますので、御参詣される時は前もってハガキなり電話で御連絡をとって下さいますように。すると道場では、この御連絡によってお塔婆の用意をし、先祖の戒名・俗

名を記載しておきます。なお当日になって急に御参詣された場合、直ちに受付にお申出下さい。

一・先祖供養料について

先祖供養には、父方・母方・実家（嫁の実家をふくむ）の先祖のお塔婆をそれぞれ立てて供養し、その後、各家の御祈願もいたしますが、それを全部一括した上で、一月、一口、五百円といたします。父方・母方・実家がそれぞれ一口というわけではありません。全部まとめた上での一口・五百円ということです。この線は、どなたでも参加することが出来、共々に孝徳をつめ、共々に向上しようという配慮でありますから、出来る方は二口でも三口でも参加されますよう、お願い申し上げます。

一・御祈願について

「孝徳の集い」に毎月参加される方、或いは随時参加される方に対しては、十一日の先祖供養のあとで、各家の家門栄昌開運隆昌を御祈願いたしますので、別紙「家族構成一覧表」に御記入され、特に御祈願したい方には、祈願内容を詳しく御記入の上、御申込下さい。

一・上野峡の堂塔建立五カ年計画について

「孝徳の集い」の先祖供養料は、悉く上野峡行学道場の堂塔建立基金として、会計係によって銀行に積み立てられます。毎月参加される方が一口五百円さるれば一年にして六千円、五年にして三万円になります。二口千円さるれば一年にして一万二千元、五年にして六万円となります。随時参加の方の供養料も悉

く一緒に貯蓄されます。そうした供養料を基金として、現在すでに手狭くなっている滝壺の前の道場を改築し、より多くの人々の集会も出来、自由に参籠修行も出来るよう設備し、将来は宿願の仏舍利塔も上野峽に建立いたしたいと存じ、まず五カ年計画をもって道場改築を目標として前進いたしたいと存じます。

寄付というのでなく、先祖に対する孝徳の浄財が、そのままそっくり社会浄化・国土莊嚴の堂塔として形をあらわし、世のため人のために役立ってゆくのです。まことに功德が功德を生み、仏がみずから仏の仏事をなすとは、このことでありましょう。この意味からしましても一人でも多くの方が「孝徳の集い」に参加されますよう、おすすめ申し上げ、御願い申し上げる次第であります。

一・賛助会員について

このような「孝徳の集い」の趣旨を賛同し、堂塔建立のためにも積極的に参加され、毎月四口（二千元）の先祖供養料をもって協賛される方を、賛助会員として掲載いたします。賛助会員の方に対しては、毎月身体健全・交通安全・開運隆昌等についての特別祈禱をいたします。またこのほかの祈願を御希望される場合にも特別祈禱をもって御奉仕いたします。

一・開運供養について

「孝徳の集い」に参加された方々の中で、先祖供養のほかに特に開運供養を御希望される方は、毎月開運供養をされるか、参詣された折に随時されるかの別を明確にして、その旨を申込書に御記入下さい。

開運供養とは個人や家族や事業の上で、開運をはばんでいる障碍（しょうげ）の因縁に対して施餓鬼供養し、因縁の成仏・消滅によって吉運を開くことです。

人は誰でも先祖からの因縁と自分自身の過去世からの因縁を引き、また家や屋敷の地所の因縁も引いているものです。こうした因縁が開運をさまたげているのですから、開運祈禱をする場合、必ず開運障碍の因縁の供養をしなければなりません。こういう因縁は、障るには障るだけの理由があつてのことなのですから、祈禱で斬り放したり降伏退散されるものではありません。むやみに祈禱すれば、一時は離れても再び斬られた怨みをもって再び強くさわってまいります。従って静かに入念に、しかも因縁にふり廻されないよう仏天の加護を頂きながら供養されねばなりません。開運供養と開運祈願をあわせてすれば、道は一層はやく開けるものですが、先祖供養が順縁であるのに対して、因縁供養は逆縁であるため、供養の心が因縁に通じ、因縁が成仏・退散するには時日のかかるものです。しかしどんなに日数がかかっても供養しなければ因縁は消滅せず子孫にもわざわいしてゆくのです。従って心して、しっかり供養の誠をつづけてゆかねばなりません。

こうした因縁というものは、先祖が犯した罪科や、私たちが過去及び過去世で犯した罪科に元づく場合が多いのですが、これを類別すれば、（特殊のものを除いて）大体三種類に分けられます。この三種の因縁は、全く異質のものであるため、供養のお経も違い、供養する心も違ってきます。上野峽では毎月一日・

二日・三日の三日間に亘って別々に供養をいたします。この三日間は、開運供養、因縁供養という大事さのため特に毎日、自我偈百卷の読誦をもって三宝諸天善神の加護をお願いします。すると必ず諸天善神のみちびきによって供養が通るであります。供養が通れば現証があらわれます。現証のあらわれない信仰は観念の遊戯にすぎません。信仰は気やすめではないのです。

この供養によって、先祖があやまって犯した罪や、知らずに犯した罪も消滅するならば、これも孝徳の一分でありましょう、開運の現証は子孫繁栄、家門隆盛の瑞相でもありましょう。

但し、この供養をするには先祖供養をしっかりやっておかねばなりません。先祖供養をせずに因縁供養にかかることは出来ません。そこで「孝徳の集い」に参加していない方の申し出は固くお断りいたします。

一・開運供養料について

開運をさまたげる因縁の施餓鬼供養は、各家の父方・母方・実家（嫁の実家をふくむ）の、それぞれ三種の因縁供養のお塔婆を立て、一日より三日まで三日間に亘っておこないます。もとより個人の開運障碍のお塔婆も立てることは申すまでもありません。その供養料は全部一括して一口五百円であります。父方・母方・実家がそれぞれ一口ずつというのではありません。また三日間にわたる三種の因縁がそれぞれ一口ずつというのでもありません。三日間のこの供養全部をふくめた上で、一口五百円というのであります。三種の供養を父方・母方・実家の三軒についてすれば、お塔婆でも最低九本立てねばなりません。個人や事

業の開運供養をふくめると一人の施主について十数本のお塔婆を必要とする場合もあります。それでも一口五百円というのは、誰でも参加することが出来、誰でも皆因縁の縛よりはなれて吉運を開いて頂きたいからであります。従って出来る方は二口でも三口でも何口でも参加して下さい。

供養日は毎月一日と二日と三日であります。御参詣されなくても御宝前に誓った以上、必ず道場で供養いたします。なお、この供養をしておりますれば、開運をはばんでいる因縁や、禍の本となっている因縁の正体もはっきりとして来るものですが、それを知りたい方にはお知らせいたします。然し身におぼえない先祖の罪による因縁や、自分の過去世の罪による因縁を知っても信じきれず、却ってそういう供養することが嫌になられる人も少なくはありませんので注意しなければなりません。ともかく如何なる因縁でもあれ、これを供養してさわりを消滅しなければなりません。そのことが先決であります。

一・特別祈祷について

賛助会員の方には毎月特別祈祷をいたしますが、賛助会員以外の方で特別祈祷を御希望されるれば、その旨お申出下さい。この場合、祈願日数をはっきりと定めて下さい。祈祷料は別に定めません。

一・お題目の写経について

先祖供養の場合、御祈願の場合、特に開運供養の場合、各家においてお題目を写経して、供養日に持参するなり、郵送して下さい。お経の時、御宝前に供え、水向供養の時、流れに流します。各家庭でお題目

を書いておれば、それだけ心が通りやすいからであります。信仰していない子供達にも一緒に書かせる功德は大きなものです。

半紙を十六分の一に折って、マジックペンでお書き下さい。出来るだけ日蓮聖人がおかきになったような光明点の筆法でかいて下さい。光明点とはお題目の光明が霊界に輝き、どういう因縁の霊にもしみ通っていることをあらわすものです。お手本を示せば次の通りです。

南無妙法蓮華經

一・参籠修行について

白糸の滝の道場に参籠修行を御希望される方は「孝徳の集い」に参加されている方、並びにその後家族に限り、参籠代は食費代のみで、その他の方は一人一泊千円をもうしうけます。

一・文書伝道について

「孝徳の集い」の機関紙として毎月十一日に印刷物を配布し、当日参詣されなかった方には郵送いたします。この機関紙には、謄写版ズリではありませんが、信仰上、大切なことを書いていますので、よくよく読んで下さい。その上で質問があれば、何時でもお答えいたします。

一・特別寄付者について

上野峡道場の堂塔建立について特に寄付された方には、その家の先祖を供養し、家門栄昌を祈願した上、御芳名をかかげて感謝の意を表します。

一・世話人について

「孝徳の集い」には改めて世話人はおきません。供養料を積み立てる関係上、会計と監査のみをおきます。

一・「孝徳の集い」の結成経過について

昭和四十二年六月一日、上野峡において立正大学・身延山大学の学生僧数名の者を中心として百日行を行い、満願の同年九月十一日を期して福智山頂・鷹取城趾・白糸の滝・誓願の滝 等々の景勝の地に六基の宝塔を建てて開眼供養してより、今日まで、はやくも四年六ヶ月を経ました。この間、遠近の御信者さまも次第にふえ、陰に陽に絶大なる御支援御援助をたまわり、深く感謝申し上げます。

さて御信者さまのふえるに従って道場の方針というものを明確にする必要に迫られ、本年正月十一日の初祭りを期して「孝徳の集い」の概要を発表し、ついで二月二日「孝徳の集い」の発起人会を開いて以上のことを決定し、役員として会計係に直方市吉田銀天○の長谷川仏壇店社長の長谷川才蔵氏、監査に田川郡大任町上今任の宇佐見勝氏を選出、異体同心となって「孝徳」の精神を社会に宣揚し、天下の景勝地上野峡の大自然の中に、孝徳の功德の結晶をもって、堂塔伽藍を建立し、国土を荘厳せんとするものです。

一・お願い

何卒、一人でも多く、この趣旨に御賛同の上「孝徳の集い」に御参加下さり、「孝徳の人」として孝徳の行をつみ、家門を「孝徳の家」として御隆盛を計られますよう、お願い申し上げます、おすすめ申し上げる次第であります。

なお「孝徳の集い」は二月十一日（建国記念日）より発足いたします。

昭和四十七年二月十一日

福岡県田川郡赤池町上野峽 鷲峰苑 福智山行学道場

TEL 赤池（二）二三〇六

孝徳の集い 代表 日高白象

会計 長谷川才蔵

監査 宇佐見 勝

是真佛子（これしんのぶっし）

〈鷲峰の集い第一号〉

○私は生きたい、お釈迦さまのように……。少なくともお釈迦さまの限りなき慈愛につつまれながら久遠の命に生きる真の仏子でありたい。苦しい時も、悲しい時も、何時もお釈迦さまの仏子らしく振舞える人間でありたい。そういう人に私はなりたいと願うのが、まことの仏教徒であり、この願いこそ仏教徒の本願と申せましょう。

今日、我が国の仏教界は各宗・各派・各教団に分かれ、それぞれの宗旨によって色々な教えが説かれています。これを大別すれば来世往生（後生善処）ということと現世利益ということでありましょう。しかしどんなに来世往生を願い、現世利益を願っても、お釈迦さまのように生きたい、少なくともお釈迦さまの真の仏子として生きて在りたい、という仏教徒の本願を抜きにしては、それは、もはや仏教の本質より逸脱したものと申せましょう。

○日蓮聖人は「法華経の信仰とは人の振舞いにて候なり」と仰せられました。人には人の振舞いがあり、み仏にはみ仏の振舞いがあります。地獄・餓鬼・畜生……等々の六道輪廻の振舞いより離れて、み仏の振舞いに生きるというのが、まことの信仰であるということです。成仏とは、こういう信仰による人間完成には

かなりません。そうしてこういう信仰の中にこそ現世安穩・後生善処の果報がはらまれているのであって、現実の人の振舞いに目をそそがずに、如何に來世往生・現世利益を求めても、それは成仏とは何の関係もないもの、あたかも南にむかって北斗を尋ね、木に登って魚を求めるようなものであるということです。

○動物でも植物でも種がなければ子は生まれません。み仏の子となるにはみ仏の種がなければなりません。み仏の種、これを仏種と申します。地上現実の人間が仏子として蘇生するには、仏種をくだすみ仏も、地上現実にみ仏として振舞ったみ仏でなければなりません。それは大日如来でも阿彌陀如来でも薬師如来でもなく人類史上唯一のみ仏お釈迦さま唯一人であります。しかもそのお釈迦さまは八十才で入滅されたみ仏でなく、無始無終、久遠の命を体現され、体現された中であって久遠の仏種をくだされているお釈迦さまでなければなりません。仏身久遠にして仏種の久遠も確立いたします。仏種が不滅でなければ、どうして末代の人々が仏種をうえることが出来ましょう。久遠のお釈迦さまが娑婆世界の教主として常にすべての人々に対して不滅の仏種をくだしているということではなければなりません。このことを明らかにしたのが如来寿命品を中心とする法華経そのものであったのです。

○日蓮聖人は、この久遠の仏種を説明して「釈尊の因行果徳の二法は妙法華経の五字に具足す。我等この五字を受持すれば、自然に彼の因果の功徳を譲り与えたまふ。……妙覚の釈尊は我等が血肉なり。因果の功徳は骨髓にあらずや」と仰せられています。ここにいう釈尊の因行とは、お釈迦さまが無始の昔より一切衆生の成仏救済を悲願して修行された久遠の菩薩行のことであり、果徳とは、その結果、遂に成道された

絶対なる仏徳のことであって、この二つの本因本果が渾然一体となって妙法蓮華經の五字に具足している、この五字そのものが久遠の仏種であるので、ひとたびも南無妙法蓮華經と唱うれば、仏種刹那にして心田に下種され、下種された仏種たちまちにして胎動し、お釈迦さまの血肉は、そのまま私たちの血肉となり、お釈迦さまの骨髓もまた私たちの骨髓となって、私たちは、その身そのまま久遠劫来の真の仏子として蘇生されるといふのです。

○南無妙法蓮華經と唱えることはお釈迦さまの仏種をうえることです。他の諸仏の仏種をうえるのでもなければ守護神の種をうえるのでもありません。これをあやまっては成仏することは出来ません。お釈迦さま唯一人の仏種そのものをうえるのです。仏種をうえるには罪の軽重・貧富貴賤・老若男女を問いません。一文不知も問題ではありません。ただ仏種を間違ひなく純粹に仏種のまま植えるかどうかということが問題なのです。このことについて日蓮聖人は「たとえばどんなに下賤な女でも大王の種を宿せば、その子は太子である。たとえ王妃であっても民の種を宿せば、その子は民にすぎない」と譬えられ、また「機に従って法を説くは大なる僻見なり」と叱咤され、法華經の仏種をうえない者を称して「父統の邦に迷う」とあわれんでいます。まことにお釈迦さまは娑婆の教主であり導師であり慈父であります。このことを知らずにお釈迦さまの仏種をうえない者は「父統の邦に迷う」者、成仏の血筋にもはずれた者と申せましょう。

○娑婆以外に天国や浄土極楽を求めるよりも、人間の生きている娑婆世界、私たちの子孫・民族・人類の住む世界こそ、真の仏子の集う浄土としなければなりません。お釈迦さまはそれを悲願し、私たち一人一

人を漏れなく一日も速かに真の仏子として振舞える人間とし、やがては遂にお釈迦さまと同じようにみ仏として振舞えるように悲願されているのです。私たち仏教徒の本願、それはとりもなおさずお釈迦さまの久遠の悲願であったのです。

○お釈迦さまは私たちに對して私たちがお題目を唱えることによって仏種をうえ、み仏の久遠の命を我が命とするように常に護念されながら、みずから南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經と唱えながら呼びかけます。法華經の信仰をするというのは知能で觀念的な悟りを開くことなく、お釈迦さまのこの声なき声を心に觀じ、親の呼び声に子供が答えるように南無妙法蓮華經と唱えることです。その行為の刹那、下種された仏種たちまちにして胎動し、お題目がみずからお題目を唱えて瀑流し、意識上、音響となってあらわれて来るのです。それはもはや私たちが自分の能力・体力で唱えるものでなく、お釈迦さまの慈悲神通によって唱えせしめられているお題目であり、またそうであればこそ、お題目が先祖に対して回向の功德をあらわし、祈願に對して現証の功德をあらわすのです。決して罪惡深重の私たちが回向するのでもなければ現証をあらわすのでもありません。私たち自身お釈迦さまによって回向され、功德を分け讓られている仏子なのです。

〈昭和四十七年二月十六日 鷲峰会〉

親は十人の子をば養えども

親は十人の子をば養えども、子は一人の母を養うことなし。

あたたかなる夫（おっと）をばいできて臥（ふ）せども、こごえたる母の足をあたたむる女房はなし。たとひまた、今生（こんじょう）には父母に孝養をいたすようなれども、後生（ごしょう）のゆくえまで問（と）う人はなし。

母の生きておわせしには、心には思わねども、一月に一度、一年に一度は問いしかども、死し給いてより後は、初七日より二七日（ふたなぬか）、乃至（ないし）、第三年までは、人目（ひとめ）のことなれば、形の如く問いとぶらい候（そうら）へども、十三年・四千餘日が間のほどは、かき消え、問う人はなし。

○この御文章は、弘安三年十月三日、尾張刑部左衛門尉（おわりぎょうぶさえものじょう）の女房が、身延山におられる日蓮聖人のもとへ、母の第十三回忌の供養のため、銭二十貫文の御布施を、使いの者に持たせて遣わされたことに対する、聖人の御返事の一節です。ここでは今も昔も変わらぬ、子の親に対する不孝の通弊がなげかれ、母の第十三回忌を忘れずに、はるばる身延山まで追善供養をお願いした刑部左衛門尉の女房の孝養が称揚されています。

○まことに親は十人もの子供がおれば、自分のなりふりかまわずに懸命になって養育するものです。しかし子供が大きくなった時、「私が親を引き取って孝行させてもらいます」という子が、果たして何人いることでしょうか。皆互いに責任を回避したがるものなのです。また結婚したとて寒い冬の夜、あたたかな体をいだけあつて床を楽しむ夫婦はあつても、ここえ切った母の足を気ずかう者は少なく、あたたためてあげようとする者は、更に稀です。たとえ親の生きている間は、月に一度、年に一度たりとも親をたずねて御機嫌をうかがい孝養の真似ごとをしていても、死んでしまえば世間の人目もあるので、初七日・二七日……四十九日の供養から第三回忌の法事までは形のように営んでいるものの、その後は、親の命日まで忘れてしまい、第十三回忌の年回の来ていることすら気付かない人が殆どのです。まして、なくなった親の魂が、方便の浄土に往生したのか、真実の浄土において成仏したのか、それとも餓鬼道・地獄道の底に沈んで苦しんでいるのか、その行方を案ずる人が果たして何人いることでしょうか。まして親の魂の真実の成仏のために、如何なる供養が真実の供養なのか、と心をくだく人が何処にいますことでしょうか。皆、お寺まかせて事たれりとし、死後の孝養も人まかせなのが世の常であります。まことに不孝者のそろつた世のならわしというほかはありません。

○日蓮聖人は刑部左衛門尉の女房へ与えられたお手紙の中で次のように仰せられています。お釈迦さまのお母さんである摩耶夫人は、お釈迦さまを生んで七日目になくなりました。お釈迦さまは養母に育てられました。然し成人しても悟りを開かない間は、生母摩耶夫人の魂の行方を知るはずはありませんでした。

三十五才にしてブツダガヤの菩提樹のもとで悟りを開かれるや、故郷カピラ王城へ帰り、年老いた父浄飯王（じょうぼんのう）を教化して現身に証果の羅漢（らかん）とし、亡き母のためには摩耶経を説いて浄土に導かれました。然し父親の証得された羅漢とは二乗の位、母親の浄土も二乗方便の土にすぎません。これでは真実の悟りでもなければ真実の成仏でもありません。このままでは、

「釈迦仏ほどの大聖、父母を二乗の道に入れ奉りて、永劫（ようごう）不成仏の歎きを深くなさせ参らせ給いしをば、孝養とや申すべき、不孝とや云うべき」

「仏は法華経を知（し）ろしめしながら、生きておわする父に（法華経を説き）惜み、死してまします母に再びあい奉りて、（法華経を）説かせ給わざりしかば、大慳貪（けんどん、ものを惜しみむさぼる）の人をば、これより外にたずぬべからず」という批難は、まぬがれることが出来ないでありますよう。

然し、方便をもうけなければ真実をあらわすことは出来ません。真実を完全にあらわしつくすには萬全の方便を設定しておかねばなりません。そしてその真実が開顕されてこそ、それまでの一切の方便が開会されるのです。お釈迦さまは成道の後、何と四十余年という長い歳月をついやして方便を説き、法華経の説法において、はじめてすべての真実を顕説されたのです。法華経の開顕、それはとりもなおさず釈迦さまが、今は亡き御両親の究極の成仏のために説かれた孝経であり、ひいては一切衆生皆成仏道の直道を示された法門であったのです。

そこで日蓮聖人みずから「父母に御孝養の意（こころ）あらん人々は、法華経を贈（おく）り給うべし。教主釈尊、父母の御孝養には法華経を贈り給いて候」といい、御自身の亡き母をかえりみられては、

「日蓮が母、存生しておわせしに、仰せ候いし事をも、餘りにそむき参らせて候いしかば、今おくれ（死なれ）参らせて候が、あながちに、くやく覚えて候へば、一代聖教（一切経）をかんがえて、母の孝養をつかまつらんと存じ候間母を御とぶらい申させ給う人々をば、我が身のように思いまいらせ候へば、あまりにうれしく思いまいらせ候」と仰せられ、「定めて過去聖霊（刑部左衛門尉の女房の母）も、たちまちに六道の垢穢（くえ）を離れて、霊山浄土（お釈迦さまの久遠の浄土）へ御参り候らん」と、このお手紙は結ばれているのです。

○もう一度、冒頭の「親は十人の子をば養えども……」の一節をよみかえしてみましよう。そして法華経をもって先祖を供養し、親に孝養をつくしましょう。法華経こそ「内典（ないでん）の孝経」なのです。

〈昭和四十七年三月十一日 上野峽 孝徳の集い〉

久遠のお釈迦さまを恋慕渴仰して

年が明けて間もない或る日のことでした。かねて信仰上のお友達であった人とあって、一通りの新年の挨拶をかわした後、よもやまな話をしている中、私が「あなたもこれまで随分強盛に法華経の信仰をして来られたようですが、日蓮大聖人もおっしゃっている通り、法華経に示された御本尊は久遠実成のお釈迦さまなのですから、このお釈迦さまの御仏像を建立して、あなたの御宝前に勧請されては如何ですか」と、おすすめてみました。すると返事は以外でした。その人は次のように答えたのです。

「なるほど日蓮大聖人は久遠の本仏お釈迦さまを御本尊として仰がれていますが、と言って、わざわざお釈迦さまの御仏像を造ってまで勧請することはないでしょう。第一、日蓮大聖人だって此の御本尊（久遠実成のお釈迦さま）の内容を大マンダラとして図顕されておられるのであるし、私達としては大聖人に従って、大聖人の図顕された大マンダラを御本尊としてかかえて信仰すれば、それでよいのではないですか。大切なことは外の姿よりも内容です。仏像の外見よりも仏陀の正覚の内容こそ大事なのであって、その内容を自分自身のものとすることによって、ここではじめて私達もお釈迦さまのように仏身を成就することが出来るでしょう。大聖人が大マンダラを図顕されたのも、仏像としてのお釈迦さまの外見よりは、内容が大切であるという立場に立たれていたからではないのですか。大マンダラをおがんでいると久遠の本仏の光明がサン然として全宇宙に輝いていることが観ぜられます。久遠実成という久遠とは、常にとか何時もということでしょう。大マンダラを御本尊として信仰している時、何時でも何処でも、自分自身が常に本仏

の大光明に照らされているという法悦をもつことが出来れば、それで充分であり、そういう信仰こそ法華一乗の信仰というのではないですか。ところがそこに仏像を造って勧請するということになる、三千年前に亡くなった過去の仏としてのお釈迦さま、しかもお釈迦さまは肌色も浅黒いインド人だったというイメージがよみがえって来て、このため折角、大マンダラを通して得られていた眩大無辺なる宇宙観も、不滅常住なる仏身観も、そこなわれてしまうような気がしてなりません。だから私は、むしろ仏像を安置しないで大マンダラだけを本尊様式とし、出来れば大マンダラの前に日蓮大聖人の御尊像を導師として安置した方がよいと思うのです」

返事は大体以上のようなものでしたが、蓋し、この人の考え方は、一人この人だけに限らず、今日日蓮門下各宗・各派・各教団における全般的な通年といえるものでありましょう。ところがこの通年なるものは、教学上、根本的な誤謬を犯した上において成り立っているのです。私が敢えてこの人に対して仏像の造立勧請をおすすめしたのも、実はその誤謬を示摘したいと思ったためでした。では、犯している誤謬なるものは一体どのようなことであるかといえば、およそ次のように列举することが出来ましょう。

(一) この人が、その言葉の中で、仏像としてあらわされたお釈迦さまを「三千年前に亡くなった過去の仏」といい「肌色も浅黒いインド人」といつているように、時間的にも断絶し、人種的にも差別された、ただ単なる歴史上の人物として久遠実成の仏とみなしていない（みなし難い個人的感情にとらわれている）といつこと

(二) お釈迦さまを「三千年の過去仏」とみなすのは、仏滅後における三千年間に亘った大乘仏教・小乘仏教を通しての一般概念であり、特に大乘仏教においては「お釈迦さまが入滅された」という衝撃から、

不滅の仏を求めて大日如来・阿弥陀如来・薬師如来というような多くの仏を立てて来ていたのですが、こうした思潮の中であって、独り法華経が如来寿命品において「お釈迦さまは今生において初めて成道されたのではなく、既に無始久遠の昔において成道され、爾来、無数億の衆生をたえまなく教化して来られたものであり、今、入滅の相を示すのも衆生教化の方便であって、実には永遠に滅せず教化をつづけて行くものである」といわれ、また「十方の諸仏も、実はお釈迦さまの化導を助けるための方便の仏である分身仏であって、お釈迦さまこそ久遠実成の本仏である」といわれているのです。法華経二十八品の最大の眼目は此処にあります。一仏乗の展開（二乗作仏の結実）も此処から起きて来るのです。即ち法華経の一仏乗とは久遠実成の本仏であられるお釈迦さまの人格体として展開されているのであって、本仏お釈迦さまの人格を抜きにして一仏乗もなければ二乗（声聞乗・縁覚乗）も三乗（菩薩乗）もありえないのです。仏滅後、今日までの仏教が、一仏乗道をはじめ諸乗の道を説き明かしながらも、そこに久遠の本仏お釈迦さまの人格を抜きにして来たため、その教えが冷たい難解な哲学と化し、遂には直接、信仰とはかかわりのないものとなって、大衆より遊離してしまったのです。

今、この人は如何にも法華経を信じ、大マンダラ仏界の光明に照らされている法悦を楽しんでいるようではあっても、お釈迦さまということになると、にわかになんか今までの信仰の眼が、人文史的な眼と変わり、お釈迦さまを唯歴史上の人物とみなして、信仰上の久遠の仏と見ることは出来ないようです。このことは法華経の最大の眼目である如来寿命品の教えそのものが信じられないというものでありましょう。寿命品の教えが信じられずに、如何に法華経の経文を読誦してもそれは道元禪師さえ言われたように「春の田で蛙がなくようなもの」でしかありませんまい。

(2) 次に、この人はお釈迦さまの仏像を安置すると「肌色も浅黒いインド人だったというイメージがよみがえって来て、このため折角、大マンダラを通して得られていた眩大無辺なる宇宙観も、不滅常住なる仏身観も、そこなわれてしまう気がする」といわれているのですが、こういう発言の底には、白色人種を畏敬し、黄色人種・黒色人種を軽蔑する体質、殊にインド人・中国人・韓国人をはじめ東南アジア諸民族を侮蔑した曾ての軍団主義時代の日本の民族意識のような痛恨がうかがわれるのではないでしょうか。このように人種差別観をもってお釈迦さまを見る処には、もはやお釈迦さまの人格を敬慕する念は薄く、その上で仏教を信奉するとなれば、お釈迦さまを通して顕現された宇宙の真理を仰ぐということになることでしょう。ここでは、もはやお釈迦さまは宇宙の真理をあらわされた一介の媒介体にすぎないものとなり、久遠実成の本仏とはいわれなくなってしまっているのです。

しかし、如何に宇宙の真理に帰依するといっても、信仰である以上、御本尊との血肉的なつながり（感応）というものの比重を無視することは出来ません。ここに此の人が大マンダラ御本尊の前に、日本人として血を同じくする日蓮大聖人の御尊像を導師として安置した方がよいという意識が動いて来るものであり、その結果、大マンダラの前にはお釈迦さまの仏像よりも日蓮大聖人の御尊像を安置する方が、信仰の実感が湧くということになって、お釈迦さまよりも大聖人を尊崇するという本末顛倒した本尊様式が展開されてしまうのです。今日、日蓮宗寺院の内にも、身延山や全国の本山・本山に例証があげられる通り、釈迦堂はなくても祖師堂があり、釈迦堂はあっても祖師堂の方がより大きいという顛倒した現象が、不審にも思われずに放置されているのも、久遠実成の本仏お釈迦さまに対する仏身観の誤謬によるものでありましょう。こういうことでは法華一乗の宣布の起こりようもありますまい。

(二) 次に、この人の犯している誤謬は、大マンダラを久遠実成のお釈迦さまの正覚の内容であるといっていることは、まだ良いとしても「大マンダラをおがんでみると、久遠の本仏の大明がサン然として全宇宙に輝いていることが感ぜられる」といっているように、この人は大マンダラ法界に光明サン然として輝かしているみ仏を、敢えて「久遠の本仏」と限定して、明らかにインドのお釈迦さまと画然として区別していることです。つまり歴史上のお釈迦さまを応現身(応身)とし、お釈迦さまを応身としてあらしめた根源的な仏を久遠の本仏として立てて、この本仏こそ時間・空間を超越した不滅普遍の仏、大マンダラ常住の仏とみなしているのです。こういう仏は、たとえ人格的であっても、所詮、抽象化された仏ではありません。

古来、大乘仏教の仏身観には法身・報身・応身の三身観があって、法華教学史上では「三身即一」という仏身観が主張されて来ました。然し三身即一といっても日蓮大聖人までは、応身仏が歴史上の仏身として時間・空間の制限をうけている処から、勢い報身仏とか法身仏に主体がおかれて説かれ、結局、三身即一の法身仏としての大日如来とか、三身即一の報身仏としての阿弥陀如来と、本質的には何等大差のない仏身観となっていたのです。

ところが、こういう仏身観に対して日蓮大聖人の開顕された仏身観は、三身中の応身に主体をおいて、三身即一の応身仏としてのお釈迦さまを御本尊とされ、これを久遠実成の釈迦牟尼仏として仰ぎ「本門の教主釈尊」とうたわれたのです。従って大聖人にあつては、応身のお釈迦さまを通して、お釈迦さまをして仏陀たらしめた根源的な仏(法身仏・或いは報身仏)というものを設定するのではなく、応身お釈迦さまの仏身そのものに時間・空間を越えた法身・報身の二仏を認めるものであり、久遠実成の仏(久遠の本仏)なるものは、お釈迦さまが成道されて入滅されるまでの生涯における仏身そのものとして、その他にも、そ

の奥にも、求められるものでなく、またお釈迦さまの内証の世界にのみ限定されるものではないと申されましよう。もはや久遠の本仏は抽象化された仏ではなく、歴史上に生々しく活動されたお釈迦さまその人であったのです。如来寿量品におけるお釈迦さまの久遠開顕とは、このことに外なりません。

こうした仏身観が確立してこそ、ここにはじめて一仏乗なるものが単なる宇宙の真理のとどまらず、久遠の本仏お釈迦さまの人格体として「久遠の因行・果徳の二法」といわれ、一仏乗を詮した妙法蓮華経の五字七字が「久遠の仏種」としての価値をもつことが出来るのです。日蓮大聖人が図顕された大マンガラは、久遠の本仏お釈迦さまの因行果徳の二法である妙法の五字七字が、上は仏界より下は地獄界の底までも遍く照耀し、十界のすべてのものが、このお題目を受持して本仏お釈迦さまと感応同交している本仏界の相を示現されたものに外ならないのです。

なお大聖人が久遠の本仏お釈迦さまに対して「本門の教主」といわれて、法華経二十八品中、本門八品に顕現されたお釈迦さまを御本尊とするように述べられています。それはお釈迦さま一代八十年の御生涯の中、法華経本門八品を説かれている時のお釈迦さまというように年代を限定しようとされたのではなく、一代八十年の全生涯を、法華経本門八品の時点に集約された立場を明白にし、更にその立場から八十年の全生涯をみようとしてされたものと拝すべきであります。

法華経第二の方便品の中に「十方仏土の中には、ただ一乗の法のみありて二もなく、また三もなし」といわれていますが、このことはお釈迦さまが、みずから久遠の本仏として一仏乗の立場から、方便としての二乗・三乗を説き、これを縁として一仏乗に帰一せしめようとされたものであるということを示すにすぎないのです。これに従えばお釈迦さまの一代の化導、その一挙手一投足、その一言半句、一視微笑す

らも、実は久遠の本仏のそれであつたと申されましよう。

今日、お釈迦さまの伝記に関する書物は、汗牛充棟ただならざるものがありますが、常に粗衣をまとい、粗食に甘んじ、山野に臥しながら行乞布教される中に、貧富貴賤・老若男女を問わず、すべての人々に対して平等に語りかけられたお釈迦さまの行為の一駒一駒にあふれる偉大なる人格を賛嘆し、恋慕渴仰するところ、そこに信仰の基本的姿勢があるのではないでしょうか。人格、これを抜きにしては成仏はないのです。「一心欲見仏」というその「見仏」の当処に、成仏の道は決定しているのです。仏像の造立勸請こそ三身即一なる久遠の本仏お釈迦さまの偉大なる人格に対する恋慕渴仰に外なりません。大マンダラもまたこの偉大なる人格の宇宙大の表現として仰ぐべきであります。　　〈了〉

昭和四十八年正月十六日

日高白象

魚の子は多けれど

〈孝徳 第二号〉

○日蓮大聖人の遺された幾多の感銘深い法語の中に、

魚の子は多けれども、魚となるは少し。

菴羅樹（アンラジュ）の花は多く咲けども、果実（コノミ）となるは少なし。

人もまたかくの如し、菩提心を起こす者は多けれども、退せずして仏と成るは少なし。

という有名なお言葉があります。誰でも魚というものは一度に何千何万という数のタマゴを生むことは知っています。たとえばマンボウという魚は一度に三億のタマゴを生み、ウナギは五百万個、アワビは二十万個、タコは十万個、ドジョウは一万個、サケは四千個、マスは二千五百個という数のタマゴを生むといわれています。これらのタマゴは、やがて孵化して稚魚となりますが、タマゴにしても稚魚にしても他の魚の餌食になってしまったりして、無事に成長するものは誠に少ないようです。たとえばサケにしても四千個ものタマゴを生んでいながら、それが稚魚となって海へ入ってゆくものは、その中、わずか百匹でしかなく、その百匹も海で大きくなって再び河へ登って来るものはたったの二匹にすぎないといわれているほどです。

またアンラ樹という木は、インドに野生している熱帯樹であって、桃または梨のような実がなるといわれていますが、花ばかり多く咲いて、花のまま散ってしまい、実を結ぶ花は誠に少ないそうです。

日蓮大聖人は、この二つの実例を引用されながら「人もまたかくの如し」と申されました。このお言葉の中には、「菩提心を起こす者は多けれども、退せずして仏と成るは少なし」という過去無量劫来の現実に対する万斛の歎きと、すべての人々は一人残らず悉く成仏してもらいたいという未来に対する限りなき願いがあふれているようです。

私たちは「魚の子は多けれども……」云々の一句をよみながら、このお言葉の中にあふれている大聖人の万斛の悲しみと無限の願いに触れて、私たち自身の信仰の在り方を反省しなければならぬと思います。

○現代の知識人や若い人々の間では、信仰は否定しないまでも無関心でいる人が少なくはないようです。然し日本全国の既成宗教や新興宗教の勢力をかえりみても日本人の大部分の人々が、その人なりに何らかの信仰をしているということが出来ましょう。ところで、こうした人々の中でも特に熱心に信仰していても、その信仰が現世利益にとどまっていたり、或いは死後の往生成仏に偏してしまっているのが殆どではないでしょうか。

成仏というのは、たとえ幾度か、生まれ替わり、死に替わっても、遂にはお釈迦さまと等しき不滅の仏

陀としての人格・靈格を、自己の現身に成就するということです。仏教を信奉する目的はここにありません。信仰することによって今生現証の利益を頂くとか、死後、仏の浄土に安住するといったようなことは、成仏という目的―この大願を成就してゆく過程上の一現象にすぎません。こういう現象にとらわれて成仏の目的を亡失したり、目的より逸脱する処に宗教の墮落が起こり、精神界の混乱から、やがて国土の混乱が起きて来るのです。

ところで、成仏の大願を起こしている人が果たして何人いるのでしょうか。大願を起こすだけでなく大願を堅持して修行に励んでいる人が何処におるのでしょうか。「菩提心を起こす者は多けれども、退せずして仏と成るは少なし」とは、七百年前の大聖人のおられた鎌倉時代だけでなく二十世紀の現代、私たちの周囲についてもいえるのではないのでしょうか。

○私の師匠に当たる唐津の法蓮寺住職藤山英雅上人が、曾て一個の人間を起点として過去にさかのぼって、その直系の父母の数を勘定されたことがありました。それによれば一代では二人の父母があり、二代さかのぼれば四人の父母、三代さかのぼれば八人の父母、十代さかのぼれば一〇二四人の父母があり、さて百代さかのぼってみると、その直系の父母の数は、126,7658,9888,3621,8915,1367,0320,5376 人、何と三十一ヶタにも及ぶ膨大な人数となっています。この数のよみ方は、

126 億 万 兆 兆 7658 兆 兆 9888 億 兆 3621 万 兆 8915 兆 1367 億 320 万 5376 人

というのですが、一人の人間を生み出した直系だけの先祖を、わずか百代さかのぼっただけでも、これほどの人数です。そこで人間一個の生命には、これほど膨大な先祖の命がかかり、先祖の善業と悪業の因縁も引きつがれているともいわれましょうが、こうした先祖の中、何人が成仏し、何人が生まれ替わり、何人が生まれ替わることも出来ず亡魂としてさまよっていることでしょう。ここにも先祖供養の重大さが改めて反省させられて来るものです。

○私たちの家の仏壇に祭っている先祖のお位牌にしても、過去帳の戒名にしても、先祖全体の数よりみれば、ほんの一部分にすぎません。その一部分の先祖の供養だけでは、供養もされないで放置されている先祖の方が、はるかに多いことは火を見るより明らかな処です。そこで先祖供養を十全にいとなもうとするならば、先祖代々というお位牌を祭り、そのお塔婆も立てて供養に漏れる先祖のないように心がけなければなりません。そしてまず自分みずから即身成仏の大願を立て、久遠の本仏お釈迦さまの大慈大悲のみちびきによって、先祖と共に成仏してゆく行を起こし、つらぬくことです。成仏、それは人間一個人の問題でなく、縦に過去無量の先祖の霊、横に無辺なる国土の成仏と共にあるものなのです。

〈昭和四十八年二月十一日〉

愚者の祈り

日高白象

○日蓮大聖人の「祈祷鈔」という著述の中に、「大地を指さば外るとも、虚空をつなぐ者はありません、潮の満ち乾ぬことはありとも、日は西より出ずるとも、法華經の行者の祈りのかなわぬことはあるべからず……(中略)……行者は必ず不実なりとも、智慧は愚かなりとも、身は不浄なりとも、戒徳は備えずとも、南無妙法蓮華經と申さば、必ず守護したもうべし」というお言葉があります。また「波木井三郎殿御返事」というお手紙の中では、「末代の悪人等の成仏・不成仏は、罪の軽重ケイチヨウによらず。但し此の經の信・不信に任すべし……(中略)……法華經の心は当為即妙トウインクミョウ、不改本意フカイホンイと申して、罪業を捨てずして仏道を成ずるなり」とも仰せられています。

誠に人間の成仏というものは、その人の智慧の浅深・身の浄・不浄、戒徳の有無、罪業の軽重等によるものでなく、ただひとえに法華經を如説に信ずるか・信じないかによるものです。法華經方便品第二の冒頭において、十大弟子の中でも智慧第一とうたわれていた舍利弗尊者に対してお釈迦様が「止ヤみなん舍利弗、また説くべからず」と三度にもわたって法華經の開顯説法をためらわれたのも、お釈迦さまの正覚の内容

そのものが、如何に舍利弗の智慧を以てしても計り難く、難解難入にして、ただ信を以てしか悟入出来ないものであるため「まさに大信力を生ずべし」と、その信を喚発カンボツせしめんがためであったのでした。また法華経提婆達多品第十二の中において八才の龍女が、幼少の八才という年令、龍という畜身、しかも女人の五障にもかかわらず、即身成仏の大果を実証したのも、まさしく龍女の「讚仏偈」に示されている、その信そのものによるものでした。

成仏―それは如説の信・純粹なる信によってのみ可能なのです。如何に智慧があり、徳があっても、信の一字がなくては成仏出来ないのです。なるほど「以信代慧」という言葉があつて、信を以て慧に代えると読み、悟りを開くほどの智慧がなければ、その智慧に代わるに信仰を以てするというように理解され勝ちのようですが、決してそうではないのです。「以信代慧」とは、仏陀正覚の大智・大慧は、凡夫の絶対信と等価値であるということなのです。大智即大信、絶対信即絶対智であつて、「以信代慧」の四文字は、目的の境において言わるべきであつて、悟りを開く方法論の過程において論ずべきではないのです。

○ところで法華経の龍女成仏の説話に匹敵する愚者の成仏の実話が、お釈迦さま御在世当時、一人の仏弟子のエピソードとして「長老偈経」や「ジャータカ」の中に紹介されています。その仏弟子とは有名な周利槃特（しゅりはんどく；梵名パンタカ）その人に外なりません。パンタカには聡明な一人の兄さんがいました。人々は兄の方を

マハー・パンタカと呼び、弟の方はチューラ・パンタカと呼んでいました。マハーとは大きいという意味であり、チューラとは小さいという意味です。つまり人々は兄の方を「大きいパンタカ」弟の方を「小さいパンタカ」と呼び分けていたのです。兄を大、弟を小というのは「大きい兄ちゃん」「小さい兄ちゃん」という世間一般のならわしですが、パンタカ兄弟の場合、兄の聡明さにくらべて弟の方は余りにも愚鈍でした。チューラ・パンタカという呼び名には、その愚鈍に対する軽蔑もふくまれていたのかも知れません。

この兄弟の中、まず兄の方が仏門に投じてお釈迦さまの仏弟子となりました。もとも聡明であった兄は、お釈迦さまの教えを聞いて能く理解し、大いなる境地を体得してゆきました。それは偉大なる感動でした。兄なるパンタカは、この感動・法悦を弟にも得せしめたいと思い、お釈迦さまにお願いして弟も仏弟子の一人に加えさせてもらいました。ところが余りにも愚鈍な弟のパンタカは、お釈迦さまから与えられたやさしい四つの句からなる一偈の中、一句を憶えようとすると、もう先の句を忘れてしまい、四ヶ月かかって、その一偈すら暗記出来ない始末です。仲間のお弟子たちは、その馬鹿さかげんを失笑しました。よってたかつて嘲笑する者もいました。冷たい目で見捨てる者も少なくはありませんでした。並勝れた兄はたたえられ、並劣った弟は侮蔑される。兄のパンタカは自分がたたえられればたたえられるほど、その言葉と裏腹なる弟に対する仲間の侮蔑、その侮蔑をうけねばならない弟の愚鈍さにたえか

ねて、「もうお前は駄目だ。還俗して家へ帰った方がよい」

と、つき放すように言い渡しました。僧団の中、誰にも話しかけられず、頼りにしていたたった一人の兄にも見放された弟のパンタカは、精舎の門のあたりで茫然として立ちすくんでいました。おそらく家へ帰っても、どうして生活するのも解らない弟は、追い出されるままに精舎の門を出たものの、そこから一步、何処へ歩き出してよいのかも知らなかったのでしょう。そこへお釈迦さまが通りかかりました。お釈迦さまは、泣きむせんでいるパンタカの頭をやさしく撫で、手をとって精舎へ連れて入りました。そしてこのように申されました。

「チューラ・パンタカよ、何も嘆き悲しむことはない。愚かといわれて失望することもない。あなたは私によって出家し、沙門となったのであるから、誰にはばかることなく安心していつでも私の許におればよい。チューラ・パンタカよ、あなたは、もう何も憶えなくてもよい。ここに布切れがある。この布切れで精舎で暮らしている私のお弟子たちや精舎にお参りに来る人々のはきものを、きれいにするよう専念するがよい」

それは、おそらく壁のすさにする一步手前のようなボロギレであったことでしょう。パンタカはそのボロギレを宝もののようにおし頂きました。そしてお釈迦さまの仰せの通り、毎日毎日、ぬぎすてられたはきもののほこりを落とし、あかをぬぐい、破れたり千切れたところをつくろっては整然としてそろえてゆきました。

今から二千数百年前のインドの国の人々が、どのようなはきものをはいていたのか、

仏弟子たちのはきものは、どのようなものであったのか、はっきりしたことは判りませんが、今のインド人のはきものから想像すれば、おそらく皮製か繊維製のサンダルのようなものであったことでしょう。パンタカは来る日も来る日も、ほこりにまみれ、垢によごれた、そういうはきものを、一つ一つお釈迦さまのいいつけの通りに、きれいにしていました。はきものは日によっては何百足も、千足を超えることさえ稀ではありませんでした。パンタカは一日も休むことなく、怠ることもなく、はきものに区別することなく、ただ一心に働きました。自分のはきものが頼みもしないのにきれいになって揃えられているに對して感謝の言葉を投げかけた人はそう多くはなかったことでしょう。若しいても、それは初めの中だけのことであったことでしょう。誰に感謝されるのでもなく、馬鹿だから、そんなことしか出来ないのだとくらいに思われていたことでしょう。然しパンタカは黙々として働きました。お礼をいわれるために働いたわけではありません。お釈迦さまからいいつけられた自分の出来る唯一の仕事として働いたのです。お釈迦さまからいいつけられた仕事であればこそ、ぬぎすてられたはきものを、おし頂いてきれいにしたことでしょう。その一途な働きぶりは、パンタカの生来の愚直さによるものといえるかも知れません。馬鹿だからこそ馬鹿なりに、お礼をいわれなかったからといってうらむことも知らず、はきもの数が多いいって怠けることも知らず、来る日も来る日も、あきることなく唯一心に働くことが出来た、といえるかも知れません。然し馬鹿だから愚鈍だからといって幾月も幾月も真面目に働けるものではありません。そこにはお釈迦さまの大慈あふれるいいつけを、かしこみ敬って受けたパンタカの恭敬の心と、その行為を守り続けた正直な心が、一

本筋金のようにつらぬかれていたのではないでしょうか。

そうする中、このパンタカが誰でも容易に入れられないお釈迦さまの正覚の境に入ったというのです。お釈迦さまの教えの中の一句さえ憶えきれないまま、はきものをきれいにして揃えるという、その行為によって遂に仏界に悟入したというのです。このことについて増谷文雄氏は、その著「ブツダ・ゴータマの弟子たち」の中で、

チューラ・パンタカは、師の仰せをかしこんで、そのわざに専念した。そのうち、彼がふと気がついたことは、人もまたそうであるということであった。人の心ほど汚れやすいものはない。それを浄めることは難しい。だが、だからこそ人は、われとわが心を清めることに専念しなければならぬ。そのことに気がついた時、彼は一偈をそらんずることもなくして、ブツダの教えの何たるかを会得することができたのであった。

と註していますが、果たしてそうでしょうか。私は敢えて増谷氏のこの註釈に対して反論しようとするのではなく、パンタカは氏のいわれるように、心を清めることに気付くほどの知能があったのでしょうか。若しそのことに気付いたとしても、その後どのようにして心を清める工夫が出来たのでしょうか。はきものをきれいにすることが心を清める行であったとするならば、パンタカの仏界転入は、はきものをきれいにして後に心を清め、心を清めて後に仏界に入ったというのではなく、むしろはきものをきれいにする行為そのものが、既に仏界の中の所作となっていた、そのことをパンタカは知らず知らずの中に体得していたというべきではないでしょうか。

私は、頼るべきたった一人の兄マハー・パンタカにも見捨てられて精舎の門前に立

ちすくんでいたチューラ・パンタカの頭をなで、手をとって精舎の内に導き入れ、はきものをきれいにするようにとボロギレを与えられたお釈迦さまの温かいまなざしと、お釈迦さまの足下にひれ伏して感泣しながらボロギレをおし頂いているパンタカの姿を想像します。この想像図の中では、この師、この仏弟子を媒介するボロギレは、もはや単なるボロギレではなく、お釈迦さまの限りなき大慈悲、生きとし生けるものを一人も残さず救済しようとするお釈迦さまの悲願を象徴するものかのよう輝いているようです。

次に私は、そのボロギレで、ぬぎすてられた多くのはきものを一心にきれいにしているパンタカの姿を想像してみます。この図の中では兄弟子たちが一瞥もしないで通りすぎるのに、多くの小鳥たちがパンタカの行為を賛嘆して、さえずりながらパンタカの廻りに集まり、二・三の小鳥がはきものをくわえてパンタカのそばへ運ぼうとしている姿を見ることが出来るようです。またきれいにしてもらったはきものが「パンタカさん何時も有り難う」と礼をいい、きれいにしてもらおうと順番をまわっているはきものたちが「今日もお願いします」といっている声が聞こえて来るようです。おそらくパンタカにも、はきものたちのそういう声なき声が、じかに聞こえていたのではないでしょうか。

「うん、よしよし。今日も一日中、人にふまれながら、ほこりだらけになって、よく働いて来たね。御苦労さん、今にきれいにしてあげるよ」「そうら、きれいになった。よかったね」「おや、お前は鼻緒が切れてしまっているな、可哀そうに、今、修繕してあげるよ」等と言っているパンタカの声も聞こえて来るようです。

おそらくパンタカは、生来の愚かさ故に僧団の中でも顧みられないでいる自分の立場と、足下にふみしかれ、よごれたままぬぎすてられているはきものたちの立場と、その共通の立場にあったためでもありませんが、そのことよりも一つ一つのはきもの自体に、自分と同じ命を感じ、いつくしみ、いたわり、お釈迦さまから与えられた大慈悲そのもののボロギレによって、はきものがはきものとしてきれいになり蘇生してゆくことを我がことのように歓んだ大いなる生命の歡喜、自分自身はもとよりはきものたちも、お釈迦さまの大いなる慈愛につつまれ、はぐくまれていくという二而不二、不二而二なる生命の歡喜を心ばかりでなく体全体に満喫することによって、我にもあらず仏界に悟入していたのであります。兄なるマハー・パンタカなどの多くの仏弟子たちが、智慧を磨いて一如不二の理を思索しながらも悟入することの出来なかつた仏界に、チューラ・パンタカはその愚かさ故に、思索によらず行為により、自己によらず仏陀により、ものいわぬはきものと会話して一如不二の世界を觀念的なものでなく、生命として体悟修証して行ったのです。それはまさしく大いなる愚者の祈りという外はありません。



佛による成仏と神による現世利益について

昭和四十八年四月十一日

日高白象上人 著

明治のはじめにおける神仏分離と、これにともなう廃仏毀釈の嵐は、我が国の精神文化の上に、およそ想像することも出来ないほどの打撃（混乱と損害）をあたえました。然しながら、なお一般家庭においては仏壇と神棚が共にあり、人々はお寺へもお宮へもお参りしながら、何の矛盾も感じないという風習が残されています。たとえば葬式や法事という来世のことはお寺、結婚式や七五三のお祝いという現世のことはお宮、というように割り切られているようです。なるほど来世の成仏は仏により、現世の利益は神による、というのが日本人一般の考え方であり、そういう考えのもとに、それぞれの行事が、もはや風俗化されているとも申されましょう。ところで神と仏との関係は、一体どういうことになっているのでしょうか。

このことについて答える前に、法華経教学における十界互具ということを考えてみなければなりません。十界というのは申すまでもなく地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上（以上六道界）と声聞・縁覚・菩薩・仏（以上四聖界）のことで、十界互具とは各界それぞれに他の九界を具えているということです。たとえば仏は十界の中、最高の仏界に位しながらも同時に他の九界を具えておられます。仏界に地獄・餓鬼・畜生・修羅という三悪四趣が具わっているということは理解し難いところでありましょうが、そういう悪は修悪のものでなく性悪のものであるのであって、悪の性はあっても悪の業をなさないというものなのです。仏が一切衆生を成仏へ導くことが出来るのも、仏自体に衆生と同じ悪の性があるからです。若し仏に性悪さえもなくなってしまうておれば、仏と衆生は断絶して救済のてがかりもなくなってしまうてありましょう。仏

自身、本来仏界に住しつつ、しかも他の九界をそなえて、無限の救済活動を展開されているのです。そして一切衆生もまた本来、仏界に具わっているところの九界のいずれかに位しているはずのものなのです。九界の衆生が、それぞれの界位において、その身そのまま仏界所具のものとなることを即身成仏というのですが、仏界所具のもの（仏果果上のもの）となるには久遠の本仏であるお釈迦さまの、因行果徳の二法であり血肉であるところの法華経のお題目を受持して但信口唱するほかはありません。お題目を身口意の三業に受持する当処、地獄は地獄のままに、餓鬼は餓鬼のままに、天人は天人のままに、その身そのまま仏界所具のものとなっているのであって、この風光を图示されたのが日蓮大聖人の大マンダラなのです。

ところで神というものは、通常、人間以上の力（通力、神秘力）をそなえているものとされており、十界の中では何処の世界に位しているかといえ、一般には天上界であるといわれています。然し天上界といえども六道輪廻の迷界であって「天人に五衰あり」ともいわれるように天上界より地獄、餓鬼、畜生、修羅の世界に沈落する神もあれば、天上界にも昇ることも出来ずに地獄、餓鬼等の三悪四趣の世界（暗黒の幽界）に沈潜したり、或いはそういう世界に根をはって通力をほしのままにしている神々もあるのです。こういう神々は、仏界のあることを知らず、また知っていても仏界をさえぎるものであって、通常鬼神とも魔神ともいわれ、或いはその行為によっては邪神とも呼ばれる類にすぎません。到底、善神としてあがめられるものではないのです。何故ならば、善神とは一切衆生をして仏界へ導くものであり、成仏を志す人々を擁護するものであるからです。善神は、たとえ人々が神意にそむくとも、決してとがめたり、さわるようなことはせず、みずから神天上といて地上を離れて昇天してゆくものです。その昇天の際に鬼人・魔神が入り「国土乱れんとする時は、まず鬼神乱る。鬼神乱るるが故に万民乱る」と日蓮大聖人が立正安国論に

喝破されている通り、三災七難の根源が、ここに起きて来るのです。ところで邪神というものは、その神意に順うものには和魂として加護を垂れ、そむくものには荒魂（あらぶる魂）として「たたり」「さわり」の神罰を加うるものです。これらの神々は成仏の世界の神でなく、六道迷界の神でしかありません。

我が国には、神代の昔から八百万（やほよろず）の神々がいますが、果たして善神はどれほどいるのでしょうか。神さまだからあがめる、神さまは通力があるから御利益をお願いするという信仰は、低級というよりも危険きわまりないものです。「さわらぬ神にたゝりなし」という諺も起きて来るわけでありましょう。

養老年間、神の次のような神託があります。「我れ神身をうけて苦悩はなほだ深し。仏法に帰依して神道をまぬがれむことを思う」と。また延扇年間の神託にも「我れ久劫を経て重悪業をなし、神道の報いを受く。今、願わくは永く神身を離れむがために三宝に帰依せむと欲す」とも申されています。このような神託の低意には、通力があるが故に神とあがめられた、その神の束縛（神封じ）より解放脱出して、神みずから成仏を願い、成仏の世界（仏界）において、はじめて神としての通力の善用されることを願われた旨をうかがうことが出来ましょう。聖武天皇が奈良の大仏開眼の勅に「三宝の奴とならん」とみずから述べられた心の底には、それまでの日本国の神々が、和魂の反面、あらぶる「たゝりの神」「のろいの神」といわれるような相対の世界より離れて、仏法によって国土成仏を願われた天皇みずからの元旨を拝することができるのではないのでしょうか。

聖武天皇の大仏開眼の勅の裏には、それまでの神道といふ、その信仰の悉くが、自己と、自党の栄達福祉を祈る一方、敵側の者を呪詛して敗滅を祈るといふ、如何に左道化したものであったかということが伺われるものであって、その故にこそ天皇みずから此の大仏のまします東大寺を中心とする全国各地における国

分寺、国分尼寺の建立が、新生国家建設の大本として進められたのであります。また天皇が中国より鑑真和尚を招聘して戒壇院を建立せしめたのも、左道化した仏教を本来の姿に皈えさせるためであったのであります。鑑真和尚が日本へ来朝するため南支那海を渡るのに十二年の歳月を要し、六度目の渡海によって、はじめて日本の地を踏んでいます。航海中盲目にまでなった鑑真の来朝の本当の目的は、天台教学を伝えることであつたのでした。然し当時の日本仏教界の現状から、戒律を以て呪術仏教の弊を制するという範囲にとゞまり、天台教学の開頭は桓武天皇の時代、伝教大師の出現まで待たねばなりません。そして日本国土の成仏、ひいては世界全体の成仏の道の開けるには、鎌倉時代における日蓮大聖人の出現まで待たねばならなかつたのです。勿論、日本仏教が一本の線を通した純粹な仏教として開花したのは浄土宗の開祖法然聖人に始まり、つゞいて親鸞・道元・日蓮・一遍という各聖が輩出され、それぞれの宗旨が弘められるのですが、その中、日本国の天神地祇をもふくめて国土成仏、ひいては世界成仏の大旗をかゝげたひとは日蓮大聖人をおいて外にはありません。

今、大聖人の凶顕された大マンダラを拝しますれば、インドの国における太古の昔より天地創造の神とうたわれていた梵天・帝釈は十界の中の天上界の神として勧請され、日本国の大小の神祇を代表する天照大神・八幡大菩薩も法華経擁護の善神として大マンダラの中に勧請されています。これらの神々は本来、久遠の本仏お釈迦さまの仏子として、みずから本仏お釈迦さまの魂であり命とされる法華経をたち、お題目を唱えながら修行している神々であり、神として通力によって側面から法華経信仰者を擁護するという誓願を本仏お釈迦さまに立て、いるものなのです。

こうした修行と誓願は、天上界の神々ばかりでなく、文殊・弥勒・薬王・薬上・普賢・観音等の大菩

薩衆も同様であって、大マンドラ仏界にあるものは、上は仏界の分身の諸仏(弥陀・大日・薬師…)等から下は地獄界の神々にいたるまで、本仏の仏界にある以上、久遠の本仏お釈迦さまを主師親の三徳兼備の本尊として仰ぎ、本仏の血肉である法華経をたもち、お題目を唱えて修行するばかりでなく、末法悪世の娑婆世界において法華経をたもつ人々を本眷属として側面から守護するのです。そして未だ法華経を信じ切れない人々に対してはやがて信ずることが出来るように遂次に手段が構せられるのです。

本仏お釈迦さまをはじめ諸仏の出世の本懐たる一大事因縁なるものは「衆生をして仏知見を開かしめ：仏知見の道に入らしめん」がためであり、お釈迦さまと同じ仏身を成就せしめることこそ一大眼目であるのですから、その眷属である大小無量の菩薩や天神地祇が、この眼目にそって活躍されるのは当然のことであり、若し此の活躍がなされなければ、本仏に対する誓願を、菩薩神祇がみずから破ったことになるのです。日蓮大聖人が龍の口の法難(文永八年九月十一日の頸の座)の際、鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮の社頭において「如何に八幡大菩薩、まことの神か」と神を叱咤された所以も此処にあるわけです。

そこで考えなければならないことは、まことの善神の守護を願うならば、守護による現証利益を思う前に、まずみずからの成仏を願うということであり、成仏を願うということが本仏お釈迦さまの仏子として大マンドラ仏界に住することであるならば、真の仏子として仏界に住する歓喜をもつことが肝要となるのです。子は親をたたえます。仏子であるならば仏子として親なる本仏お釈迦さまをたゝえなければなりません。法華経の提婆品において八才の童女は、

「深く罪福の相を達して、あまねく十方を照らしたもう。微妙の淨き法身、相を具せること三十二・八十種好を以て、もって法身を莊嚴せり。天人の戴仰する処、竜神も悉く恭敬す。一切衆生の類、宗奉せざ

る者なし。また聞いて菩提を成ずること、たゞ仏のみ……」

と不滅普遍の本仏お釈迦さまの徳相を讃嘆することによって、八才の年令も、竜の畜身も改めずに即身成仏の大果を証しています。本仏お釈迦さまを尊重讃嘆することなしに成仏を願ひ、神による現証利益を求めることは本末顛倒も甚だしいものであり、木に登って魚を求め、南に向かって北斗をたずねるようなものと申せましよう。

心すべきは死んだ後に、あの世で成仏するのではなく、今日只今、この世で即身成仏の証しを、生きてゐる我が生身の上に確かめることであり、本仏お釈迦さまを讃え、本仏の一乘法華経をたもってお題目を唱える当処、既に天竜八部はもとより諸天善神は飛び来て、私たちと供に、お題目を唱えられ、私たちを擁護されているのです。

日蓮大聖人の「我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん」と獅子吼された三大誓願はあまりにも有名ですが、この言葉の前提に「詮ずるところは天も捨てたまえ、諸難にもあえ、身命を期（ご）とせん」と啖呵されていることを見落してはなりません。大聖人にあつては命を張つての法華経宣布・国土成仏の実現のためには、天の守護とか無事安穩という条件付きではなかつたのです。利益を求めて鬼神や魔神につき入られてはなりません。神によって成仏は出来ません。唯我一人能為救護と宣言された本仏お釈迦さま唯一人によって成仏は可能となり、成仏の修行の当処におのずから善神の歡喜と守護が起こるのです。

法華一乗血脈譜

本年二月十六日、鷲峰会玉川道場の創立四周年を迎えてお釈迦さまの涅槃会と日蓮大聖人の生誕会を修する砌、法華経講義の会員・町田勝君の出家得度式を挙げるに臨んで「法華一乗血脈譜」と題してその一端を語り、以て仏祖の報恩に擬し、あわせて町君の出家得度を祝福する詞に代えたいと思うものです。

○法華一乗とは、お釈迦さまが説法された法華経二十八品の經典の中の前半・迹門の部門において開顕されたものではありませんが、然しそれは一実相真理という意味のものだけではなく、二十八品全体にわたって開顕された久遠の本仏お釈迦さまの「因行・果徳の二法」「本因本果不二」なる妙法蓮華経の五字のことであり、如来神力品において明らかにされた「如来の一切の所有の法・如来の一切の自在の神力・如来の一切の秘要の蔵・如来の一切の甚深の事」そのものであることは申すまでもありません。そしてこの五字が本仏お釈迦さまの久遠の大本願・大慈悲・大神通として十方無辺に自在に活動している処を、南無妙法蓮華経の七字のお題目というのです。大聖人がこの五字と七字を別々のものとはせず、常に「妙法の五字七字」といい、「南無妙法蓮華経の五字七字」とも仰せられていた所以がここにあります。

○一般には、方便品の十如实相の段に開顕された諸法実相を「般若の空」と同じ範疇の観念的理体としてみなす傾向があり、また従って諸法実相を内容とする一仏乘にしても同様の理体とみなす傾向があるようですが、それはなお天台法門の域を出ないものであって、実は諸法実相という一仏乘というものは、お釈迦

さまの久遠実成の仏身の開顕された如来寿命品の立場から本因本果不二なる実在そのものを指しているのです。

○さて本因とは久遠本来の無始の九界のことであって、九界の地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上・声聞・縁覚・菩薩のそれぞれが、それぞれに無始久遠本来のものであるということです。次に本果とは久遠本来の無始の仏界のことであって、生身のお釈迦さまが生身のまま無始久遠実成の活仏であるということです。そこで本因本果不二ということは、無始の九界と無始の仏界とが、無始久遠劫来、不二相即している実在に外ならないと申されましよう。

○この不二相即している実在を一仏乗とも妙法蓮華経の五字ともいいますが、誠に蓮の華は八葉の花弁と共に果実があり、華果同時・因果不二・九界と仏界の同時相即する実在を端的に象徴しています。蓋し、実在するものは行動するものであり、行動しない実在というものはありません。妙法の五字の実在が、南無妙法蓮華経という七字のお題目の行動となるのですが、この行動に、因より果へ向かう往相門の従因至果の行と、果より因へ向かう還相門の従果向因の行という二種の行が起きて来ます。

通常、因の後に果があり、往相門の後に還相門、従因至果の行の後に従果向因の行が起こるものと思われがちですが、因果不二に立脚すれば往相門も還相門も同一の門、従因至果の行も従果向因の行も同時不二の行であって、この同一の門、同時不二の行を南無妙法蓮華経ということです。

○ところで本因の九界と本果の仏界の同時不二は、久遠の本仏お釈迦さまの仏身そのものの上においても、またそのお釈迦さまと我等九界の衆生との関係においても同様にいい得ることであって、今、お釈迦さまの仏身上についていえば、本仏お釈迦さまは成就された仏果から九界の我等衆生に対して還相門の従果向因の行としての一仏乗を展開されるばかりでなく、みずからの仏身に内包している本因の九界に対して展開されており、同時にその行は、仏身に内包している九界の因位を顧みて展開されている往相門の従因至果の行であるということが出来るのです。お釈迦さまの成道は中印度、仏陀伽耶、尼連禪河畔の菩提樹下に始まるものでなく、実に無始久遠の昔に既に完成されていたものでありながら、その修行は成道によって廃されることなく無始久遠劫来、未来永遠に展開されるものなのです。如来寿量品に、

我れ本、菩薩の道を行じて成ぜし所の寿命、今なお未だ尽きず。また上の数の倍せり。

とは、即ちこのことであって「成ぜし所の寿命」とは本果の寿命だけでなく、その久遠の本果に即する本因の久遠の寿命も意味しているのです。事実、お釈迦さまは三十五才の成道以来八十才の入滅に至るまで、一切衆生を教化されるばかりでなく、みずから常に修行され、毎月の布薩会、雨安後の自恣会にはみずから大衆の前に立たれて懺悔告白をなそうとされておられたのです。御在世中のお釈迦さまは、数知れない仏弟子の中でも最も深く、最も厳しく修行されていたことは事実であり、そしてこの修行は、不滅の滅を現ぜられた仏滅後今日に至る間は言うに及ばず、永劫無終の未来にかけて変わることはありませんでしょう。

○生きとし生けるすべての者は悉く、法華経の信・不信、行・不行にかかわらず久遠の本仏お釈迦さまによって、その本因の九界の衆生として撰取されている者であり、一度も法華経を信じて一仏乗のお題目を唱え奉るその修行は、本仏お釈迦さまの久遠の大本願・大慈悲・大神通による従果向因の仏作・仏行に相即包摂されながら、本仏お釈迦さまの本因行たる従因至果の仏作・仏行を行ずるものと申されましょう。

○法華一仏乗、それは久遠の本仏お釈迦さまの本因本果不二なる体中より発した久遠の仏種であり血肉であって、一仏乗のお題目を受持する処を血脈相承というのです。この血脈は本仏お釈迦さまより本化上行菩薩の日蓮大聖人に相続され、更に法華経を受持する六萬恒河沙の地涌の菩薩へと相続されて行きます。我等もまた永劫に連なる法華一仏乗の血脈に生きる地涌の菩薩の一分として、その全生涯を血脈譜の一点として留めなければなりません。それは世の中に知られる知られぬにかかわらず、血脈譜に生きる者のみ知る処でありましょう。

〈昭和四十九年二月十六日〉

お題目の七字

私は毎月七日か八日頃、十一日の上野峡道場の例祭のため、身延から九州へ西下します。それは、もうかれこれ数年来のならわしになっているものですが、今年も正月八日、身延の釈迦牟尼堂から横浜の猪瀬氏宅へ廻り、年頭のお経をすませて夜行の特急寝台列車「さくら」に乗り込みました。一夜熟睡し早朝列車が広島をすぎた頃、車中の売子からコーヒーと朝刊を求めました。朝刊は正月九日・金曜日の朝日新聞でした。その文化欄に歴史学者中村直勝氏の記事に興味を覚え、新聞を大切に頭陀袋にしまいました。その記事をそのまま前文紹介してみましよう。題は「虹の七色」とされていました。

虹の七色

七日をもって一週間というて、一くぎりにする。その「七」という単位は、どうして生まれたのであろうか。

恐らくそれは、何万年かの太古に太陽太陰の外に、火星水星木星金星土星の五惑星のあることを発見した時「七」という数に、ある種の天意を感じ、「七」をもって尊き数とあがめ、一単位としたのではなからうか。

しかし「七」は必ずしも、六の次の七ではなくして、無限大を表す数でもある。色の白きは七難を隠すとか、七ころび八起きとかいう場合の七は、無限大の意である。楠公のいうた七生報国の念も、幾度も幾度も、という意味である。

それにつけても実に不思議であり、実に妙味のあることは、虹（にじ）の色を七色ときめたことである。

虹の色は、内側の紫から外側の紅まで、細かくいうたならば、何千何万色かになろう。それを、たれがいい初めたか「虹は七色」としたのである。

われわれはそれで、深く考えもしないで虹は七色であると、きめておるのであるが、考えて見ると、虹を七色としたおかげで、虹に神秘観が出たのではないか。假に、虹を「五色」といったら、何となく、ゆとりがない。八色といったならば、締まりがゆるむ。九色とか十一色とかいうたならば、神々しさが消える。

七色というたので虹は一層に美しく見え、思え、仰げるのではないか。七色の橋であるから、神が渡るのではなからうか。

何千何万の数の中から「七」を選び、何万色かを七に縮めて、虹を七色として下さった昔の人に、言い知れぬ敬意をささげたい。

そして、その発想は、中国人であったか、西洋人であったか、それとも印度人であったか、を教えてほしいと至念する。

この文章をよんで、すぐ連想することは、私たちが朝夕に唱えているお題目の字数も、また七字であるということでしょう。「七」という数に神秘性があるからお題目が有難いのでなく、法華経の如来神力品に「如来の一切の所有の法・如来の一切の自在の神力・如来の一切の秘要の蔵・如来の一切の甚深の事、皆この

經において宣示顕説す」とあるように、お題目そのものが如来の一切のそれであるからこそ有難いのであって、七字の数は、たまたま七字であるにすぎません。日蓮大聖人は屢々「お題目の五字・七字」と仰せられています。お題目は数字の神秘性にこだわってはいないのです。

ところで、この文章の中「七は必ずしも六の次の七ではなくして無限大を表す数でもある」といわれていますが、華嚴哲学では、たとえば一という数は、他の一切の無限大の数を悉く内に蔵しつつ、外に対しているからこそ一が二であり、二は一と一とを足したものでなく、二以外のすべての数を無限に内蔵しながら、且つそれらの数に対しておればこそ二としての独自性をもっているものであって、すべての存在は皆それと同様である、とされています。

天台学でいう一念三千の法門も、またこれと同軌であって、一瞬一念の私という一個の人間が、実は三千法界を内蔵しながら、同時に三千法界と相即しておればこそ、唯我一人の私という独自の存在があるのです。私、それは無限を蔵しつつ無限に即しているのです。

無限、それは単なる数ではありません。大聖人が観心本尊抄の中で「一念三千を知らざる者には、仏、大慈悲を起し、妙法五字の内にこの珠をつつみ、末代幼稚の頸にかけさしめたもう」と仰せられた「一念三千」とは、等覚の菩薩さえも計り知ることの出来ない久遠のお釈迦さまの、廣大無辺なる仏知見、慈悲神通・因行果徳そのものなのです。従って一念三千の法門が妙法のお題目の五字の内につつまれているから

といって、お題目を通して一念三千の法門を知的に理解しようとしてはなりません。既にお題目が一念三千の仏知そのものなものですから、お題目を唱える当处、内より外より同時に私をいただきしめている久遠のお釈迦さまの肌にふれ、息吹にふれ、それにつつまれている私の無限の命の尊さを知らねばならないのです。

〈了〉

〈昭和五十一年正月十二日〉

佛勅に生きる人々

昭和五十六年十月十三日は日蓮大聖人の七百遠忌に当たります。今年より数えて五年目です。このため日蓮門下の各宗各教団においても七百遠忌を迎える準備に入り、色々な報恩記念事業を計画し推進しているようです。まことに結構なことですが、蓋し、大聖人への報恩業の第一は、何といつても門下の僧俗の一人一人が、大聖人の生きられたように生きること、即ち、私たち自身が本化地涌千界の菩薩の一人として、生きる、ということではないでしょうか。

本化の菩薩の生き様……それは久遠の本仏お釈迦さまより親しく仏勅をこうむり、その仏勅を護り、その仏勅を一人でも多くの人々に知らしめ、それらの人々と共に、仏勅の宝土を大地の上に涌現せしめるということです。

七百遠忌までの五力年間、この仏勅に生きる生き様を、毎月、月例法話として、自我偈随想のプリントと共に、皆さまのもとへお届けしたいと思えます。この法話は頁数も独自の通し番号で稿を進めたいと思っていますので、自我偈随想とは別にして取りまとめ、別の表紙にしておかれた方がよいと思えます。

法華經における仏勅と付囑と契約

仏勅とは、文字通り本仏お釈迦さまの勅命ということですから。何を勅命されたかといえば、ほかでもありません。ただひたすらに法華經を如法に受持し、如法に護持し、如法に宣布することです。この実践を「如説修行」と申します。修行といえば一般世間では、自分の罪障を消滅す

るためとか、或は功德をつむため、といった場合に多く用いられて来ています。然し法華經の修行とは、そのような小さな利己的なことではなく、如法の受持し、如法の護持し、如法の宣布という、三つの実践をさしているのです。

この実践は、仏勅を奉載しての実践なのですから、「如世尊勅 当具奉行」とも申されています。然し、如何に誠

意をつくして「世尊の勅の如く、当につぶさに行じ奉る」と誓いを立てても、この三つの実践の中、最初の「如法の受持」について、十分なキャリアがなければ、「当につぶさに奉行すべし」という本仏お釈迦さまの勅許は下されないのです。

何故かと申しますれば、たとえば運動選手が、どんなに練習していても、幾多の競技に出場して「勝った」という充分なキャリアがなければ、一国を代表するオリンピックの選手として選抜されることはない、というのと同じことです。お釈迦さまの御在世当時にあつても、たとえ出家が許されて仏弟子となることが出来たとしても、その後、四年間の修行過程を経、修行成績が認められなければ、一人前の沙門となる灌頂儀式が許されませんでした。勿論、例外はあります。初転法輪の鹿野園の五人の比丘をはじめ、次々に仏弟子として出家が許された六十人は、間もなく沙門としての付嘱をうけ、それぞれインド各地への伝道に旅立っています。またクシナガラ郊外の沙羅双樹の下でお釈迦さまが、まさに涅槃に入られようとする最後の夜、お釈迦さまの最後の仏弟子となることの出来たスバドラという老学者は、その夜の中、アラハンの境地に達し、沙門としての灌頂をうけています。灌頂とは、当時一国の王さまが即位する時、王さまの頭に水をそそぐという儀式ですが、この儀式が仏教にそのまま取り入れられたのは、沙門が信

仰世界における人天の王（人天の大導師）となるという意味があつたからでありましょう。このようにお釈迦さまは、仏弟子の信仰の機根に応じて、親しく灌頂儀式を行われたのですが、然し、教団一般としては、出家して灌頂をうけるまでには通常四力年間の修行が必要であるとされていたのです。

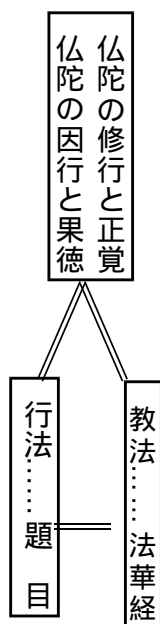
まして法華経は一切経の経王とうたわれ、難信難解・難解難入とまでいわれた経典です。たとえ勅命があつても勅許をうけることは容易なことではありません。この場合、勅許をうけるということは付嘱をうけるということです。付嘱とは教法の付嘱だけではありません。法華経の薬王菩薩本事品第二十三の内では、過去仏である日月浄明徳仏が、まさに涅槃に入られようとするその夜、弟子の一切衆生慧見菩薩（後の薬王菩薩）に対して次のように付嘱しています。

善男子、我れ仏法を以つて汝に囑累（ぞくるい）す。及びもろもろの菩薩・大弟子、並に阿耨多羅三藐三菩提の法、また三千大千の七宝の世界・もろもろの宝樹・宝台、及び給侍の諸天を以つて悉く汝に付す。我が滅度の後、所有の舍利また汝に付嘱す。当に流布せしめ、広く供養をもうくべし。若干（そこばく）千の塔を起つべし。

かくの如く日月淨明德仏、一切衆生慧見菩薩に勅しお
わつて、夜の後分において涅槃に入りたまひぬ。

日月淨明德仏が臨終のまぎわに遺言された言葉は、こ
こでは「勅」すとされていますが、この勅とは、勿論、勅命
の勅ではなく、勅許の勅であつて付嘱を意味しており、付
嘱はそのまま契約をあらわしています。契約については後
で触れておかねばなりません。

ところで、この付嘱の中でいうところの「仏法」とは、
法華經の一仏乘をはじめとして、一仏乘において三乘を説
かれた一切經のすべての教法のことであり、「阿耨多羅三
藐三菩提の法」とは、仏陀として正覺を成就する実践道い
わゆる教法に対する行法のことです。



教法と行法とは、本来、別々のものでなく、不二相即し
ているものです。仏陀の因行果徳そのものを、理論的に法
説・譬説・因縁説という方法を以つて、教義としてあらわ
したものが教法であり、実践体としてあらわしたものが行

法なのです。

如何にすぐれた教法であつても、行法化・実践化されな
ければ、さながら壁に画いた餅、觀念・思索の遊戯にすぎ
ません。

また如何に崇高な行法、驚嘆すべき行法であつても、教
法の裏付けがなければ進路をあやまつてしまつて、ついに
は正覺を成就すること出来ません。教法と行法、それは車
の両輪、鳥の両翼にもたとえられるものでありましよう。

一切衆生慧見菩薩が付嘱をうけたのは、まずこの教法と
行法でした。次に付嘱された「もろもろの菩薩・大弟子」
とは、日月淨明德仏によつて教化されて来たところの権門
迹化の菩薩という無量無辺の菩薩たちと、有能なる二乗声
聞の大弟子たちであり、現に日月淨明德仏の入涅槃を見護
つてゐる遺弟のことです。また「給侍の諸天」というのも、
これまで日月淨明德仏に対して給侍擁護し、天鼓をうち、
マンダラ華をふらして讚歎恭敬の誠を捧げて来た天上の神
々、地上の神々、地中の神々、海中の神々のことです。更
に「三千大千の七宝の世界・もろもろの宝樹・宝台」まで
も付嘱されていますが、これは日月淨明德仏によつて成就
されていた廣大無辺なる常住の淨仏国土と、この仏国土を
莊嚴し、且つは日月淨明德仏が説法の時、常に樹下に坐つ
ていたその宝樹と、宝樹下の宝台（獅子座）のことです。

通常、付嘱といへば教法（行法）付嘱と思われています

が、ここではそれに加えるに遺弟の菩薩・大弟子、給侍の諸天善神までも付嘱され、更に仏国土と使用した宝樹・宝台までも付嘱されていることには注意しなければなりません。然しこれは一国の国王が王位を太子に譲る場合、家臣も領土も領民もそのままそっくり譲るのと同じことである、とも申されましよう。

大切なことは、日月淨明德仏の滅後、その聖体を陀毘に伏して収取される仏舍利までも悉く付嘱され、その仏舍利を広く分散して、若干（そこばく）千の仏舍利塔を立てて供養せよと告勅されていることです。この起塔供養は、土木建築をして落慶供養をすればよいというわけではありません。沢山な仏舍利塔を建てて国土を莊嚴する輪奐の美を整えしめようとすることでもありません。実は起塔供養にあわせて正法を宣布することであり、正法を宣布することによって大衆の帰命礼拝する本尊としての仏舍利塔を建立するということです。

先に一仏乗の付嘱をうけ、一仏乗において三乗をあらわすすべての教法の付嘱もつけ、更に今、一仏乗の行法と仏舎利の付嘱をつけるならば、行法を先として教法を宣布し、仏舎利において三身即一の本尊の大塔を、一塔ならず十塔ならず、正法の宣布される処、無量に建立してゆかねばなりません。無量の菩薩・大弟子・諸天善神の付嘱もまたこの一大仏事を擁護するものであったと申されましよう。

果たせるかな、一切衆生慧見菩薩は八万四千の宝瓶を造つて、八万四千の仏塔を建立しています。それは付嘱された若干（そこばく）千の数より遙かに多いものですが、これで十分に付嘱の上に交わされた契約が果たされたということが出来るでしょうか。一切衆生慧見菩薩は、

我れ、この供養をなすといえども、心なお未だ足らず。

と述懐し、直ちに八万四千の仏塔の前において七万二千歳にわたつて百福莊嚴の臂を燃やし、その光を灯明として日月淨明德仏の不滅の仏身を供養しています。

これが「焼身供養」の先蹤とつたわれるようになったもので、今日でも、この先蹤にならつて臂を焼いて行とする人々は少なくはありません。実は私も終戦の年の翌昭和二十一年の春、佐賀県小城の日親堂において三十五日間断食し、その間二十八日の間、左の臂をローソクで焼く修行をしたことがありました。

修行の目的は、

「日本は破れた。敗戦日本国は、今こそ法華経の宣布によって法華経の国として再建されなければならない。然し、それには私はあまりにも非力である」

「願わくは仏陀よ、私のために仏陀の裳裾の端でもいいから、一目おがませて下さい。その裳裾をおがむことによ

って私は、あたかも予言者の如く、敗戦の国土に天鼓をうって、敢然として立ち上がることが出来るでありましょ

う」
「願わくは日蓮大聖人さま、私のために一言の言葉でもいいから呼びかけて下さい。その肉声をお聞きすることによつて私は、敢然として毒鼓をうって正法宣布に立ち上がることが出来るでありましょ」

お堂の横には、昔、鍋冠（ナベカブ）り日親上人が村の子供に一文（モン）やつては題目を唱えさせたという一文銭川（今の祇園川）が流れていました。毎夜、その川に首までつかつて自我偈五十巻を唱えました。天山おろしの吹雪がまとともに吹きつけていました。川岸には笹藪が黒く水もに垂れていました。

ようやく川の中で五十巻の自我偈が唱え終わると、次はお堂の前の庭の砂利の上に、裸のまま座りこんで再び五十巻の自我偈を唱えました。体は冷え切り、歯の根はあわず、足はとくに感覚をなくしていました。そしてやつとお堂の内に入り、大学の予科時代より着古し、戦場まで持つて行った一枚きりの破れ衣をまきつけて自我偈百巻を唱え、唱えながら左の腕に五本のローソクを立てました。

はじめの中、ローソクの焰に焼ける皮膚は、焼き鳥の臭いでした。焼きつづける中に、焼けあとはガラになり、次に立てたローソクのローはガラにしみこみ、ガラに火がつ

くとガラ全体がもえ、ロー気のなくなるまで火は消えず、ガラの下で化膿した膿まで沸騰し、腕も肩もはれあがり、臭気は腐乱した死体を焼いた悪臭そのものでした。

当時の日親堂は、屋根の半分は破れて空を見、御室前以外は三面壁板もなく、床は六畳の板張りでした。そのうちにテントをはって寝ていましたが、悪臭に胸がむかついて、容易に寝入ることも出来ませんでした。

里人は私のことを狂人ではないかと噂していました。軍隊時代の連隊長が訪ねて来て、

古びたる日親堂の明け暮れや、風や入るらむ、雨やも
るらむ

榎の木の、かたえの御堂、淋しさや、荒れし軒端に、
冬の風ふく

と歌って去ったのも、その頃のことでした。その後、間もなく連隊長が自決したという風の便りがありました。

こうして三十五日間の断食と、二十八日間の焼身行は同時に終わりました。その日は一月一日より始めた百日修行の結願の日でもありました。然し、それにもかかわらずお釈迦さまの裳裾の端すらおがむことも出来ず、大聖人の一言の声さえ聞くことは出来ませんでした。当然の結果であるといえ、それまでのことですが、一時は落胆のあまり、

仏天に見すてられているのではないか、見すてられるどころか顧みもされないのではないのか、と疑ったほどです。

当時、既に村人たちは、私のことを気狂いではなくて、日親上人の生まれ代わりと思って、私の名を呼ぶにも「お日親さん」といつていました。この呼び方は、私が東京開教を志して九州を離れるまで続き、参詣される信徒も、中山荒行堂脱出事件の起こるまで、日に日にふえ、志納される御布施によって、学生時代には買うことも出来なかつた仏教書も求めることが出来るようになっていました。

そして私は、絶望にも似た闇の中にあつて、求めた仏書を読みあさりながら、難行苦行をしないで救われる道、仏天にかえりみもされないようにも思われる業悪の者でも、如何なる幼稚な人々でも、みな平等に救われる一つの道、お釈迦さまが法華經に示された一仏乗とは如何なる教法であるのか、大聖人が唱導された南無妙法蓮華經とは如何なる行法であるのか、という原点に帰って、その第一歩から出直して模索し始めたのです。もう三十年も昔、私が軍隊から復員したばかりの数え年二十六才になった初めの頃の懺悔話です。

私ごとの、若き日のあやまちを申し上げながら、今なお赤面にたえず、脇の下から冷や汗のにじむ思いを禁ずることが出来ませんが、私の焼身供養、いや焼身苦行は、法華經の「如法の受持」の在り方も知らず、敗戦という衝撃の

さ中、護法・宣布に気負い立ち、しかも仏祖とじかに取引をしようとしたものにすぎませんでした。私の左の腕に残された三百本のローソクの焰による傷あとは、法華經信仰の受持のあり方に対するすべてのあやまちを、今なお私自身にみせつけるものです。腕の肉の上の痛みは、すっかり消えてしまっていますが、心の傷の痛みは消えようもありません。人々のあやまつた信仰を見るにつけても、この古傷のうずきが思い出されるものです。

このようなあやまつた焼身供養に対して、一切衆生意見菩薩の焼身供養は、強盛に仏祖に願つたり、迫つたりしたものでなく、修行の在り方、供養の在り方を示したのもでもありませんでした。それはまさしく、日月淨明德仏と契約において、形の上では若干（そこばく）千にも勝る八万四千の仏塔を建立したとはいえ、この仏塔建立に協力し、仏塔の下につどい来る無量の大衆に対してでも、未だに、付嘱された法華一乗の教法と行法を、如法に受持せしめることの出来ていないという事実……如何にも形の上では広宣流布しているようではあつても、法華經をたたえ、仏塔を恭敬礼拝している大衆の一人一人に、未だ如法受持の証が結実してはいないというこの現実……契約の花は広大なる大地一面に咲き誇つてはいても、契約の実は、未だ一粒だにみのらせることの出来ていないこの現状を眼前にして、もはや、これ以上、自分自身としてはどうすること

も出来ない非力を顧みるならば、自ら建立した八万四千の仏塔の前に五体投地し、懺悔しても懺悔しきれない底において、せめて両臂を燃やして灯明とし、その灯明を仏陀に捧げ奉るといふ以外、契約に応えようもなかったのが、一切衆生慧見菩薩の焼身供養であつた、と申されましよう。

私は薬王菩薩本事品の焼身供養を、このように解釈する時、曾て私自身が誤つた焼身供養を行ったことがあつたためでもありません。この菩薩の悶え、うめく、厳しい懺悔に、思わず胸もふさがり、涙のにじむ思いもするのです。そして、にじむ涙の淵に、本化上行菩薩として仏滅後の末法法華経広宣流布の付囑をうけながら、三度も国を諫めて容れられず、靈山会上の契約も果たし得ないまま、時に蒙古襲来という大國難が眼前に迫つておればこそ、謗法の國難を一身に背負つて、法戦の巷鎌倉を去り白雲深き身延の山へと旅立つて行かなければならなかつた日蓮大聖人の後姿が、五体投地して焼身供養する一切衆生慧見菩薩の姿と、二重にだぶつて見えて来るような気がしてならないのです。

經文によれば、この菩薩の焼身供養は「七万二千歳」の長きにわたつて続けられたと記されています。おそらくこの年数は、特定の限定された期間を示すものでなく、無量無辺のすべての人々が、一人一人、大菩提心を起こして、法華経を如法に受持するまでに至る年数をさすものであり

ましよう。若し、すべての人々が十年にして、そのようになつたならば、焼身供養の年数は十年であつたと記されたことでしょう。また若し、百万年もかかたとしたならば、焼身供養は百万年も続けられたと記されたことでしょう。ともかく一切衆生慧見菩薩の焼身供養は、すべての人々が悉く法華経を如法に受持するに至るまで、際限なくつづけられたのです。そしてそれが七万二千歳にして終わつたといふことは、七万二千年目にすべての人々の「如法の受持」が悉く成就したことを告げているのです。經文には、その消息を次のように書き留めています。

無数の声聞を求むる衆・無量阿僧祇の人をして、阿耨多羅三藐三菩提の心を発さしめ、みな現一切色身三昧に住することを得せしむ。

ここにいう「現一切色身三昧」というのは、この經文に、
我れ、現一切色身三昧を得たる、皆これ法華経を聞くことを得る力なり。

と説明されている通り、「如法の聞法」の力、即ち「如法の受持」にほかなりません。それにしても仏陀の付囑に応え、その契約を果たすことは、何と困難なことであり、何

と久しい歳月を要することでしょう。この菩薩は、声聞にして阿羅漢果を求むる無数億の衆生をはじめ、仏法を求めもしない無量無辺の人々をして、一仏乗の大菩提心を起こさしめ、悉く法華経を如法に受持せしめるに七万二千年もかかっているのです。

今日、日蓮門下の僧俗の中で、

「本化上行菩薩の再誕であられた日蓮大聖人が入滅されて、もう既に七百年もたっている。七百年もたったのであるならば大聖人は、もはや菩薩ではなく仏となり、久遠の本仏にならているであろう。いや、きつと本仏そのものになっておられるはずである」

という人が少なくはありません。そしてこれを聞いた殆どの人々は、

「そうですね……そうかも知れませんが……」

と答えたまま、「そうだ」といえば創価学会の日蓮本仏論を認めるようになりそうであり、「そうでない」といえば、自分の家の先祖は成仏しているはずなのに、肝心の大聖人が菩薩でおられることは成仏していないということになって、本末顛倒が起こりそうであり、結局、

「私たちには判りませんね」

と言葉をに「ごしているのが現状のようです。

こういう問答は、言う人も、答える人も、法華経における仏勅とは如何なるものであるのかということも知らず、

付嘱の実体も知らず、付嘱にこめられている本仏と本化の契約さえ知らない愚論というほかはありません。

本化の菩薩は、この契約にもとづく限り、一切衆生意見菩薩の如く、末法一閻浮提の総ての人々に対して一乗信受の大菩提心を起こさしめ、如法の受持の証を、心に信得させ、体に行得させるまで生まれ代わり、死に代わり、如法の宣布を展開しつづけて行くのです。まして地涌千界の上首上行菩薩の再誕であられる大聖人においては、なおさらのことでありましょう。開経偈の末文に、

三世の諸仏、甚深の妙典なり。生々世々、値遇し頂戴せん。

というのも、本化の菩薩の契約にもとづく限りなき誓願をあらわすものであり、報恩抄の大聖人が、

日蓮が慈悲広大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外、未来までも流布すべし。

と仰せられた有名なこの言葉もまた契約による無窮の誓願を披瀝しているのです。勿論、「ここにいう「日蓮が慈悲」とは、自己を誇大視した慈悲でなく、実は誓願慈悲なのです。誓願慈悲とは、久遠の本仏お釈迦さまより法華経

の付嘱をうけ、この付嘱の上に交わした末法万年一閻浮提内広宣流布という契約を、如何なる苦難重畳すると、これに屈せず護り抜き、果たし抜こうと誓願する処に涌発している慈悲心なのです。これほど大誓願は、身を捨て、身を捧げるほどの慈悲がなくてはおこされるものではありません。

然し、この慈悲「日蓮が慈悲」に、「一切衆生の盲目を開ける功德」があり、「無間地獄の道をふさ」いでしまった力がある、と思つてはなりません。その功德も、その力も大聖人の慈悲にそなわっているのではなく、大聖人が受持宣布する題目にそなわっているのです。またそうであればこそ、大聖人の誓願慈悲も起きて来ているのです。

「日蓮が慈悲」……それは大聖人一代六十一年限りの慈悲ではありません。題目は人を介せず独りで「万年の外、未来までも流布」するものではありません。大聖人の生前と同じ忍難慈勝の誓願弘通が、末法万年・尽未来際の長期にわたり、一閻浮提の広きにわたって展開して行けばこそ、題目が広宣流布するのです。

日蓮が慈悲広大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外、未来までも流布すべし。

というこの有名な言葉には、本仏お釈迦さまの付嘱を全身に受けとめて、たとえただ一人であっても、広宣流布の契約（霊山会上的の契約）を果たし通そうとする大誓願がこ

められているのです。

「では、それほどの誓願をもたれた大聖人であるならば、何故、再び生まれ代わって来ないのか。今や全世界は、当時の蒙古襲来にもまさる原水爆の恐れにおののいている時代である。こういう時にこそ、大聖人は出現されるべきであらう。何故、生まれ代わって来ないのか」

という人がいるかも知れません。またそうとは口には出さなくても、心のどこかでは、そのようなことを考えている人々は、決して少なくはないかも知れません。そしてこれに同調して、

「お釈迦さまもお釈迦さまだ。衆生を救済する毎自悲願をもつておられるならば、安楽浄土で常説法教化ばかりされずに、仏滅後二千数百年もたっている今日、再び娑婆世界に応現して、直接、人類を救い、世界を救つてもよいではないか。三界の衆生は悉くこれ吾が子なりというのもよいが、自分ばかりが安楽浄土にいて、そこから説法ばかりしているとは、お釈迦さまでも虫がよすぎるではないか」と不審に思ったり、不平を言う人もいることでしょう。

キリスト教のメシヤ思想も、こうした人々を対象として起きて来たものであつたかも知れませんが。

然し、そういうことを思う人々は、所詮、お釈迦さまの仏勅も知らず、付嘱も知らず、自分自身の誓願慈悲行の実践は柵にあげている傍観者にすぎないのです。傍観者は責

任ももたず実行もせず、ただ人の実行を頼みます。弥勒菩薩が五十六億七千万年の後、地上に仏陀となつて兜卒天（トソツテン）から降つて来るといふ誓願をおこしたと知れば、ウサギが飛び出して来て、木の切株に頭をぶつけて転ぶのを、毎日毎日、仕事もせず腰弁をさげて、切株の近くの藪の陰から、じつと待ちつづけていた農夫のように、そういう時の来るのを待つのです。

真言宗の開祖弘法大師は、その晩年、毎日毎日、少量の水銀を服用し、臨終に際しては、弥勒仏が地上に出現して龍樹下において説法する会座にたつらなることを願い、遺体は火葬にせずミイラとして高野山の奥の院（そこは水銀濃度の最も強い地所）の地中に地下室を造つて、そこに安置するよう遺言したといわれています。

若し、それが史実であるならば、弘法大師も死後は、ウサギを待った農夫と同じ次元の人にすぎなかつたと申されましょう。弘法大師が生前、法華経を大日経・金剛頂経にも劣り、華嚴経にも劣る第三位の經典として下しながら標榜した真言密教の即身成仏義が、まことの即身成仏の因果をもつたものであつたとしたならば、おそらく死後、弥勒再来の会座にたつらなるという願いはいだかなかつたことでしょう。逆にいえば、そういう死後の願いをいだく処に、生前の即身成仏もまちがっていたものと指摘されるのです。弥勒の下生、それはいわゆる、迹化の菩薩の方便誓願にす

ぎません。迹化の人々には、まことしやかなものとして、たたえられもしましょう。然し本化の立場からみれば、鼻持ちならぬ誓願であり、そういうものは当てもされないものなのです。

法華経の付嘱をうけた者、本化の菩薩は、久遠の本仏お釈迦さまの「常説法教化無数億衆生令入於仏道 常に法を説いて無数億の衆生を教化して、仏道に入らしむ」という、時々念々にもやむことなき不断の教化活動の事実を、心魂に徹するように深く強く感じ取っています。また常にそれを感じ取っているならば、お釈迦さまとの契約履行に、懈怠も退転も自分自身に許されるはずはないのです。そして仏子としての誓願求道の行動が、本仏お釈迦さまの常説法教化の行動に常に感応しているならば、自己の行動はお釈迦さまによつて行動せしめられている行動、お釈迦さまの行動が仏子の上に活現されている行動となつていて、そこにはお釈迦さまの地上再来を頼みとする願いは起こりようもないのです。

ましてお釈迦さまとしても、六万恒河沙という無量無辺の本化の菩薩の一人一人に対して、直接みずから法華経を付嘱された以上、一閻浮提内広宣流布の契約の成就するまでは、地上に再来することは、おそらくありえないと申されましょう。

過去仏時代の無量劫の間では、先の過去仏が入滅してよ

り正法・像法の時代をすぎて、まさに末法時代に入ろうとする時、後の過去仏が出現して正法を宣布し、仏法滅尽の危機を救うということが、無数億の過去仏によつて繰り返されて来ました。そしてこの無量の過去仏によつて正法華経の連綿として継承された系譜の最後に出現された仏陀がお釈迦さまであつたのです。このお釈迦さまより法華経の付嘱をうけた本化地涌の菩薩は、実は娑婆大地の下の虚空界にあつて、無始久遠の間、法華経を如法に受持して、付嘱の時を待機し、お釈迦さまの滅後、正法・像法の時代をすぎて末法時代のはじめ（これまでの過去仏時代の伝統であれば、ここで仏陀が出現すべきところ、この仏陀に代わつて）娑婆世界に出現して正法を宣布し、末法万年・尽未來際、一閻浮提内に広宣流布して行くのです。

一切衆生慧見菩薩が名実ともに広宣流布を結実せしめるのに七万二千年を要しました。本化の菩薩がその結実を見るには、それにも勝る年数を要するかも知れません。然し、どんなに気も遠くなるほどの歲月を要しようとも、付嘱をうけるまで大地の下において付嘱の時を待機していた無始久遠の歲月にくらべれば如何ほどのことがありましよう。本化の菩薩は、契約成就の時の来るまで、仏陀の位に登ることなく、生々世々、菩薩として生まれ代わり、広宣流布の誓願をつらぬいて行くのです。

ところで、お釈迦さまの滅後、その末法のはじめに、過

去仏時代の伝統に従うならば、ここでお釈迦さまと等しい仏陀が出現して正法を宣布し、仏法滅尽を救うべきはずであるのにもかかわらず、この時ばかり仏陀は出現せずして、代わりに付嘱をうけていた本化の菩薩が出現するとは如何なる理由によるのか、という問題が起りました。

この問題を解決するには、無量無辺の本化の菩薩に対して、末法万年広宣流布するように法華経を付嘱された本仏お釈迦さまの心底を忖度（ソントク）するほかはありません。おそらく本仏お釈迦さまは、地上に生をうけるすべての人々が一人一人、法華経を如法に受持することによつて、地涌千界の本化の菩薩の再誕という自覚をもたしめ、更に如法の護持と、如法の宣布という化他実践を通して、常に本仏と不二相即するということよりも、本仏胎中の仏子という本化の確証を得せしめようとしたのでありましよう。

地上に仏陀が実在しておられるならば、その仏陀の裳裾をとつて後より従うことはやさしいことです。虎の威をかりる狐という譬えもありますが、仏陀に随順することによつて、仏陀の威光をかりて、あたかも自分の力のように誇ることも出来ましよう。然し、仏陀なき地上において、仏陀の名代となり、仏勅をうけ付嘱をうけた勅使として独り行くほど困難なことはありません。然し自分一人でも立つという実践があつてこそ、本化の確証が得られるのです。

お釈迦さまが鹿野園における初転法輪の当時、六十人の人

々を教化して間もなく、それぞれ伝道へ旅立たせる時、

「二人して行つてはならない。一人して行け」

と仰せられ、みずからも仏弟子一人もともなわず、成道の地ブツダガヤへ引き返して行かれたのも、師を頼みとせず、友を頼みとせず、一人して立つという厳しさの中に、真人の人間形成を計られたのでありましよう。

先に「日蓮が慈悲広大ならば……」という誓願慈悲は大聖人が正法広宣流布を一人で受けて立つた誓願慈悲であったと申しました。本化の菩薩は、本仏お釈迦さまの付嘱を全身にうけて、契約成就にむかつて一人で立つのです。それは「千万人といえども我れ行かん」と威猛け高に気負ったものではありません。受持と護持と宣布とが常に共に如法であるようにと恐れ謹む謙虚な自負に立つのです。

若し、仏滅後の末法の世に仏陀が出現するということがなれば、殆ど衆生は、仏陀の出現を讚歎する前に、既に仏陀に頼ってしまい、広宣流布もその仏陀にまかせて、仏陀の後からついて行こう、ということになつてしまいました。う。それでは衆生一人一人の菩薩行は徹底せず、本化の自覚も確証も起こりにくいものとなつてしまいます。末法悪世に仏陀の出現はなく、仏陀の出現されない末法悪世に、本化の菩薩が出現するようにお釈迦さまが付嘱されたのは、地上に生をつけるすべての人々が漏れなく、一人して立つ雄々しき独立自主の本化の菩薩たらしめようとする大いな

る計らいである、と申されましよう。

今日は組織の時代であるといわれています。組織も大切です。然し組織に頼っている人は何と虚弱なことでしょう。日蓮宗は全国数千ヶ寺という小さな集団にすぎません。それでも小さいながら組織があり、上には管長があり、地方には宗務所長・宗会議員があり、末端には寺院住職・教会担任者がいます。然しそれらは単なる役職にすぎないので。人間の価値は役職によるものではありません。金襴の袈裟・紫の衣が僧侶の価値を決めるものでもありません。一切の肩書き、一切の粉飾、すべての名利をはぎとって赤裸々な一個の人間としてみた時、その人が仏勅に生きる人であるかどうか、本化の菩薩であるかどうかによって価値がきめられるのです。

死んだ後、どんなに立派な戒名がおくられ、どんなに立派な葬式を行い、どんなに立派なお墓を建てても、そういうことは死んだ人の成仏とは殆ど関係はないのです。先に弘法大師の臨終の遺言についてのべ、大師がミイラとなつて弥勒の下生を待つていることを紹介しましたが、この高野山中の埋葬と対比されるのが、大聖人の身延山中の埋葬でありましよう。

弘安五年九月八日、大聖人は波木井実長より贈られた栗鹿毛の名馬に乗り、実長の二男彦次郎実継に警護されて身延山を出、常陸の加倉井の湯へ向かわれました。勿論、湯

治とは表むきの理由でしかありません。大聖人は一人心中秘かに期する処があつて、病める身を栗鹿毛に托し長途の旅に出られたのです。前後十二日を要して武州池上に着いたのは、九月十九日の午の刻（十二時）でした。さつそく身延の波木井実長へ書状をつかわされていますが、弟子日興上人に口述、代筆せしめたものでした。このお手紙を「波木井殿御報」というのですが、その奥書に、これも代筆で、

所労のあいだ、判形をくわえず候こと恐れ入り候

とありますから、書判をしたための筆ももつ力もないほど衰弱されていたのです。重大なことは本文の中で、

九年まで御帰依候ぬる御心ざし、申すばかりなく候え
ば、いづくにて死に候とも、墓をば身延の沢に施させ
候べく候

と申されていることです。これが遺言となつて、翌る十月十三日の辰の刻（朝八時）入滅、翌る十四日戌の刻（午後八時）入棺、子の刻（夜半十二時）密葬、聖体は茶毘にふされ、十六日遺骨を収取して甕に盛り、十九日初七日の法要をすませ、二十一日遺骨は身延へ向かつて池上をたち、

二十五日身延到着、越えて十二月七日の七七日に本葬をいとなみ、御草庵の地に埋葬し、五輪の塔が建てられたのです。この五輪の塔は、現在の八角の御廟塔の内に納められ一般にはおがむことは出来ませんが、この五輪塔と八角の御廟塔については日頃の私の考えがありますので、何時か改めてのべたいと思います。

ここで私が問題とするのは、何故、大聖人が墓を身延の沢（御草庵の地）に建てるように遺言されたのか、ということ。 「波木井殿御報」によれば波木井実長に対して九力年もの間、御帰依された志が言い難いほど有難かつたから、という理由にされています。然しそれだけの理由ではないはず。若し帰依の長きこと、帰依の厚きことを理由とするならば直檀の中、富木入道にすぎざる者はありません。それにもかかわらず富木入道をさしおいて波木井実長に対して、このような遺言をされたのには、別に深い理由が秘められていたと申されましょう。その理由とは一体何であつたのでしょうか。

弘安五年十月七日附けという「波木井殿御書」、これは全くの偽書であり、とりあげるほどのことでもありませんが、その中では、

たとい、いづくにて死に候とも、九箇年の間、心安く法華経を誦誦し奉り候う山なれば、墓をば身延山に立

てさせ給え。未来際までも心は身延山に住むべく候。

と記されています。然し、九力年間、心安く法華経を誦したということが、果たして身延山建墓の理由になるのでしょうか。たしかに鎌倉の松葉ヶ谷の草庵生活や、流罪された伊豆・佐渡の生活に比べれば、身延山では法敵に命をおそわれることも稀であり、寒さと飢えをしのぐならば、比較的安穩であつたといわれるかも知れません。然し本当に大聖人の心中は、心安い暮らしであつたのでしょうか。

先には、身延へ入山される大聖人の心底を忖度して、「本化上行菩薩として仏滅後の末法法華経広宣布の付嘱をうけながら、三度も国を諫めて容れられず、靈山会上の契約も果たし得ないまま、時に蒙古襲来という大國難が眼前に迫つておればこそ、謗法の國難を一身に背負つて、法戦の巷鎌倉を去り白雲深き身延の山へと旅立つて行かなければならなかつた日蓮大聖人」

と申し上げておきましたが、この身延入山当初の心境は、在山九力年の間、日々に増し年々につのつて行かれたのではないのでしょうか。

顧みるならば、鎌倉松葉ヶ谷の焼討ちの法難、伊豆流罪、小松原の白刃、龍ノ口の断頭の刑、そして流人一度配処に送られるならば順徳天皇でさえも帰ることの許されなかつ

た佐渡への流罪、そこには常に死に直面した緊張がありました。そしてその緊張の中で、本仏お釈迦さまとの契約を果さんとする死身弘法の折伏諫曉も積極的に展開することが出来ていました。若し、こうした折伏迹化の決死の弘通の中にあつて、たとえこと半ばにして命を捨てることがあつたとしても、大聖人自身としては本懐とする処であつたことでしょう。文永十年五月、佐渡在島中に弟子檀越へつかわされた「如説修行鈔」の結びの文に、

一期を過ぐるご程もなし、如何に強敵かさなるとも、ゆめゆめ退く心なかれ、恐るる心なかれ。たとい頸をば鋸(のこぎり)にて引き切り、胸をば稜鉞(ひしほこ)を以つて突き、足には絆(ほだし)を打つて、錐(きり)を以つて捫(も)むとも、命のかよわんほどは、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経と唱えて、唱え死に死すならば、釈迦・多宝・十方の諸仏、靈山会上下にして御契約なれば、須臾のほどに飛び来つて、手を取り、肩に引っかけ、靈山へ走り参り給わば、二聖・二天・十羅刹女は受持の者を擁護し、諸天善神は蓋(がい)を指し、旗をあげて、我等を守護して、たしかに寂光の宝刹へ送り給うべきなり。あら嬉しや、あら嬉しや。

と励まされていますが、この激励の言葉は、弟子・檀越を鼓舞する目的だけでなく、日頃の大聖人の信念、特に佐渡流配中に高調していた大聖人の心境を、そのまま吐露したものであることは申すまでもありません。

この文章の中には、はっきりと「靈山会上の契約」という言葉が打ち出されています。「靈山会上の契約」とは、本仏お釈迦さまが本化の菩薩に対して法華経を付嘱し、その付嘱を本化の菩薩が拝受するという、授与・受領の当処に成立しているものであって、この両者の契約によって多宝如来や十方の諸仏が法華経の行者本化の菩薩を誘導するのは、それらの仏が本仏お釈迦さまの分身であり、方便身として、法華経の「令法久住」を本願としているからです。法華経の随所に、多宝如来の涌出・十方の諸仏の来集を「令法久住」のためと申しのべられているのは、実は諸仏が本仏と本化との間に交わされるこの契約を知っていたからです。また二聖・二天・十羅刹女をはじめ天竜八部等の諸天善神が、本化の行者を擁護するというのも、この契約の尊さを知るが故に、本仏お釈迦さまに対して、一人一人、行者擁護を誓約したことによるのです。

このようにしてみるならば、靈山虚空会上（大聖人図頭の大マンダラ全体）は、まさしく契約の場であるとも申されましょう。大マンダラは、仏界と九界とが相對面し、共に唱える題目によって顕現している九一不二の仏国土を圖

示すると同時に、大マンダラを仰ぐ人々をして本仏お釈迦さまとの契約を確認せしめ、契約に立たしめるものであった、ともいうことが出来ましょう。

既に大聖人は、一期の大事として「開目抄」を著され、当身の大事として「觀心本尊抄」を著されているように、佐渡で死すことを覚悟されていました。「光日房御書」に、

大海の底の千引（ちびき）の石は深ぶとも、天よりふる雨は地に落ちずとも、日蓮は、鎌倉へ還るべからず

と仰せられていたほどであり、一門の者が鎌倉幕府に対して赦免運動を起こそうとするを聞かれては「真言諸宗違目」の中で、

日蓮、御免（おんゆるし）をこうむらんと欲するの事を、色に出す弟子は不孝の者なり。敢えて後生をたすくべからず。おのおのこの旨を知れ。

と厳しく叱責されていたほどでした。

ところが文永十一年の年の始め、天変が起こりました。この天変を「法華取要抄」に次の通りのべています。

しかるを今年、佐渡の国の土民、口々に云く、

「今年正月二十三日の申の時（午後四時）に、西方に二つの日出現す。」

或は云く、

「三つの日出現す」等云云。

「二月五日には、東方に明星、二つ並び出ず。その中間は三寸ばかり」等云云。

この大難は日本国先代にも未だこれあらざるか。……

（中略）……この日月等の難は、七難・二十九難・無量の諸難の中に、第一の大悪難なり。……（中略）……

我が門弟、これを見て法華経を信用せよ。眼をいらかして鏡に向うが如し。天のいかるは人に失（とが）あればなり。二の日出ずるは、一国に二つの国王の並び相なり。王と王との鬭争なり。星の日月を犯すは、臣の王を犯す相なり。日と日と競い出ずるは、四天下一同の争論なり。明星並び出ずるは、太子と太子との争論なり。

かくの如く国土乱れて後、上行等の聖人出現し、本門の三つの法門これを建立し、一四天四海一同に妙法蓮華経の広宣流布せんこと疑いならんものか。

大聖人は、この未曾有の天変によって、蒙古襲来は「本年必定」と感得すると同時に、流罪の赦免されることも予

知し、赦免されるならば時を移さず、三度目の国家諫暁を敢行し、諫暁が若し容れられたならば、その時こそ、みずから本化上行菩薩の再誕であることを表明して、本門の本尊、本門の題目、本門の戒壇を天下に建立し、引いては広宣流布の契約も成就するであろうという希望をもたれていたであろうことが、この文章の行間にあふれているようです。

果たして同年二月十四日、幕府より釈免状が下り、釈免状は三月八日大聖人のもとへもたらされました。予期されていた大聖人は、直ちに身边を整え、佐渡の信徒に別れを告げ、三月八日一の谷の誦居を出発し、三月二十六日には鎌倉へ入り、四月八日、覚悟した最後の国家諫暁を敢行されました。この国諫は、大聖人に与えられた最後のチャンスでした。何故ならば、大聖人の予感では蒙古の襲来が眼前に迫っていることが確信されていたからです。若し、この大國難が迫っていなかったならば、大聖人は、第三回目の国諫たとえ容れられなくても、更に第四回・第五回と機会をつくつて、容れられるまで、命の尽きるまで国諫をつづけられたことでしょう。然し、蒙古襲来は本年必定と天の知らしむる処でした。大聖人は、これまでの幾多の死に直面した法難・流難にも討ち漏らされ、生き延びて来た命が燃え尽きるほどの情熱を、最後の機会にかけたことでしょう。

然し、幕府の態度は、大聖人の偉大な靈能を利用して、蒙古襲来の時期を探知すること、その超人的靈能力を、蒙古調伏に利用するというものでしかありませんでした。それは狡猾な為政者の常套手段でもあったといえ、それまでのことも知れませんが、大聖人の対局の読みの深さは、既に佐渡在島中より、諫暁が容れられない時は、直ちに鎌倉を去るという決断までもされていたようです。「高橋入道殿御返事」に、

赦免（ゆ）りて候し時、佐渡の国よりいかなる山中・海辺にも紛（まぎ）れ入るべかりしかども、この事を今一度、平の左衛門に申し聞かせて、日本国に責め残されん衆生を扶（たす）けんがために登りて候ぎ。また申し聞かせ候し後は、鎌倉にあるべきならねば、足にまかせて出でしほどに、

と仰せられていることが、即ちそれです。

三度目の国諫も容れられませんでした。予期していた最悪の時が来しました。即刻鎌倉より遠く旅立つて行かねばなりません。何故、時を移さず鎌倉を去るのか、しかも遠くへ去らねばならないのかというならば、蒙古の襲来が近迫しているため、もはや次の国家諫暁の機会はないと断念した以上、これまでの三度の国諫を、日本国の為政者、すべ

ての宗教者、すべての国民に、強く印象づけることによって、心遂醒悟の時の来るのを待つ、という以外に最良の道はなかったからです。

若し、大聖人が三度目の国諫も容れられないまま、鎌倉に留まっていたならば、世間の人々には、流入再び帰ることなき佐渡ヶ島より、不死鳥の如く舞いもどつたという劇的な生還、これに対する驚愕もさることながら、更に天下も恐れぬ三度目の国家諫暁という衝撃的印象も次第に薄らいで行き、国民全体を心遂醒悟せしめる効果も、何時しか消えてしまうことでしょう。

国諫が容れられなかった以上、この国諫の衝撃を、日本国民全体の心遂醒悟へ結びつけるには、連々と鎌倉に留まっていたはなりません。即刻、たもとをひるがえす如く、席を蹴つて、更に遠く立ち去らねばなりません。

しかも有識者であれば儒教の孝経にいう「君に過ちあらば則ち諫む。三たび諫めて、而も聴かずんば、則ち去る」という言葉は知っており、また伯夷・叔斉の兄弟が、周の武王を諫めて殺されるところを太公望に助けられ、首陽山にかくれて餓死したという故事も有名でした。

ここに大聖人の御遺文中「種々御振御書」に、

本より期せしことなれば、三度国を諫めん用いずば国を去るべし。

「報恩抄」に、

賢人の習い、三度国を諫むるに用いずば、山林に交われ、ということとは定る例なり。

という鎌倉退出、身延入山の理由があげられて来るので、大聖人が行くべきを山に選ばれたことには、中国の賢人の習いにもよりましようが、死者の霊（死霊）は人里より隔絶した山に棲むという日本古代よりの信仰に寄するものがあつたのではないだろうか。

文永八年佐渡へ流され、翌る年の極寒の二月、雪の塚原三味堂の中で著された「開目抄」には、

日蓮といひし者は、去（いぬ）る年九月十二日子丑（ねうし）の時に頸刎（くびは）ねられぬ。これ（開目抄）は魂魄佐渡の国に至りて、返る年（文永九年）の二月、雪中に記して有縁の弟子へ贈れば、おそろしくて怖ろしからず。見ん人、如何におじぬらむ。

これは釈迦・多宝・十方の諸仏の、未来日本国当世を写し給う明鏡なり。記念（かたみ）とも見るべし。

と仰せられた有名な言葉があります。これによれば大聖

人は、龍ノ口の断頭の刑場において、突如として起こった天地の怒りにより奇跡的に刑をまぬがれ、死の島佐渡へ流されて行きましたが、そのことを「魂魄佐渡の国に至る」と表現されています。この表現は決して誇張でもなければ文章を飾る綾でもありません。龍ノ口の法難のすさまじさを目撃した人々、そして生きては帰ることの出来ない佐渡流罪の恐ろしさを知る人々にとっては、まさしく「魂魄佐渡の国に至る」という恐怖の念をぬぐうことは出来なかつたはずで

イエスは十字架にはりつけられました。イエスを慕う人々は皆、天の奇跡が起こることを期待していました。何の奇跡も起こりませんでした。イエスは盗賊と同じように十字架上に血を流して息絶えました。然しその死後、イエスは復活しました。キリストとしての実証でした。キリスト教もここに復活しました。

これに対して大聖人の場合、同じ死刑場であっても、突如、月のような光ものが江ノ島の方角にあらわれて中天を渡り、天地鳴動するという奇跡が起こりました。刑場の人々は魂を奪われ、恐怖のどん底にたたきつけられました。九月十三日の夜も明けようとするのに刑吏すら大聖人のそばによりつけない有様でした。

海の水平線上に太陽が昇った時、龍ノ口の浜に立っている大聖人を仰ぐ人々は、もはや人間ではなく、何か強大な

魔神の如き魂魄が、人間の姿をかりて立っているかのよう
に恐れ、おののいたことでしょう。まして当人の大聖人自
身にあつては、この天地の奇跡、大聖人一人のためにあら
われたこの奇跡を体験する中であつて、これまで心底にウ
ツ勃としていた上行の自覚が、今こそ上行の血汐となつて
全身に横溢していたことでしょう。奇跡によつて一命をと
りため、佐渡流罪となれば「魂魄佐渡の国へ」と仰せられ
るのも道理です。それは独り大聖人だけでなく、奇跡を目
撃した人々の実感であつたことでしょう。大聖人の弟子檀
越でさえも、佐渡から「開目抄」が贈られた時、おじ恐れ
るといふ有様であつたのです。

勿論、ここにいう「魂魄」とは、大聖人にとっては上行
の魂魄であり、世間一般の人々にとっては、生死をつかさ
どる無気味な魔神の如き魂魄という、両様の見方があつた
ことはいふまでもありません。

若し、こういう見方に変わりがなければ、文永十一年
の大聖人の鎌倉帰還にも、両様の見方によつて「魂魄 鎌
倉へ帰る」ということも出来、同年五月十二日大聖人が鎌
倉を去ることも「魂魄 鎌倉を去る」といえ、更に人跡も
稀な甲州の、名もない山の中に分け入るとなれば「魂魄
幽山にかくれる」といふ両様の見方も出来ましよう。いや、
当時の世間の人々は、大聖人が二度と世の中に出て来ない
覚悟で、「死の山」へ分け入つたと思ひこんでいたはずで

す。

大聖人が、鎌倉を去るに当たつて、行く先を甲州の山と
定めたのは、数ある檀越の中、鎌倉の武州の国より最も遠
く離れた国で、しかもその国に最も深い山々を領地として
いるが、身延・波木井・御牧の三ヶ郷の領主波木井実長で
あつたからです。実長という人物をたよつたのでもなけれ
ば、はじめから身延山という山を選んだものではありませ
ん。檀越の領地の中、遠国の深山であればよかつたのです。

文永十一年五月十二日鎌倉を発ち、同月十七日実長の館
（今の鏡田坊）に到着し、この館で「法華取要抄」を撰述
するかたわら、館の正面に見えている溪谷を、身延川ぞい
にのぼり、少しばかり平らかな田代という地所に、柱十二
本という三間四面の草庵を組ませ、六月十七日草庵へ移り、
それより弘安九年九月八日、常陸の湯へと旅立つまで九カ
年の間、山を一步も出なかつたのですが、その草庵の地が、
身延山という山の南面の麓であつたのにすぎません。

身延山は、伝教大師が開いた比叡山や、弘法大師が開い
た高野山にくらべれば、問題にもされないほど小さな山で
しかありません。広い台地一つさえなく、峰は牛の背のよ
うに狭く、眺望も決してよくありません。重畳する甲斐の
山々の山ひだの一つにすぎませんでした。また御草庵も、
北に身延山、南に鷹取山という山々の、屏風のようにそそ
り立つ谷間の底の、昼でさえ日の射すこともない洞窟さな

がらの陰湿な場所ではありませんでした。

それは、当時の鎌倉の人々の目から見れば、身延山は大聖人みずから死に場所として選んだ「死の山」であり、御草庵は、独り静かに死を待つ「死の草庵」にすぎないものであった、といつても決して過言ではなかったことであろう。

大聖人も、そうした世間の眼を、鋭く感じ取つておられたはずで、むしろ世間には、国家諫暁の意志をつらぬいて、名もなき甲州の山の中で、死を待つ人と思わせておかなければなりません。そう思わせておくことが、日本国土にあふれる謗法の人々を、やがて心遂醒悟せしめることにつながるからです。

身延在山九力年の中、八力年もの間の住まいが、三間四面という仮小屋のような粗末な御草庵であったというのも、このためであったことでしょう。地元の波木井実長をはじめ各地の檀越は、幾度となく、もっと快適な場所に、快適な住まいの建築許可を申し出たはずで、然し、その申し出も、遂に弘安四年の第二回の蒙古襲来という国難の去るまで、許されることはありませんでした。

建治二年三月十六日、大聖人の得度の師である清澄山の道善房が逝去しました。その訃報に接した大聖人は、七月二十一日に「報恩抄」上下二巻を脱稿され、弟子の日向上人を清澄山へつかわして、師の墓前に「報恩抄」全巻を

読ましめています。その中に、次の言葉があります。

彼の人（道善房）の御死去と聞くには、火にも入り、水にも沈み、走り立ちても往（ゆ）いて、御墓をもたゝいて、経をも一巻読誦せんとこそ思えども、賢人の習い、心には遁世とは思わねども、人は遁世とこそ思ふらんに、故もなく走り出るならば、末も通らず、と人思ふべし。

ここに「故もなく走り出るならば、末も通らず」というのは、いやしくも国家諫暁を試みて容れられず、殊勝げに賢者の習いに従つて、深山に分け入つたのであれば、たとえ親や師匠が死亡したくらいのもので、国諫の容れられない中は、死んでも山を出るべきでない。若し、そういうことにかこつけて山を出たならば、国諫の節を曲げたもので、賢者というは愚か、むしろ嘲われ者にすぎない。そういうことでは国民の心遂醒悟を期すことは出来なくなつてしまふものである、という意味です。

当時、大聖人の弟子たちは、鎌倉をはじめ各地において法戦を展開していました。そしてそうした弟子たちによつて、布教状態の報告、或は布教上の指導を仰ぐ中に、

「甲斐の山の中に入った日蓮は、今頃、一体何をしてい

る。まだ生きているのか。里が恋しくなつて、のこのこと出て来るのではないか。穴熊のように……」

といったような各地の人々の噂や冷笑も、遂一、大聖人に報告されていた、ということも充分考えられることです。

国民の心遂醒悟は容易なことではありません。一人一人の心遂醒悟は、弟子たちの布教によつて遅々としてでも進むことでしょう。然し、為政者をはじめ国民全体を一挙に心遂醒悟せしめるには国家諫曉、公場対決にしくはありません。然し、それも蒙古襲来という自体の前には断念せざるを得なかつた以上、蒙古襲来こそ、大聖人の国家諫曉に代つて日本国の謗法をいましむる天譴である、という考えは当然起きて来るのです。身延山中でしたためられた大聖人の御遺文の中には、こういう考えが、随所に、しかも力強い言葉で打ち出されています。

然し、蒙古襲来を以つて天譴であるという大聖人の言葉は、決して予言ではありません。日本国全体が上は天皇・幕府の為政者から下は万民に至るまで、大聖人の三度にも及ぶ国諫を受け入れず、心遂醒悟しなかつた以上、迫り来る蒙古襲来という大困難こそ天譴として受けとめてもらいたい。願わくはこれを最後の契機として心遂醒悟してもらいたい、という大聖人のぎりぎりの祈りをあらわしているのです。予言ではありません。祈りなのです。

後世、智慧ある人々が、

「日蓮は蒙古の襲来を予言した。それは天譴であると言つた。然し文永の役でも弘安の役でも蒙古は破れ、日本が勝つた。予言は当たつた。天譴は破れた」

と批判しているようですが、それは大聖人の祈りを知らない者のタワ言にすぎません。

大聖人九九年間の身延山中の生活は、先に「魂魄幽山にかくれる」と申しましたが、たとえその魂魄を、当時の世の人々が山中餓死につながる魂魄と思つていようと、大聖人としては日本国の一切衆生、引いては一閻浮提の一切衆生の心遂醒悟を祈る、祈りそのものの魂魄であり、蒙古襲来を天譴として仰ぎ、仰がしめんと祈らざるを得ない上行の魂魄であつたのです。もはや身延入山の理由としてかかげられて来た「賢者の習い」にしても「伯夷・叔斉の故事」にしても、それは世間の評価に従つた表面的なものにすぎないのであつて、その表面上の理由の底には、本仏お釈迦さまとの契約を、生涯にかけて速かに果たそうとする上行菩薩としての誓願慈悲が、煮え沸るように沸騰していたのです。

ところで法華経の如来寿量品の前段長行の中に「良医と狂子」の物語が説かれています。この物語に出てくる良医とは久遠の本仏お釈迦さまのことであり、狂子とは末法は一切衆生のこと、良薬とは南無妙法蓮華経の題目、そして

良医の使いとは本化の菩薩のことです。

さて、良医には多くの子供がいました。良医の留守の間、子供たちが皆、毒薬とは知らずに、好んでそれを飲んでしまいました。毒が体に廻り、地にのたうって悶乱しました。そこへ父の良医が帰って来ました。良医は冷静に、これまでの医学上のすべての知識と、父親としての愛情をもって、心血をそそいで最高の薬を作り、子供たちに与えました。

ところが、未だ本心を失っていない子供たちは、直ちにその薬を飲んだので、病気はよくなりましたが、毒気深く入って本心を失ってしまった子供たちは、良医がどんなに手をつくしてすすめても、すこしも飲もうともしません。良医は万策つきて、薬を子供たちの前に置き、

「私は所用のため、遠い旅に出かけなければならぬ。暫く帰って来ないけれども、その間に、必ずこの薬を飲むのだよ」

と、くれぐれも言いきかせ、薬を残して遠い遠い旅へ出ました。そして子供たちが父親を恋しく思うようになった頃、使いの者を馳せ帰らせ、悲しみにむせびながらも訴えるように、次の言葉を伝えさせました。

「お父上さまがなくなりました。遠い旅先でなくなりました。お父上さまは旅先でも何時もお子様のことを案ぜられ、置いて来た薬を早く飲んでくれるように、寝言のように申されていました。病気になられて息の引き取られ

る寸前まで、ただそのことばかり申されていました」

子供たちは愕然としました。父の死によって取り残された子供たちは、もはや頼るべき何ものもないことを知って、孤独と悲感のどん底に沈んでしまいました。そしてそのどん底にあって、

「薬があった。父が私のために残しておいてくれた薬があった。飲め、飲めと何時もすすめていた薬があった。遺言までされた薬があった」

と気付きました。父なき今、この薬こそ、父の温かき慈愛と願いのこもっているものと気付いたので。子供たちは、さっそく薬をのみました。毒は忽にして消え、病気はすっかりよくなってしまいました。そこへ父の良医が帰って来ました。親子は抱きあって喜んだということです。

この物語は、八十才でなくなられた生身のお釈迦さまが、実は不滅の仏であり久遠実成の本仏であるということを明らかにするものであって、自我偈の「方便現涅槃 而実不滅度 常住此說法……方便して涅槃を現ず、しかも実には滅度せず、常にここに住して法を説く」ということを、譬え話で教えているのです。

この物語の中で注意しなければならないことは、毒発悶乱している狂子たちを心遂醒悟させるためには、父の良医が、遠い旅に出て、旅先で死んだということを狂子たちに知らしめなければならなかった、ということなのです。

この場合、父の旅は、遠い国での死をよそう「死の旅」でした。旅は我が子の心遂醒悟を、ひたすらに祈りつづける旅でした。毒発悶乱の苦しみを背負い、我が子の呻きに呻く旅でした。そうした旅を重ねた上、「父死せり」と告げる以外に、もはや我が子を救うことの出来ない悲しい父でした。

またこの父に従って「死の旅」を共にした使いの者も、父と同じ悲しみと呻きをせおうものでした。そして「父死せりと告げよ」と命ぜられ、家路を急ぐ「遣使還告」の旅は、狂子を悉く心遂醒悟せしめる全責任の課せられた旅であり、必ず責任を果たすことを誓った契約の旅でした。父子対面の暁に祈る旅でした。

私は、先に大聖人の鎌倉退去について、気障（キザ）にも「魂魄鎌倉を去る」といい、身延入山については「魂魄幽山にかくれる」などと申しましたが、大聖人の鎌倉より身延への旅はまさしく如来寿量品の良医の「死の旅」にならうものであり、身延在山九力年間の生活は遣使還告の勅使の任に堪え、一切衆生の心遂醒悟を祈りつづける生活であり、謗法の国土の呻きに呻き続ける生活であり、そして弘安五年九月八日身延の山を出て、武州池上へ向かう旅は、文字通り「死の旅」であられた、と思つのです。

更に私には、在山九力年間の大聖人の祈りの姿に、八万四千の仏塔の前に五体投地し、一切衆生の心遂醒悟、如法

の法華経の受持、ただそればかりを祈りつづけて七万二千年も、の間、焼身供養をつづけなければならなかった一切衆生意見菩薩（後の薬王菩薩）の姿が思い浮かんで来るのです。

この菩薩の焼身供養の祈りは、七万二千年の後に成就しました。それは日月灯明仏の滅後、正法時代における一切衆生の機根が悉く順縁であつたからです。経文の通りならば、そこには一人の逆縁謗法の法敵もいませんでした。故にこそ順縁の衆生は、この菩薩の焼身供養という生々しき懺悔供養の姿によつて、曾てこの菩薩が日月浄明德仏より付嘱をつける以前、千二百年の間、もろもろの香油を飲み、香油を体にぬり、全身を灯明として、日月浄明德仏と法華経を供養するため、千二百年の間、同じ焼身供養をなした因行を思い起こしたのです。この因行の焼身供養こそ、如法に法華経を聞くことの出来る力、如法受持の力を得たことを感謝するものでした。順縁の衆生は、順縁なればこそ、この菩薩の果徳の行の上にあらわれている因行、護持と宣布の祈りの中にあらわれている受持の祈りを、じかに目撃することによつて、果徳の焼身供養が実は我等がためと知ればこそ、そこにあらわれている如法の受持を、みずからの如法の受持として受け入れることが出来たのです。

因行と果徳は、常に共にあるものです。如何に果徳を説いても、因行を説かなければ正法にはなりません。如何に

法華經の如法の護持宣布を力説しても、説く人自身が如法の受持を行じていなければ、人に如法の受持を期することは出来ません。一切衆生慧見菩薩の付嘱の前後における同じ二つの焼身供養は、このことを物語っているのです。

ところが大聖人の場合は、末法の始め、法敵充滿していました。逆縁のものは大地の如く、順縁のものは爪上の土でした。従つて、当然、大聖人の身延九力年間の祈りは、「極楽百年の修行は、穢土一日の功德に及ばず。正像二千年の弘通は、末法の一時に劣るか」とも仰せられるが如く、七万二千年間の焼身供養にもまさる厳しいものであつたと申されましよう。

一切衆生慧見菩薩の焼身供養の悲願が成就した時、この菩薩の両臂は燃え落ちていました。日月灯明仏よる付嘱された菩薩・大弟子・諸天は皆、両臂のない姿に悲泣しました。それを知つたこの菩薩は、即座に誓願を立て、両臂をもとのように還復せしめています。

然し大聖人身延九力年間の祈りは、何時成就するのでしよう。「衆生病む故に、菩薩病む」とは、居士維摩の言葉ですが、九力年の間には、しばしば病床にふさねばならぬ大聖人でした。四条金吾が漢方の心得で治療に当たつたといわれていますが、大聖人の病氣こそ、幾多の外的理由があつたにせよ、まさしくそれは菩薩の病でした。この病は何時いやされるのでしょうか。謗法の国土の呻きを我が呻

きとされた大聖人の声なき呻きは、何時おさまることが出来るのでしょうか。

「種々御振舞御書」に、

日蓮、さきがけしたり。和党とも二陣・三陣つづいて、迦葉・阿難にも勝れ、天台・伝教にも超えよかし。

という有名な言葉があります。この激励の言葉は、大聖人が上行菩薩として本仏お釈迦さまと付嘱において交わした末法広宣流布という靈山の契約を、その六十一年の生涯にかけて果たすことの出来なかつた場合、その残りの分を大聖人の弟子一門の者が、二陣・三陣と大聖人につづいて分担し、一閻浮提広宣流布の契約を成就するよう、励まされたものであるか、といえれば決してそうではありません。

法華經の付嘱に分担はありません。本仏お釈迦さまは、六万恒河沙の本化の菩薩の一人一人に対して、一閻浮提全域にわたる広宣流布を付嘱され、本化の菩薩もまた一人一人に一閻浮提全域の広宣流布を誓願したのが、「靈山会上の契約」であつたのです。

従つて、「二陣・三陣つづけよかし」と叫ばれた大聖人の大号令は、戦場において、第一陣が占領した敵陣地を乗りこえて、まだ占領されていない敵陣地を第二陣が占領し、残る敵陣地を第三陣が占領するというように、次々に後陣

があらわれて、遂には敵陣地を悉く占領せよ、といわれたのではなく、大聖人の弟子一門としてつづく者は、大聖人の如く一人して靈山の契約成就のために立て、立って前進せよ、そういう者こそ大聖人の二陣・三陣であり、大聖人の如く「迦葉・阿難にも勝れ、天台・伝教にも超え」る本化の菩薩である。本化の菩薩とは、人にたよらず、衆をたのみず、未来永劫、一人して、契約成就にむかつて実践する者である。これが出来ない者は、大聖人の弟子ではない。ましてや大聖人につづく者ではない、と激励されているのです。大聖人にあつては、大聖人に対して忠実であろうとするならば、それよりもまず本仏お釈迦さまに誓った「靈山会上の契約」に忠実でなければならなかった、ということとは申すまでもありません。

お釈迦さまは、成道の後、ブツダガヤで三迦葉兄弟とその弟子たちを教化して以来、旅する時でも、説法される時でも、何時も仏弟子にかこまれていました。多い時は千人を越えることも少なくはありませんでした。それは、もうお釈迦さまの晩年のことでした。ある時、お釈迦さまは静かに生涯の伝道をふりかえりながら、

「これまで私は、独りで歩いて来た。何時も独りだった。これからも独りで歩いて行くだろう」

と仰せられました。居並ぶ仏弟子の殆どの者は、この言

葉をいぶかしげに思ったことでしょう。中には、お釈迦さまの心を感じて、ふるえるような感動を覚えた仏弟子もいたことでしょう。いずれにせよ、この言葉は、あまりにも印象的でした。この印象が経典となつて、今日に伝えられているのですが、おそらくこの一言は、お釈迦さまみずから自分の行為に全責任をもち、説法の一言一言にも全責任をもち、衆生を教化することにも全責任を一身に背負つて、他の人と責任を分かちあうこともせず、責任を他へ転嫁することもなかった、ということにもとづくものでしょう。常に大勢の仏弟子にかこまれていながら、和して同せず、仏陀一人において衆生を我が子といつくしみ、衆生の苦悩に涙したお釈迦さま、それは一人行く仏陀の姿にほかなりません。仏陀は一人で歩くのです。

大聖人もまた一人でした。独りで祈り、独りで折伏迹化し、独りで国家諫暁を敢行し、受難も独りでした。大聖人の弟子・檀越の中には、大聖人と受難を共にした者も少なくはありません。日朗上人は土牢に閉じこめられ、鏡忍房と工藤吉隆は小松原法難に殉死、熱原の百姓甚四郎等は、はりつけにされる弓矢に射殺されています。然しそれらもまた、それぞれに仏勅に生き、仏勅に殉じた姿であつたのです。本化の菩薩の道、それは題目をみずから唱え、人にも唱えしめながら独り歩く道、仏陀と同じ道なのです。

弘安五年九月十九日付の「波木井殿御報」において大聖

人が、

何処にて死に候とも、墓をば身延の沢に施させ候べく候。

と遺言されたのも、波木井実長の帰依の厚きによるものでもなく、また心安く法華経を誦したからでもなく、実に身延入山の当初から、国諫が容れられなかつた以上、押しよせてくる蒙古襲来という眼前の大国難を契機として日本全国民の悉くの人々が、この国難を天譴として受けとめて心遂醒悟する、ということさえも出来なかつた場合には、分け入った身延山を死に場所と定め、地涌千界の至上行菩薩の全責任において、「代受苦」として国土の謗法を一身に背負い、国民の心遂醒悟を祈りつづけ、たとえ死しても上行の魂魄はそのまま同じ身延の山に留め、同じ懺悔と同じ祈りを、末法万年、尽未来際、一閻浮提広宣流布の契約の結実するまで、間断なく、つづけて行かなければならない、これが仏勅をうけた遣使遺告の独り行く上行の道である、と胸中深く秘めておられたからである、と思うのです。

即ち、大聖人は、臨終の近くなつて、墓を身延山に建てるようにきめられたのでなく、既に身延山に入られる当初から、そのようにきめておられたものと拝するのです。若

しそうであるならば、先に私が身延入山のことを「魂魄幽山にかくれる」といったことも、決して思いつきの修辞ではない、と申されましよう。

御遺文の中、どなたに与えられたお手紙であつたか、今その出典を明らかにする暇のないのが残念ですが、大聖人が身延山中から送られたお手紙の中に、

「若し、蒙古の大軍が攻めよせて来た時は、急いで身延山へ逃げておいでなさい。身延山で私と一緒に飢え死にしましよ。」

と仰せられた言葉が思い出されます。この言葉も檀越を慰めようとなされた感傷的なものでなく、その文の底には、大聖人自身、入山当初より身延山を死に場所として定められていた胸中をあらわすもの、と拝されましよ。

なお大聖人が入山に当たつて、国土の謗法、人類の謗法を一身に背負われたということは、建長五年の立教開宗の当初より、既にその決意で布教に立たれたのであつて、折伏迹化も実は世の謗法を背負つた上の折伏迹化であり、身延入山となつては、謗法をせめることも積極的にならなかつた以上、世の謗法の重みが大聖人の一身に、ずっしりとのしかかつて来た、という意味です。

「諫曉八幡抄」に、

涅槃經に云く、「一切衆生異の苦を受くるは、悉くこれ
如来一人の苦なり」等云云。

日蓮云く、「一切衆生の一切の苦を受くるは、悉くこれ
日蓮一人の苦」と申すべし。

という言葉があります。「諫曉八幡抄」には本地垂迹思想があつて私自身、問題の書と思つてはいるのですが、真蹟は富士の大石寺にあるといわれ、立正大学の茂田井師は、右の御真蹟を拝した時「一切の苦」の「一切」は大聖人が訂正して「同一」と書きなおされていたといわれていますが、いずれにしても大聖人が一切衆生の悉く罪の苦を一身に背負われていたことは確かでありましょう。

これを代受苦というのですが、それは人に代わり、家に代わり、社会に代わつて、その苦を一身に受けるといふことであつて、今日でも家の因縁を生滅するために修行する人もあり、出家する人もあり、山伏の修行の中でも代受苦の行がおこなわれているほどです。ましてお釈迦さまや大聖人の伝道が代受苦の伝道であつたことはいふまでもありません。人の苦を背負い、人の苦に呻く呻きこそ、慈悲の悲なのです。悲とは呻きと申されています。一切衆生意見菩薩の焼身供養もまた代受苦の呻きでした。大聖人の生涯も呻きでした。特に身延山九九年の生活は、謗法をせめる

ことも出来ず、謗法の重みに、じつと堪えた呻きでした。そして大聖人滅後七百年の今日、なお大聖人の魂魄は、その重みに堪えながら、人類の心遂醒悟を祈りつづけられているのです。

大聖人を祖師と仰ぐ日蓮門下の者は、大聖人の偉徳をたたえて、大聖人に祈る前に、大聖人が私たちの苦を背負つて祈りつづけて来られた私たちに対する祈りを、まず感じなければなりません。身延山に参詣する者は、身延山の堂塔伽藍に心を奪われることなく、ここで九九年の間、祈りつづけられた大聖人の呻き、そして七百年の今日なお絶えることもない大聖人の呻きを心に聞かねばなりません。この呻きこそ、実に私たち一人一人に対する呻きなのです。

今、身延山の御廟所には、御草庵の趾が史跡として玉垣にかこわれて保存されていますが、御堂もなく、ただ一面に石を敷きつめているにすぎません。参詣者は玉垣の外から七百年前の在りし日の御草庵と、御草庵で祈られた大聖人の姿を偲ぶのですが、私は、大聖人の七百遠忌を迎えるに当たり、この御草庵跡に、大聖人が御在世当時の在十二本という御草庵を復元し、その御宝前に大マンダラをかかげ、大マンダラの前に伊豆海中出現の立像のお釈迦さま（現在京都大本山本國寺の宝物）を勧請し、更にこの御宝前に向かつて詣経されている等身大の大聖人の御尊像を安置し、七百遠忌の昭和五十六年十月十三日午前八時を期し

て未来永劫に消えることのない不滅の灯明を御宝前に点す
べきであると思つのです。

若し、こういう御草庵復元が出来るならば、参拝者は七
百年の昔を、じかに目のあたりに拝し、身延参詣の意義も、
より徹底されることでしよう。身延参詣の意義は、九九年
の間、大聖人が如何に生活され、如何に祈られたかという
ことを肌身に感ずることにあります。私たちのために祈り、
私たちの呻きに呻かれています大聖人の心にふれることです。
この感応なくして、如何に御布施を出して御開帳を受けた
り、御祈祷や法要を厳修してもらつても、それは枝葉末節
にすぎません。何故ならば、そういうことは身延山でなく
ても出来ることであるからです。身延山久遠寺の住職を法
主猥下といい、守塔沙門とも申します。守塔とは大聖人の
お墓を守つて給仕の誠を捧げるといふことです。法主みず
から、本仏お釈迦さまに給仕されている大聖人の小僧とし
て御草庵に仕えねばなりません。そういう意味からしても、
三間四面の御草庵は復元しなければなりません。そして法
主の起居する居間は、現在の大奥水鳴楼より御廟所の常經
殿へ移すべきでありますよ。

身延山久遠寺を西谷より現在地へ移転したのは身延山第
十一世行学院日朝上人でした。日朝上人のこの大土木事業
選定の位置は果たして正しいものであったのでしょうか。
身延川の氾濫、支院の点散をさけて現在地に定めたのであ

つたかも知れませんが、私は理想的には西谷一帯に本院を
建立すべきであったのではないかと思つのです。久遠寺は
あくまでも守塔の寺でなければなりません。住職は守塔沙
門でなければなりません。然るに現在の構造は本院が主体
となり、御廟所は身延山の唯一角にすぎなくなつてしまつ
ています。本末顛倒がここにも起きています。そして、こ
れに気付く人も少ないようです。

私は、身延山の建築構造の改革を主張しているのではあ
りません。大聖人の身延在山九九年の生活を継承するのが
身延山であり、身延に参拝する人々の心でなければならな
いといつてゐるのです。大聖人の如く、仏勅に生き、契約
に一明の身命を捧げる覚悟を新たにする処が身延山である、
といつてゐるのです。

思えば、本仏お釈迦さまの仏勅は、見宝塔品第十一にお
いてお釈迦さまが大音声を以つて一切衆生に対して、

誰か、能くこの娑婆国土において、広く妙法蓮華經を
説かん。今、まさしくこれ時なり。如来、久しからず
して当に涅槃に入るべし。仏、この妙法蓮華經を以つ
て付嘱して在ることあらしめんと欲す。

と告勅されたことに始まっています。六難九易につづく
「此經難持」の宝塔偈もこの告勅のあとに語られました。

二乗声聞の仏弟子たちは、末法娑婆世界の弘教の難をさけて他の国土における布教を誓願しました。迹化の菩薩は勸持品二十行の偈文を以つて仏勅に応えようと思いました。然るにお釈迦さまは迹化の菩薩に安樂行を説き、一仏乘において三乗を説くことを付嘱し、一仏乘はただ本化地涌の菩薩のみに付嘱されました。

仏滅後、法華経を宣布した先師の中、龍樹も世親も、天台も妙楽も伝教も一乗本化の菩薩ではありませんでした。ただ日蓮大聖人一人、本化の上首上行菩薩として出現し、仏勅に答え、付嘱の契約を果たすべく、その六十一年の生涯を捧げられました。

日蓮門下と名乗る者、いやしくも大聖人の二陣・三陣とつづく者は、天台・伝教にも越え、龍樹・迦葉にも勝れたる本化の菩薩の一分として、仏勅を全面的に一身に受けて立たねばなりません。

たとえ一仏乘が理解出来ても本化の菩薩ではありません。題目を唱え行じても本化の菩薩ではありません。仏勅をかしくこみ、契約に立ち、未来永劫この契約結実のため生々世々に如法の受持、如法の護持・如法の宣布を遂行して行く者こそ、本化の菩薩であり大聖人の門下であり、二陣・三

陣の勇者といえるのです。

法華経は内典の孝経であり、法華経によつて、はじめて衆生成仏も完成されるのですが、成仏のためにはまず本化の菩薩を行じなければなりません。先祖の成仏を祈る前にまず先祖が本化の菩薩を行ずるように、みずから先祖の範となり、先達とならねばなりません。

死んで後、来世、仏の浄土に往成しようとするものは、所詮、二乗声聞の類にすぎません。亡き父母の霊を供養する道は、父母の霊をして奮い立たせて本化の菩薩道に生かすことなのです。私たちは父母の霊、先祖の霊と共に、生々世々本化の菩薩行に生きてゆくのです。

私たちは、無始久遠劫来、本化の菩薩として本仏お釈迦さまの付嘱の時を待ちました。これから未来永劫、一天四海皆帰妙法 一閻浮提広宣流布の時の来るまで、生々世々仏勅に生き抜いて行くのです。

「一期をすぎんこと程もなし」「命のかよわん程は、南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経と唱えて」「靈山会の上の契約」を果たして行く法悦にあふれる毎日の私自身でありたい、と願うものです。

この項、終わり

久遠の歩み

前回「仏勅に生きる人々」と題するプリントを皆様のお手許へお送りしました処、これを読まれた人々の中には、随分、戸惑いを覚えられた方もおられたことと思います。

この戸惑いの中、日蓮大聖人の身延入山の心底、お墓を身延山に建てるように遺言された大聖人の心底、そういう文献にあらわれていない大聖人の心の奥底を拝察しようとした私の推論については、それが学説といわれるようなものでもなく、七百年前の大聖人の生涯に対する個人の推理にすぎないものですから、特別、取り立てて論議するほどのことではないとしても、なお、このプリントの中で、

一、たとえ法華経を信じ、如何に広宣流布の誓願を立てていても、「如法の受持」について十分なキャリアがなければ、法華経は付嘱されないということ。

二、本化の菩薩というものは、久遠の本仏お釈迦さまと交わした「広宣流布の契約」が成就するまで、仏界に止住せず、世々番々娑婆において契約達成のため活動するということ。

と述べた私の見解は、読者の現在の信仰に係しているものであり、また暗に読者の信仰の本質的な在り方を問うものとして、読者に戸惑いを起こさせたのではないかと思うのです。即ち、この記事によって、読者の多くは、

「法華経の正しい信仰というものは、久遠の本仏お釈迦さまより直接付嘱を受けなければならないものであったのであろうか。若しそうであるならば、果たして私の信仰は付嘱を受けたものであったのであろうか。もともと私には、そういう畏れ多い付嘱をつけるような資格があったのだろうか」

「若し私が、正しく法華経を信仰している者、いわゆる本化の菩薩の一分であるならば、広宣流布の契約の成

就するまで、仏界に止住せず、生々世々、娑婆世界に生まれ代わって来て、法華経を如法に受持し護持し宣布するという誓願を立てていなければならぬわけだが、よしそういう誓願を立てても、それを生々世々実行することが出来るであろうか。その間、仏界に止住しないというのは、成仏しないということであろうか。たとえ私は成仏しなくてもよいと決心することが出来たとしても、そういう決心を、私の先祖や、私の家族の者、私の子孫の人々に、要求することが出来るであろうか。むしろ、そういう人々の成仏を祈ることこそ本当の菩薩行であるのではないだろうか」

といったような疑問をもたれたことでしょう。

然し、こうした疑問をもたれ、私の記事に戸惑いを感じられた方は、素晴らしい人です。何故ならば、一般の人々は、ただ漠然として信仰していて、自分自身の信仰の本質について何の反省も怠っていないからです。

一般には、死んだ人をホトケといいならわしています。そしてお葬式をすませると、何時かは成仏すると思っ
ています。然しそれは甘い錯覚にすぎません。死んだ人は亡霊にすぎません。そして生まれ代わり難い中有にさまよっているのです。私たちも曾ては、その中有に彷徨していたのです。或は多くの人々は、五体をもつてなおさまよっている亡霊にすぎないかも知れません。

時折、電車やバスに乗った時、思い思いのスタイルをして腰かけている人々と、お寺の位牌堂にらんでいる御位牌と、フト一緒に思うことがあります。お位牌は五体のない死んだ亡霊、車に乗っている人々は、五体をもつた生きた亡霊。事実、現代人の多くは永遠不滅の魂を求めず、ただその日その日の財を求めている亡者の群と
いつても過言ではないかも知れません。

三世不滅の仏陀の道、仏陀に即する菩薩道、この一筋の道が求められなければなりません。仏陀の入滅に悲泣する心、仏陀を求めて恋慕渴仰する心、一心に仏を見たてまつらんとして身を惜しまざる心をとるもどさねばなりません。そういう心は、法華経信仰の最も初歩の段階にすぎませんが、そういう心もなく法華経を信じている気分の人が如何に多いことでしょう。今こそ法華経信仰の本質的在り方が問われなければなりません。すると以上のような疑問をもたれることは素晴らしいことと申されましよう。ここで前回につづいて法華経の「如法の

受持」ということについて述べなければなりません、執筆の時間もあまりない処から、その一部分にふれておきたいと思います。

本仏の胎中から

東京玉川ベリノ鷲峰玉川道場の御信者さんの中に、秋元庸吉さん、みつよさんという夫婦がいます。道場創立以前からの最も古い御信者さんですが、夫婦には長男規志君、次男保男君、三男勇二君という三人の息子さんがいます。もう三人とも大きくなって、規志君も保男君も結婚して親もとより独立していますが、この三人兄弟は皆中学生の頃から両親の指導によって法華經に入ってきて来ました。

規志君と保男君は、高校・大学を通して、年二回・春と夏に開かれた身延山青年行学講習会には必ず、つれだつて参加していました。勇二君も大学の或る夏休み中、アルバイトをして買った自転車に乗って東京から佐渡まで一人で旅行し、佐渡の日蓮大聖人の御靈跡を巡拝していました。三人の書棚の中には、天台の摩訶止観とか、竜樹の中論といった仏書が飾られており、三人ともマンガの本を見るより法華經二十八品の經文をよむ方が面白い、とっていました。三人が勉強のあい間に語ることは、法華經の法門のことばかりでした。御両親も、

「うちには若いお上人さまが三人も居るようだ」

と何時も笑っていました。三人兄弟は何時も家の御宝前の正面の席に座るのを競っていました。そして一旦、その席を確保するや、心ゆくまでお経をあげていました。勿論三人三様、我流の読み方です。人と調子があうはずはありません。だから席を奪いあうのです。

私が秋元家を訪問するようになって、もうかれこれ十数年になります。この兄弟にあうと、挨拶もそこそこに、直ちに本論に入って、

「ね、ね、ここはどういう意味なの」

と、法華經の經典をひもといて質問をはじめるのは今も昔も変わりはありません。そんな質問せめはまだよい方で、私が導師をして皆と一緒にお経をあげる時は、三人とも自己流の調子で地声も大きく、おまけに自己陶醉したような法悦境に入

ってしまうので、お経の調子のあうはずはありません。まるで剣道場で各人各様、勝手に竹刀をふり廻して切りかえしをやっているような乱調子です。はじめの中、読経の基本をしつかり教えておけばよかったと後悔してもあとのまつり、到底自己流の曲はなおらないことでしょう。これからさき何年も何年も、三人兄弟の乱調子のお経とつきあって行かねばなりません。有難くもあり愉快でもあり、また楽しいことです。

さて、この三人兄弟の真ん中の保男君が、新妻の典子さんと二人で、今年の正月六日、新年の挨拶のため玉川道場にやってきました。午後三時から夜の八時まで、咄々として語ったことは勿論法華経のことばかりでしたが、その話の中で保男君が、ふと漏らした一言は、あまりにも印象的でした。私が秋元家の信仰の概要を語って来たのも、実は私の心に鮮明に焼きついた保男君のこの一言を紹介するためであつたのです。保男君はこのように語りました。

「去年の夏休みに、二人で（一人は典子さんのこと）身延の釈迦牟尼堂に、暫く参籠したことがありますね」
申しおくれましたが、二人とも中学校の教師で、保男君は国語の担任、典子さんは社会科の担任でした。夏休みは一緒に休暇がとれていたのです。

「あの時、僕は釈迦牟尼堂のお釈迦さまのお姿を、じいっと見つめてみると、自然に涙がボロボロ溢れて来ていました。涙って、こんなに沢山出るものかな、と思つたくらいです。僕は涙をぬぐいながら、過去世において、ずっと、ずっと昔から、数え切れない無量劫の昔から、このお釈迦さまと一緒にいたのだなあ、と思つていました。そう思つたのが先か、涙が出たのが先か、どちらが先か判りませんが、ともかく、すごく感動していました。感動していたけれど冷静でした。忘れられませんね、釈迦牟尼堂のお釈迦さまとの対面は……。ああいう心境を引き起こしてくれたのも、釈迦牟尼堂のお釈迦さまだからこそ、と思います」
保男君が思い出したように語つたこの言葉の中には、法華経の重大な教えが秘んでいることは申すまでもありません。私は、その真剣さをはぐらかすように、

「それはネ、ヤッチャン（保男君のこと）、最愛の典子さんと二人きりで、釈迦牟尼堂で暮らしていたからだよ」
と笑い飛ばしました。保男君も典子さんも一緒に笑い出しました。ひやかされたと思つたかも知れませんが、話はそれで終つて、別の話に変わって行きましたが、私の言つたことも決して嘘ではないのです。人家から遙かに離れた波木井の山の上の一軒屋である釈迦牟尼堂、訪ねて来る人も稀な台地の上での相愛の二人きりの生活の場であつた釈迦牟尼堂は、実は久

遠の本仏お釈迦さまの胎中の世界であり、胎蔵をあらわす建物でもあったのです。

昭和四十九年十二月八日、波木井の台地の上に、この三間四面の釈迦牟尼堂が建立落慶してより、何時とはなしに、このお堂が靈山虚空会の中核を象徴すると同時に、本化の菩薩がまだ娑婆の大地の下にいた頃の虚空界をも象徴しているもの、というように感じて来ていました。申すまでもなく娑婆の上空における靈山虚空会とは、大地より涌出した六万恒河沙の本化の菩薩が、如来寿量品において久遠実成の本仏お釈迦さまの脇土となり、如来神力品において法華経の別付囑をうけ、未法娑婆世界における一乗広宣流布の契約をなした処であり、娑婆の大地の下の虚空界とは、久遠の昔、久遠の本仏お釈迦さまより直接法華一乗の仏種を下種された六万恒河沙の本化の菩薩たちが、爾来、久遠の間、ただひたすらに一仏乗を如法に受持して来た処です。本化の菩薩の大地涌出、それはあたかも赤ちゃんがお母さんのおなかから生まれて来るにも等しいと申されましょう。ここに本化の菩薩が一仏乗の下種をうけて一仏乗を如法に受持していた娑婆大地の下の虚空界を、本仏お釈迦さまの胎中の世界、胎蔵の世界ということが出来ます。

母親のおなかの中の赤ちゃんも、父親の種と、母親の母胎とがなければ、受胎することは出来ません。たとえ受胎したとしても母親の血肉がなければ、胎児は育ちません。この場合、父親とは久遠の本仏お釈迦さまのことであり、父親の種とは久遠の本仏お釈迦さまの因行果徳の二法である妙法蓮華経の仏種のことであり、おなかの赤ちゃんとは本化の菩薩のこと、そして母親の母胎とは、一仏乗の仏種を如法に受持している当処、即ち本仏お釈迦さまの胎蔵のことであり、胎児をはぐくむ母親の血肉とは、いうまでもなく妙法蓮華経の題目のことでです。

お題目とは、本仏お釈迦さまの因行果徳そのものとして、仏種となり、血肉となるのです。それは、あくまでも本仏お釈迦さまの全人格を結晶し、その全人格より流出したものであって、天然自然に宇宙に遍満するといわれる真理、または理法といったものではありません。

ヘチマのつるにキュウリはなりません。カボチャのつるにスイカは出来ません。種をえらばなければ、どんなに肥料を加えても、願った果実はみりません。それと同様に仏種をえらばなければ、どんなに修行し丹誠しても、成仏は不可能に近いのです。

大乘仏教では「一切衆生悉有仏性」といって、すべての人々には成仏の可能性・成仏の素質があるといわれて来ました。

そこで本具の仏性を開顕しようとして、色々な修行方法が試みられて来ました。然しその修行そのものが、既に相対的であるため、相対的修行のゆきずまりに達して、それを放棄する以外、絶対の世界（仏界）に飛躍・横超することは出来なかつたのです。

天台教学では「本已有善」「本未有善」といつて、人間本具の仏性を開発する能力があるとか無いとか論じ、大体、末法の衆生は機根下劣となつて、既に、そういう能力は全く無くなつてしまつているとして、そういう衆生を成仏へ導くためには、ここに改めて仏種をうえなければならぬ、と説かれて来ました。仏種を衆生の心田にうえることを「下種」といい、下種の種は、本仏お釈迦さまの因行果徳を具足する妙法蓮華經の題目でなければならぬ、というのが日蓮大聖人の立場であり、日蓮宗では法華經の宣布を下種結縁と申して来ました。

然し、「本已有善」であつても「本未有善」であつても、本具の仏性を開発する自己能力があるうと無かろうと、久遠の本仏お釈迦さまの因行果徳の二法である仏種を頂くにこしたことはありません。「本已有善」とか「本未有善」ということは、末法は一切衆生は悉く「本未有善」の者である、本具の仏性を開発する自己能力は全く失われてしまつた者ばかりであるということとを諦観せしめて、下種の題目を受持するほかに成仏の道はないということとを納得せしめる建前のものであつたかも知れません。

然し、おかしなことは日蓮宗でも、法華經を宣布することを下種結縁といつてゐることであり、極端なところでは創価学会が、日蓮大聖人を「下種の本仏」といつてゐることです。大聖人の忍難弘教は、下種の活動ではなく、実は久遠の本仏お釈迦さまによつて、久遠の昔に下種されていた題目を、赤ちゃんが母親のお乳をのむように、即取服之せしめようとされたのです。まして大聖人門下の末輩が、まだ法華經信仰をしていない人々に対して下種を試みようとするのは、おこがましい錯覚というほかはありません。

下種、それは久遠の本仏お釈迦さまより、その因行果徳の仏種が、親しくうえられることであり、ただうえられたばかりでなく、その題目を如法に受持し、靈山虚空会において本仏お釈迦さまの脇士となつて、末法娑婆世界の弘教付囑を受けた人を本化の菩薩といふのです。

従つて、本化の菩薩には、過去無量劫の間、本仏お釈迦さまのそばに片時も離れず随順していたという実感があるのは当

然のことでありましょう。秋元保男君が昨年の夏、身延の釈迦牟尼堂において、現在の自分自身の生存をあらしめる過去が、無数億劫の昔より、眼前に湯仰礼拝するお釈迦さまと、常に共にあったという深い感動を覚え、感動に心をふるわせ、感涙のあふれるのをおさえることが出来なかつたというのも、本化の信仰に入っていたことを証するものでありましょう。私は法座で、「信者さんたちに語る時、

「法華経を信ずる者も、信じない者も、あやまつた信仰をしている人も、無信論者も、神も人間も鳥獣も、生きとし生けるすべてのものは皆、久遠の本仏お釈迦さまに見護られており、毎自護念されている」と、よくのべることがあります。

法華経の普賢菩薩勸発品第二十八にも次のように語られています。

仏、普賢菩薩に告げたまわく、

若し、善男子・善女人、四法を成就せば、如来の滅後において当にこの法華経を得べし。

一には諸仏に護念せらるることを得、

二にはもろもろの徳本を植え、

三には正定聚に入り、

四には一切衆生を救うの心を発せるなり。

善男子・善女人、かくの如く四法を成就せば、如来の滅後において必ずこの経を得ん。

この経文の通りであるならば、今日、法華経を信仰している人々は皆、過去世において、四法成就したという自覚がなければなりません。たとえその自覚が無くても、諸仏護念の光明は、生きとし生けるすべての者に輝いているのです。

然し、たとえそつだという話を何度聞いても、そして聞くたびに、もっともだ、と納得したようであっても、その場かぎりであって、すぐ忘れてしまつのが通常であり、保男君のように身も心もふるえるような感動を覚える人は稀なようです。

保男君の場合、前にも紹介しましたように中学生の頃から法華経の信仰にふれ、高校・大学時代を通して積極的に身延の

青年行学講習会にも参加し、勉学のあい間にも仏教書をひもといて法華教学の理解につとめ、生身のお釈迦さまこそ久遠実成の本仏であると信じ、兄弟きそつて御宝前を読経唱題することを日常としていたのです。だからこそ、あのような感動が心魂の底より吹き上がったのでありましょう。

ここに私は改めて、一人の青年にこのような感動を呼び起こさしめた釈迦牟尼堂の建物と、釈迦牟尼堂の御本尊、そしてこの建立に協力丹誠された方々に対して、心から感謝の意を、表したいと思うのです。

さて、この釈迦牟尼堂の須弥台には、靈山虚空会において法華経々巻別付囑をうけた立像の本化上行日蓮大聖人の尊像を、本仏お釈迦さまの脇仕として勧請していますから、三間四面の釈迦牟尼堂は、法華経付囑の道場であり、同時に法華経如法の受持という立場から「本仏胎中の道場」「胎蔵の道場」ともいうことが出来る、と日頃から思っていたのですが、胎中といい、胎蔵という世界は、母親のおなかの中の赤ちゃんが、外気にもふれず胎中に護られていると同じように、外界にわざわざいされることなく本仏お釈迦さまの久遠の胎中に護られて、如法に法華経を受持している世界のことです。

通常、赤ちゃんは十月十日で生まれるといわれていますから、赤ちゃんの胎中生活は十月十日と申されましょう。処が、本仏お釈迦さまの胎中にある本化の菩薩の胎中生活は、十月十日どころか、数えることも出来ない無数億劫の生活なのです。この胎中の歳月は、同じ本化の菩薩であっても必ずしも一樣ではないかも知れません。六万恒河沙のこの菩薩の中には、久遠の本仏お釈迦さまが日月灯明仏として下種した時の者もいることでしょう。燃灯仏として下種した時の者もいることでしょう。或は大通智勝仏として下種した時の者もいることでしょう。久遠の本仏お釈迦さまが、無量無辺の過去仏として下種されたのであるならば、本化の菩薩の下種された時は、それぞれに違い、胎中歲月も異なっているはずですよ。

然し、たとえ五百億塵点劫の差があるといい、五千塵点劫の差があるといつても、その歳月はいずれも久遠というほかはありません。本化の菩薩は、いずれも久遠の昔に下種され、本仏お釈迦さまの「久遠の胎中」にあつて、末法法華経付囑の時を待機しながら、法華経を如法に受持していたのです。まさにこの時期こそ、迹化の菩薩をはじめ何人も知らない「久遠の受持」「久遠の歩み」と申されましょう。

処が、自分の過去世を法華経の明鏡に照らしてふりかえり、本化の菩薩の中の名もない一粒の存在であつたとしても、銀河世界の中の目にもとまらない一つの小さな星の如きものであつたとしても、まさしく本化の菩薩として久遠の受持の歩み

をなして来たものであるという確証を感動をもつてうけとめるには、理論・理屈でなく、実際に今日只今、本仏お釈迦さまを主師親の本尊として仰ぎ、これにむかつて一心に題目をとなえている実践の中にあつて、題目をとなえ、となえしめられている自分自身の身体が、本仏久遠の胎中より生まれて来たものであるという沸き上がるような喜びとして実感されていなければなりません。

お題目は、本仏お釈迦さまの因行果徳の血であり肉であるはずです。お題目を如法に受持すれば、自然にお題目によつて本仏お釈迦さまの血肉が、お題目を受持する者の血肉となり、本仏お釈迦さまの骨髓もまた行者の骨髓となり、光明も行者の光明となつて来るのです。

それは、本仏お釈迦さまが私たちのためにお題目をとなえ、私たちも本仏お釈迦さまに向かつてお題目をとなえる感応道交のさなかに起こる現象であり、この体験によつて、胎中久遠の歩みが確証されるのです。

久遠の胎中の如法の受持は、外界より護られた摂受の行でした。然し一度胎中より出て末法弘教の付嘱をうければ、それより展開される如法の護持・宣布は、まさしく折伏の行を主とするようになることでしょう。既に大聖人の生涯がそうでした。私たちの久遠の歩みもまたおのずから摂受・折伏の二門にわたつて行かねばなりません。

前回、私は「たとえ法華経を信じ、如何に広宣流布の誓願を立てていても、法華経如法の受持について、十分なキャリアがなければ、法華経は付嘱されない」と申しましたが、このキャリアというものは、今生、法華経を信仰し始めて何年たった、何十年たったという歳月でもなければ、何人の改宗者をつくつたとか、何軒のお寺を建てたということでもなく、或は僧侶として大僧正の位になつたということでもありません。

私のいうキャリアーとは、久遠の本仏お釈迦さまの胎中における本化の菩薩としての如法の受持、その久遠の歩みをいうのです。そしてその歩みは、過去世にさかのぼつて求めうるものでなく、法華経を如法に受持する当処、久遠の本仏お釈迦さまとお題目によつて感応道交する裡に沸き起こる同血・同骨の歡喜の中に確認されるものなのです。

十界互具する矛盾にみちみちた自分自身の心に、本化の菩薩の自覚が起こり、本仏と同血の血汐が、頭の頂上から足の爪さきまで、手・腕の毛細血管にまでみちあふれる時、煩惱熾盛、罪業深重という矛盾だらけの身のままに、無始久遠劫来、本仏の胎中にあつて法華経を如法に受持して来たという輝かしい過去が肯定されるのです。

自分自身の過去の歴史、煩惱と罪業とによつて流転に流転を重ね、生まれ代わり、死に代わり、濁流に押し流され、波間に浮き沈みして来たとはかり思われていた自分自身の過去遠々劫来の流転の歴史とは別に、実は無始以来、今日にいたるまで久遠実成の本仏お釈迦さまの眞の仏子・本化の菩薩として、常に本仏お釈迦さまの仏身に即して離れず、本仏お釈迦さまと共に如法に法華經を受持して来ていた久遠の歴史が、自分自身に内在していたことを知ったということ、そしてそういう輝かしい不滅の歴史こそ、自分自身の本当の過去の歴史であり、その歴史が今ここに開発されたと知ることは、何と素晴らしいことでしょう。そしてそういう輝かしき自己の歴史が、今、題目をたもっている自分の全身に生きています。父母所生の一個の人間が生きているではありません。本化の菩薩として生きてきた悠久の全人格が、今日只今の自分自身に生きています。

曾て日本人には貴種信仰というものがありません。天皇家を中心とする貴族の種を尊敬恭敬する信仰です。然し貴種より尊いものは仏種です。大聖人の「富木尼御前御返事」(建治二年三月二十七日の書)に、

皇妃に成りても何かせん。天に生まれても由なし。龍女が跡をつぎ、摩訶波邪提比丘尼の列につらなるべし。

という言葉があります。貴種・神種よりも仏種の尊さを示すものでもありません。然し、如何に仏種をうえようと、法華經を如法に受持して来たという連綿たる行動歴史がなければなりません。この歴史を背負って立っている者に対して、はじめて末法法滅尽時に処する法華經の付嘱がなされるのです。

法華經の付嘱は、貴種の如何にかかわらず、煩惱熾盛・罪業深重にもかかわりません。老若男女・貧富貴賤を問わず、在家・出家の別、学・無学の相違をこえ、ただ本化の歴史に生きる者にも、法華經が付嘱されるのです。またそういう者でなければ、如何に殊勝な誓願を立てようと、末法法滅時の難に堪えられるものではないのです。

名誉を求めず、財を求めず、ただひたすらに如法受持の歴史に生きて来た人にして、はじめて如法受持の歴史を未来に相續し、仏滅後、正法・像法・末法と衰退して来た仏教の世界的歴史の流れを革新し、本仏・本化の不二常住する本土の歴史を地上に創造することが出来るのです。

未来の歴史の創造へ

法華経提婆達多品第十二に、

仏、もろもろの比丘に告げたまわく、「未来世の中に、若し善男子・善女人あつて、妙法華経の提婆達多品を聞いて、淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は、地獄・餓鬼・畜生におちずして十方の仏前に生ぜん。所生の処には常に此の経を聞かん。若し人天の中に生るれば勝妙の樂を受け、若し仏前にあらば蓮華より化生せん」

と説かれています。ここにいう「蓮華化生」こそ、本化の菩薩が本仏久遠の胎中より出現することでもあるのです。この蓮華化生を、蓮華の中に化生するという意味に解する人もいますが、やはり蓮華より化生するというわけが正しいようです。というのは蓮華の花は夕刻にしぼみ、朝に開きます。それは復活をあらわしているのです。大乘仏教で蓮華が尊ばれるようになったのは、蓮華が復活を象徴していたからです。法華経で「不染世間法如蓮華在水」といわれ、「因果不二」といわれるようになったのは、その後の添加でありましょう。

本化の菩薩は、本因本果不二の仏子として、題目受持、本仏感応の当処、因果不二の蓮華より復活します。そして法華経の付嘱をつけ、胎中久遠の歩みをそのまま未来へつづけ、護持・宣布にともなう幾多の苦難にも屈せず、一人一歩、一乗文化の歴史を創造してゆくのです。